

圖は當り申送る也と殊勝の出家と申き、

〔武功雜記〕

七十

真田左衛門首ヲ西尾仁左衛門取候付、真田カ躰ヲ御尋ア

リシ時、仁左衛門謹テ承リ御請ハシカト申上ス、○下略、野本右近、御宿正友、首ヲ實檢ニ供スルコト

〔老談一言記〕

一

大坂御陣之時、真田討死の様子、大神君よをよろしとい
思召さす、大將さる物よ老似合ぬえらきニ係の由仰有と云々、それハ打死の
前○伊達の日、真田、奥州政宗の手先へむりて、奥方八千挺の鉄炮ハ打すくめ
られ、究竟の郎等二十八餘、とくこれヲ爲小討せり、これハ依て明ル日
の戦以の外おとまりせいふ事、或記ハ見ゆ、○下略

〔落穂集〕

五十

真田左衛門佐ハ茶白山の上へ出先の方ふと、すき寄手此
方を見やり罷在候が、息男大助を呼寄せ、其方儀ハ、昨日此一戦ハ手を
負候へハ、今日そりく敷働ハ成間敷候、其上我等思ふ子細も有之間、只今
の内城中へ歸り、秀頼公此御側ハ罷在、如何にを成果可申旨申聞候へハ、
此表物前ニも罷成候處に、城中へ歸可申段ハ非本意候、何分ニも御手前様
と一所よと存極め候由の斷り、再三に及び多れハ、左衛門佐ハ大助を近く

家康幸村
ズノ働ヲ難

大助歸城
ノ有様

大助ヲ城
ヘ歸ラシ
メシ趣意
ノニツイテ
ノ説

家康幸村
ノ首ヲ實
檢ス

幸村前齒
缺ク

引よせ、何事やらん暫くの間申含め候へハ、大助ハ親の側を立退き、馬に乗
へき躰ハ相見へ候り、左衛門佐方を見やり、とすき居候を、左衛門佐
ハ近習此者、淡以急き罷越候様よとの催促ハ付、馬を乗出し候り、幾度共
あく馬上ハ親の方を見歸り、夫より坂を乗おろし、城中へ罷歸り候と也、稻
垣與右衛門と申者、其節真田ハ手に罷在、直見申せる由にて、物語致候ニ
付書留候也、

右與右衛門申候ハ、大助城中へ歸るは、き旨理申候刻、側近く引寄申含
候趣ハ、何様の義ニ候も不承候へ共、其身無別心、戦死を相遂候と有之義
を、秀頼公へ知らせ可申さめの證人心にて、大助を城中へ返し入る候か
と存候由物語仕候也、

大御所様ハ、越前少將忠直の手へ打取候、真田左衛門佐首を御覽可被遊
との上意ハ付、西尾仁左衛門、茶白山御本陣へ持參仕候處ニ、御覽被遊、真田
儀存生の内終ハ御目見不仕もの故、御見知不被遊、首持參の仁ハ、其首の向
ふ齒かけて有之りと御尋ニ付、口を開見候て、向齒欠ケ有之候と申上候
へハ、仁左衛門方へ御向ひ被遊勝負ハと御尋候處、仁左衛門兎角此御請よ

幸村ノ影武者

東軍眞田勢ヲ破ラントス

不及平伏し罷在候へハ、よき首を取ると上意を被成下、仁左衛門罷立候跡にて御側衆へ御向ひ被遊勝負ハ不致と相見へ候と仰らば候由、略下

〔眞武内傳追加〕

攝州岡山合戦眞田影武者武勇ノ事

元和元年四月、御和睦手切ニ成、亦及合戦、兩御所御會合有テ、敵陣營見セシメ玉フニ、岡山ヨリ庚申堂迄東西二拾餘町ノ間、透間ナク其勢三万計ト言上ス、前將軍聞召、城兵底ヲタ、イテ出タルト見ユ、惣責ト被仰出、但京橋口ヲハ明ラレタリ、岡山眞田陣ヲ破ルコソ肝要ナレ、越前勢跡越後勢ヲ用ユヘキト思シ召シニ、遲參ニ依テ、其代ニ奥州勢ヲ備サセ、縦眞田イカ程奇カ寄術ヲ盡ス共、奥越ノ大軍ヲ差向タラハ、アクミ果敗北スヘシ、伊井井伊カ陣モ、今里村差寄セ、岡山合戦難義タラハ、横鎗ト成ヘシ、土井、榊原モ、木野村東成郡橋本ニ備サセ、眞田強ク働タラハ、後ヨリ切崩セト御下知有テ、兩御所別レサセ給フ、去程、越前舍弟、去年眞田出丸ニ於テ、若干人數ヲ損シ、此度ハ天晴幸村カ首取テ實檢、備ヘント議メ、眞田馬印ヲ目掛押寄ル、幸村公ハ、昨日龜井合戦ニ見シニ替ラス、秀頼公ヨリ賜リタル緋縮、羽織ニ、金ニテ桐トウ、大紋付タルヲ鎧ノ上ニ着シ、諸軍下知ス、越前家長臣本多伊豆守、同彈正、吉田修理

眞田ノ鐵砲隊

御宿正友ノ戦死

等下知ノ、鉄砲ノ者ヲ小船ニ乗セテ、平野川ニ差下シ、横矢ヲ射ント計リシカ共、幸村公方便ヲ以テ、三艘マテ打返ス、兼而幸村公、鐵砲者百五十人備置、騎馬武者ヲ撰、打セヨト計、敵足立自由成方エハ、御宿越前守ヲ大將トシ、究竟騎馬三百余備エ、歩立ハ乗切ントス、越前家ノ鎗奉行野本右近之進、サシヤ戦ヒ、越前ト組テ押ヘテ首ヲ搔、是ヲ見テ、三百余騎色メキ立テ引退ク、城中諸手見崩成テ敗走ス、爰ニ眞田幸村公、御宿カ討シ跡ニ馬印押立、越前勢エ突、菟切落、引組テハ押殺、自猛勇龍虎、アレタル如ク、越前殿旗本ヲ目掛ケ突進、然ルニ越前家ノ勇士、是眞田ト見ケレハ、討取レト馳來ル、眞田組子眞田與左衛門、江原左平太、福岡平三郎、本郷左近、早川平左衛門、眞田勘ケ由、青柳清安、高梨主膳、幸村公カ危キヲ見テ、中ニ隔リ枕ヲナラヘ討死ス、其時野本右近、幸村公カ後ヨリ馬乘廻シ、聲ヲ掛ムツト組ム、幸村公妻手指、抜テ突此手ニヒルム所ヲ首ヲ取ントスル時、西尾仁左衛門來リ、幸村公ト引組テ終ニ首ヲ得タリ、是ヨリ岡山ノ陣散々ニ敗走ス、此旨早速將軍江言上、眞田御宿首御實檢有、既ニ暮ニ及テ燭點メ、眞田首件ノ羽織包、西尾持出ルトキ、御側衆聞シヨリ、若キ年バイ也ト密ニ申ケリ、將軍ニモ可之上意モナク、

西尾仁左衛門ノ影ハ幸村ノ影ニシテ、
右衛門ノ影ハ幸村ノ影ニシテ、
右衛門ノ影ハ幸村ノ影ニシテ、

元和元年五月七日

西尾罷立タリ

梅林居士伝者ノ記ニ、西尾打捕所首影武者二人ノ内望月宇右衛門也然、
越前殿實、真田首ト一途ニ思ワレシ所ヲ將軍ニモ御遠慮有テ實トス、
幸村公ハ四十九歳、望月ハ四十歳也、次ニ御宿カ首、野本手負ナカラ持
出ル、是ハ將軍手柄ナリト御説有ル、但シ後ニ御感ノ御褒美無ハ、真田首
分明ナラサル故也ト云云、

庚申堂真田影武者伏兵、附松平下總殿事

天王寺庚申堂合戰、小笠原兵部父子、城方ノ武田永翁齋、毛利豐前守カ備ヲ
嚴ク攻寄ル、脇備ヘシ淺井周防守、真田采女、福島伊与守、吉田玄蕃等、其外諸
軍一手ト成テ防戰ス、然ルニ本多出雲守忠朝、小笠原家ト討死、約、小笠原強
働乗破ラントスルヲ見テ、本多自身、働鉄棒馬上提、股腕家人十四人左右ニ
隨ヒ、天王寺南門差テ向ヒケル、忠朝無双ノ勇將力量早業萬人ニ勝レタリ、
○中略、忠朝戰死、扱本多、小笠原勇戰、城兵引色見ヘル處、津田平三郎、篠原
小右衛門、小倉作右衛門、大谷大膳、渡邊内藏助、伊木七郎右衛門、庚申堂ヨリ
馳來テ、秘術ヲ盡シ防戰ス、然ル處ニ松平丹後守、立花左近將監、淺野采女正

幸村ノ影武者ノ家康ノ陣ノ説

影武者ノ説ハ誤ナラ

幸村ノ首實檢

松平(下)石見守、真田河内守、同内記、植村主膳正、細川玄蕃頭、酒井宮内少輔、仙石

久兵衛等、大波、如打テ蒐ル、依之城兵防兼テ、皆二丸迄引入タリ、日モ西山、沉
ハ、頓而諸大名、名代、酒井宮内少輔御迎、桑津迄來ル、大御所御駕ニ召、供奉
ノ面々嚴ク南門迄着御成ニ、俄ニ庚申堂六文錢、簾押立三百計、御馬廻ヲ見
懸ケテ討蒐ル、既黄昏ニ及騷、働ス、爰松平下總守、與平是幸村公影武者也ト
テ中取籠散々ニ戰、萬代カ池、天王寺此ノ邊迄攻而、幸村公自身鎗取テ突倒
突伏、下總カ旗本突蒐、サレ共從士三百騎モ大半打ケレハ、是迄トヤ思ケン、
池岸ニテ太刀ヲクワエ、泥中ヘ眞逆ニ落タリケリ、其首ヲ取テ吟味スルニ、
幸村公影武者穴山小助伝者也、幸村公ヨリ年老タリ、紛ナキニ依テ、首ハ飛
田ニ捨シ、其邊遁世者、小助カ勇義ヲ感シ、首ヲ葬タリ、下總守殿ケン察ニ
不違、若年ニ無比類働トテ、大坂落城ノ後城ヲ御預ケアリタリ、
按ニ、右記處、幸村武功記等ニ依有之顯之、然共異ナカンカ、幸村公討死セ
シ事實説ナラン、本實記處分明トス、幸村公首實檢時、家康公何ノ上意ナ
キ杯、説非ナラン、手柄也トノ上意也ト、治世ノ後モ、信政公物語ニ、家康公
モ實檢、節モ深惜マセ玉、左有テ首次、間持來、幸村アヤカリ候ヘトテ、各
元和元年五月七日

彼首ノ髮ノ毛ヲヌキ取、タリ杯トノ説アリ、討死シ玉フ事分明ナラン、然共幸村武功記、或物語、或梅林記等有事、此末ニ爲後考記、幸村大坂籠城物語云、大坂勢悉敗走、諸將討レ、左衛門佐殿モ討死セラレタリ、伝説アリ、首ヲハ西尾仁左衛門得タリ、實檢時、左衛門佐首札(附キ脱ガ)タル首數多有之、西尾得タル首、鹿抱角、甲有依テ、幸村公、首ト定ラルト也、家康公、眞田隱岐守昌、信召テ爲見サセ給ヒハ、隱岐守殿云、幸村首トハ相見ヘ候得共、生命替、タル故、慥申定難クト申上ラレケレハ、家康公御機嫌惡、西尾ハ殊ノ外御褒美上意テ、幸村打タル時、事御尋有、時、西尾申上ハ、誰モ不存十文字鎗、以前後左右ヲ突立土煙ヲ立、雷落カ、ル如、駈廻、某粉骨盡シ、打合、彼ハ戰疲手負タリ、某、新手ナレハ、終、打留タリト言上ス、家康公御機嫌替、西尾退出ス、上意ニ、幸村程、明士、西尾、力戰ノ可憫様ナシ、武道不案内ナル申分惜事哉ト被仰シト也、惜哉ト被仰シハ、如何御堅慮難計ト也、(賢カ)

亦物語云、秀頼公御船ニ而薩州、遁玉、伝事異説也、隱岐守殿一言故、幸村公モ立退タリ、伝ヨリ、疑、秀頼公モ落サセ玉、伝成ヘシ、其頃京童部流行歌、花乃よふある秀頼様を鬼乃よふある眞田うつまゝのたものいゑを

眞田信昌
幸村ノ首
ヲ確認セ

幸村秀頼
ヲ伴ヒテ
薩摩ニ落
チタリト
ノ説

幸村秀頼
及ビ其寵
女於愛ト
阿蘭陀船
ニテ薩摩
リニ逃レ
トノ説

玉川某年
同心毎年
熊野山中
ニ使ス

加護嶋へ

トウタヒケルト也、梅林記、世幸村公阿蘭陀船作、御寵愛女中於愛殿ト主從三人拔出、薩州渡、玉ト云、是浮説伝ヘシ、一旦於愛殿屋敷、阿蘭陀船作、見タル事アレ共、中々二百里海上、水主梶取ナリテハ、渡海成難シ、且島津家、秀頼公ニ何ノヨシミ有テ、思貞(忠カ)盡サルヘキ謂レナシ、秀頼公御母公於愛殿示シ合セ、其外自害メ、公、自害進メ、幸村公御介錯申、其身モ自害シタルト云、説決セリ杯トノ説々區々ナレ、實説取リカマシ、但本書記處分明トス、○中略、幸村、子大助、幸昌、ヲ城、中ニ遣ス、コトニ係ル、又幸村、薩摩ニ逃

眞田大助殿自害附 幸村公事

之○上略、秀頼母子自殺シ、大助

○上、或記云、世治テ後、玉川何某同心一人召連、旅立、勢州參宮ノ、夫ヨリ紀州熊野浦、山何方共不知道、モ無之所、重程行、裏山様成處、餘程、窟有、玉川何某、同心、其窟、口殘置、壹人テ奥深ク入テ、一夜其所ニ逗留シテ被歸タリ、扱夫ヨリ、毎年正月、右之同心計、勢州代參被越タリ、封狀箱、上字計書テ、封目ニ印ヲ付テ、其狀箱重サ鳥目十四計、重キ由、其箱正月十五日ヨリ末、内、彼

元和元年五月七日

八九〇

地着スル様被越タリ、窟口ニ休居候得ハ、白髭モノ、髮髭ハ帶迄モ下リ、七十余歳翁出、件ノ箱ヲ請取無言ニテ又奥入、夫ヨリ暫過返札ト見、狀箱封シ、上書ニ夫イルト計有テ、則其狀箱ヲ玉川ノ祖出、右之説知候譯ハ、右代參行シ同心、病ノ既ニ死セントスルキ、彼女房夫エ申ハ、年月五六拾年モツレ合、最早一日、不知命ト見ニ、不包物語被致候ヘト云、夫何事ヤト云キ、サレハ玉川家毎年代參被行キ、出立前旦那ト密ニ二人ノ、夜明迄物語、夫ヨリ歸ラレシ事八度也、此譯ヲ聞度ト云、夫件ノ譯ヲ云テ、他言無用ト云テ死タリ、

亦紀州九度山比丘物語、大坂落城後、元和二年正月ヨリ、年毎何國共不知士一人來、昌幸公御居所、跡ヲ拜シ、夫ヨリ下山ノ、村家内幸村公御舊縁有シ方ニテ一宿ノ歸リタリ、九年ノ間、毎年參候由比丘考ルニ、幸村公ヨリ御代參ニテ有ヤト申傳、十年メヨリハ誰モ不參、

或人此語ト玉川同心云置トヲ考ニ、幸村公九年間ハ御在世ナランヤ、幸村公七十余歳ニハナケレトモ、數年御辛勞故、殊窟御住居故、御老年ニ見ヘ玉ラント也、按ニ、右之説區々ノ紛紜トシ、信用シ難シ、按ニ玉川之祖ヨ

幸村熊野
山中ニ隱
在九十年
レ世シタ
リトシタ
リトシタ
説タ

元和二年
ヨリ九年
ノ間、昌
山眞田昌
幸眞田昌
ヲ訪フ居
アヲ訪フ
リトシタ
説タ

リ同心云シ、更ヨリシテ惑テ、右説共言出ケンカ、幸村公越前手ニテ討死被逐、大助殿ハ千疊敷、於自害被爲説分明ニ、委事ハナケレト、本書記スル處、實説ナラン、

豆芴公左衛門佐殿事物語

豆州公或時御物語、左衛門佐殿天下武名顯タルハ道理也、生得人カワリタル所多カリシ、物每柔和忍辱ノ騷カラス、言葉スクナニ怒、腹立事ナカリシ、我等クラヘテ云、幸村國郡領スル誠士、謂ツヘシ、予ハ作髭ノ眼怒リヒシヲ張、攻具持ト云ヘキ程、違也、宣ヒシト也、

眞田家親族法名

元和元乙卯五月七日討死 又ハ好白大居士

大光院殿月山傳心大居士

眞田左衛門佐幸村公

〔高野雜記〕

五〇先公實錄

左衛門様、大坂落城後御在命与奉存候、其譯ハ高

野山五り麓橋本、郡橋本町、都与申處ニ、奈良屋角左衛門与申者、九度山一里程隔リ、る所にて、折々ハ御嘶相手ニ罷出、碁あと御相手仕候由、大坂御入城之節、碁盤石共ニ、右角左衛門へ被下候由、此者方へ、落城後、翌春とやら、

元和元年五月七日

八九一

眞田信之
幸村ヲ評
ス

幸村ノ法
名

幸村大坂
落城後五
年間橋本
ノ間、橋本
ノ人、道ニ
使ヲ知シ
タリトシ
説タ

幸村ノ墓

御馬之口之者のよし罷越、相替事も無之哉、我等事も無事也と御口上被仰遣候由右ニ付角左衛門何方ニ被爲入候哉と相尋候處、住所之事ハ申間布様御意之由ニ多不申聞候由、五ヶ年之間、年每一度ツ、右御口之者參り、御口上申聞候處、六ヶ年めふり不罷越候由、右御口之者死去や、又者幸村公御卒去や知レ不申由、右御口之者高野へ御代參やら、又ハ橋本近邊之者よき、毎年宅へ罷越候儀もいゝ、知レ不申由申聞候由、右奈良屋没落致し、子孫當時ハ手習師匠致し、聊のくらしニ御座候、私も寺内相尋候、

〔雍州府志〕

十陵墓門

真田信仍塔

在同院

○妙心寺

是世所謂真田左

衛門尉而有武名之人也、龍安寺大珠院亦有塔、號大光院道白、

〔都林泉名勝圖繪〕

四同安寺

大珠院の林泉ハ、鏡容池西の方ハ巡り、庭

中の美となる、池中の嶋へ石橋渡つとしまし、嶋の中ハ綾杉といふ名木あり、株の皮目ハ歪ありて、綾絹似たり、葉ハ常の杉ハ等し、高三丈計、京師の珍木也、其木下リ墳墓あり、中ハ真田左衛門尉幸村の墓あり、五倫の石塔婆を建て法號を鑄せ、

幸村法號 大光院殿日道光白大居士 十又當年乙卯の五月七日長二

幸村ノ女ノ墓

幸村ノ室 竹林院梅溪永春清大姉

幸村の女の牌名、眞巖一院法樂宗蓮大姉、此人を石河備前守の室家よりて、

眞田氏の家系ニ添え、什寶を寄附し、今當院あり、

普賢像光殿司ノ筆

布袋畫宗達筆

唐畫の鹿筆者不詳

色紙屏風

壹雙

鷹畫金屏風壹雙

南京鉢洲濱形

龍猿ノ畫あり、此外手道具類數品あり、まゝに略し、寺説云、當院を石河備

前守殿の菩提所あり、太平の後、親屬の因縁あり、まゝに建ち、まゝに

ぞ聞えし、

眞田墓

風雷半夜吳王墓、天地清秋伍相祠、成敗古今共陣跡、林泉深處吊軍師、

松葉杜濶略ス

〔御事蹟類典〕

三十一

文化六巳年十一月、大御目附井上美濃守様、古御系圖

并御系譜之内御尋之儀付、御答之趣取調之覺、

一左衛門佐幸村信繁者、初之名ニ候哉之事、

信繁公初之御名と存候、

滋野世記ニ

元和元年五月七日

元和元年五月七日

信繁或信賀、幸重、信氏、幸村、

眞武傳ニハ

幸村、或信次、
又信繁

右之通區々御座候、乍去眞武外傳、并上田軍記、沼田軍記等ニ、源次郎信繁様与有之候得者、御幼名御實名ニ可有御座、幸村公与御改被成候義、何之之書ニも相見不申候、都而系圖ニ認候實名前後与御座候得者、後之名を認、脇ニ初名を記し候事例ニ御座候處、先達而御書上之節、信繁又幸村与御書上御座候、右故此度御尋有之事与被存候、自然此度信繁公御初名之趣御答有之上、先達御書上之認方御不審等可有之哉、若左様之節者、幸村之御名之義者、御當家を御離被成候後之御名、殊更大坂御味方以後、專唱來候御名ニ付、於御家者信繁之御名を以唱來候趣ニ、致御答候得者可然与存候、寛政重修諸家譜ニハ、幸村初信繁トアリ、

〔先公實錄〕

五十六
左衛門佐君傳記稿一 諱

滋野世記

信繁 信賀 幸重 信氏 幸村

諸御系圖

信繁 幸村

幸村ノ花押

烈祖成績 信仍

武林雜話 信賀

泰政錄 信次

古今沼田記 信爲 幸村

武家勸徵記 信成

矢澤系圖 上州我妻郡伊勢
町村林昌寺藏 信爲

諸書 幸村

信繁幸村ノ御諱ノ外ハ、證トスベキ御書所見ナシ、

〔花押彙纂〕

部サ之 眞田幸村



○石合文書(信濃)
九月廿日書狀

元和元年五月七日

元和元年五月七日

八九六

信
七
月
十九
日
書
狀

○小山田文書(信濃松代)三月十九日書狀

信
六
月
十七
日
書
狀

○高野山蓮華定院文書(經伊)六月十七日書狀

〔先公實錄〕

左衛門六佐君傳記稿一

花押

信
原
半
兵
衛
之
相
傳

原半兵衛へ被下御書在之相傳半七郎

信
關
口
角
左
衛
門
之
相
傳

關口角左衛門へ被下御書在之則相傳助九郎幸

信
宮
下
藤
右
衛
門
之
相
傳

宮下藤右衛門へ被下御書在之所藏不知宮下但美虎重寫相傳

信
安
中
平
三
之
相
傳

安中平三へ被下御書在之相傳鹿野惣兵衛

元和元年五月七日

八九七

元和元年五月七日

八九八

河原右京亮へ被下御書在之、綱徳相傳

カキ入
信濃

〔小山田文書〕

松代信濃

幸村大坂
中ヨリ
城許へ
消息

たより御さ候まゝ、一筆申あげ候さても、こんとふまよの事にて御と
りあひニ成申、且れ、こゝもとへまいり申候きつういと御すいごや
う候へく候、たゝしまつゝあひすゑ、且れ、こゝもあま申さす候、御けさん
にて申たく候、あすまうはり候はん、まらす候へとも、あま事あく候、まゆ
せんとのこも、さいゝあひ申候へとも、こゝもととりこゝい申候まゝ、心
まつり申うけさぬいらす候、こゝもあま事あく候まゝ、御心やまゝ
候へく候、くゝ申たく候へとも、此ものいそきさちあうら申入候まゝ、
さうゝ申候、うさきて申入候へく候、と、

正月廿四日 元和元年

三日月あ、信濃
カキ入

山田文書

せんとのニもさいくあひ申候へとも、こゝもととりこゝい申候まゝ、心
まつり申うけさぬらす候、こゝもとあふ事もあく候まゝ、御心やそく
候へく候、くはく申たく候へとも、此ものいそきさちあうら申入候まゝ、心
さうく申候、うさきて申入候へく候、と、

正月廿四日 元和元年

真田幸村書状

信濃小山田太郎氏所藏

原寸 縦五寸二分
横三尺五分

（The main body of the document contains several lines of handwritten Japanese text in cursive style, which is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side. Some characters are difficult to decipher but appear to be a formal letter or report.)

Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, likely a letter or document fragment. The text is written on a strip of paper pasted onto a larger sheet. The characters are fluid and connected, typical of the cursive style. The text is arranged in approximately 15 vertical columns, reading from right to left. The characters are dark ink on a light-colored paper background.

版製所版製眞寫本日

大坂城中
ノ情狀

幸村ノ覺
悟

むらまつへゐる

さへもんの

せけ之堅ノ奥書ニハ小山田
ノ姉ハトアリ、寛政重修諸家
譜ニハト妹ニ係ケタリ

尙々別紙ニ可申入候へとも、指儀無之候、又御使如存候、少用取亂申、早
々如此候、何も追ふ具可申入候、以上、

遠路預御使札候、其元相替儀無之由、具承、致満足候、爰元ニおつても無事ニ
候、可御心安候、我等身上之儀、殿様御懇比も大ウ々の事にてハ無之候へと
も、萬氣遣乃ミにて御座候、一日くらくら申候、面上ニあらて委不得申
候間、中々書中不具候、様子御使可申候、當年中も静ニ御座候者、何とそ仕、以
面申承度存候、御床敷事山々にて候、ささめあき浮世にて候へを、一日さき
ハ不知事候、我ら事あとい、浮世よあるものとい、おほいめ候ぬく候、恐
々謹言、

真左衛門佐

信繁花押

三月十九日 元和
元年 五月七日

元和元年五月七日

九〇〇

小 壹岐様

同 主膳殿御報

〔石合文書〕

濃〇信

父子事御安事、作兵衛方迄御尋尤候、我等籠城之上ハ、必死ハ相極候間、此世
よて面談ハ有之間敷候、何事もそへく心よ不叶き候共、御見捨無之やうよ
頼入候、委者惣右可申候、謹言、

二月十日 〇元和元年

眞 左衛門佐

石合十藏殿

〔高野山文書〕

蓮花定院

猶々、つ不二こ一申候、まやうちうのきとのと申候、御座候者、此外ニも
取申度候、猶此者可申入候、

其後不申承候、仍、此つ不ニまやうちう御はめ候て可給候、今程無御座候者
次而御座候折節頼入申候、御むつしく候共、口能御はめ、其上御えり候て
可給候、御左右次第、重る取ニ可進之候、又此式ニ候へとも、ゆかさひら一進
之候、其元御隙ニ与風御下候へくしと存候、恐々謹言、

幸村燒耐
ヲ所望ス

幸村死ヲ
期ス

眞 好白

信繁花押

六月廿三日

左京殿 参

以上

尊札忝存候、如仰之先度早々御歸候而御殘多存候、仍、天野へ御越之由、我等
も參見物仕度候へとも、腹中相煩申候間、參間敷候、其元御隙明候者、ちとち
と御立寄可被成候、恐々謹言、

眞 左衛

信繁(花押)

六月十七日

蓮花定様 □

〔先公實錄〕

五十九 左衛門佐君傳記稿四

自書

關口助九郎幸則相傳

己上

一書狀并勘定之日記指上候、具ニ令披見候事、
一新吉家内改判金三枚、砂金拾六匁八分指上候、慥ニ請取候事、

幸村金錢
ヲ借ル

元和元年五月七日

九〇一

元和元年五月七日

九〇二

一 永樂九貫文、杉二郎左衛門尉所ニ置候由尤ニ候事、
一 半兵衛、市之丞借用之判金壹枚宛指上候儘ニ請取候事、

九月十五日

信繁御花押

表關角左衛門殿

左衛門

裏

自伏見

所藏不知

同上

爰許火事ニ付多、爲見廻預飛札令満足候、

一 御借金四拾兩壹了之内小判拾兩儘ニ相届候事、

一 百兩之合力未進之内二兩三了相届候事、

一 其方り代官所^(成カ)之算用之一紙被指越候、令披見候、右之算用之拂殘金子
貳了銀子拾四匁相届候事、

一 御借シ俵子之儀者、寒松院様可被召遣候由御尤候事、

一 右御借儀之金子原半所へ被仰付候由承候此方へハ何共不申越候へ共、
我等所るも半兵へ方へ書狀指越候、彌於于其許相調候様ニ、其方肝煎頼
入候事、

一 銀子廿匁給候、令祝着候、但不謂氣遣ニ候、

一 寒天之時分、普請も成兼候へ共、家一ツ申付出来候間、今日本之屋敷へ移
申事、萬事推量候多可給候、委細此者可申候、恐々謹言、

十二月廿九日

左衛門佐

池田長門守殿

御花押

綱德謹テ按ズルニ、此御書高野山ヨリ被下シナルベシ、長門守ハ御配流
ノ御供十六人ノ内也、但御家老○眞田薨去後、信繁君ヨリ御暇玉ハリ
歸國セシト云、

摸寫

原半七郎昌敬相傳

追ふ前山へ出候うるし、此方へ可指上候旨、次郎左衛門尉すく申遣候、
其段可被相心得候、以上、

金子指上候、何も相届、則手形此者ニ指下候、

一 其方申付候分、別る領所念を入、無人所ニ者、百姓仕付、あまめもあきやう
ニ申付候由承候、一段令満足候、彌々何事も能様ニ可申付候事、

一 其元俵子之うりりい悪候者、先金子上せ候事ハ無用ニ候、此方へ左右

元和元年五月七日

九〇三

元和元年五月七日

九〇四

次第二可指上、

一、其方申付候分、別の領所念を入、無人所ニ者百姓仕付あまめもあきやう
ニ申付候由承候、一段令満足候、令祝着候、猶此者ニ申遣候也、恐々謹言、

左衛門佐

信繁花押

三月廿九日

原半兵衛殿

摸寫

綱徳相傳

以上

預示令満足候御供よて御上候由大儀共よて候、此地御見廻之事ハ、念入事
候次ニ爰元替事も無之候、可御心安候猶重る恐々謹言、

左衛門入

信繁花押

三月廿五日

河原右京助殿

幸村ノ系譜

〔真田系譜稿〕

上 昌幸 安房守

女子 小山田壹岐守茂誠室、

信之 守伊豆

幸村 左衛門佐、從五位下、幼名御辨丸、源次郎、始信繁、高野山居中、稱好白、

母者同信之、晴季女、永祿十年丁卯誕生、室者大谷刑部少輔吉隆女、

慶長二十年乙卯五月七日、於攝津國大坂戰歿、年四十九、法名大光

院殿月山傳心大居士、葬地不詳、牌所信濃國埴科郡松代禪宗真田

山長國寺、室終年月日不詳、法名竹林院梅溪永春清大姉、葬地

不詳、牌所山城國京北山禪宗龍安寺塔頭大珠院、

女子 真田長兵衛幸政室、

女子 鎌原宮内少輔重春室、

女子 保科彈正忠正光室、

女子 瀧川三九郎一積室、

信勝 助左馬

昌親 内匠、藏人、主計、幼名源五郎、

女子 妻木彦右衛門頼照室、

元和元年五月七日

九〇五

元和元年五月七日

女子 樂

女子 堀田作兵衛興重養女、石谷十藏道定妻、

母者家女堀田作兵衛興重女、寛永十九年壬午十月廿八日終、法名松屋壽貞大姉、葬地信濃國小縣郡長久保村禪宗長安寺、

女子

母者同右、於紀伊國九度山村終、年月日不詳、法名葬地不詳、

女子

片倉小十郎景長室、(重)長○重綱後重

母者大谷刑部少輔吉隆女、終年月日不詳、法名葬地不詳、

女子

蒲生源左衛門郷喜室、

母者同右、終年月日不詳、法名葬地不詳、

幸昌 大助

母者同右、慶長七年壬寅於紀伊國九度山村誕生、慶長二十年乙卯五

月八日、於攝津國大坂城自裁、年十四、法名直入全孝大居士、葬地不詳、

牌所信濃國埴科郡松代禪宗真田山長國寺、

女子 石河備前守室、

一女片倉
重綱二嫁

幸村ノ子
女

某 大八、

母者同右、終年月日不詳、法名葬地不詳、

女子

母者同右、終年月日不詳、法名真巖一院法樂宗蓮大姉、葬地不詳、
牌所山城國京北山禪宗龍安寺塔頭大珠院、

〔先公實錄〕

左衛門佐君傳記稿一 子息

一紙 左衛門様御子息女子覺

おゐこり様 〇本書所載他ノ一紙ニハ「おいち様、お梅様、

大助様 寅年、

おいち様 九度山ニ

お梅様 是ハ奥片倉小

おまよぬ様

おろ糸様

大八様 京ニて、五月五日、印地

元和元年五月七日

幸村ノ風

幸村徳川氏ニ不吉ナル村正ノ刀ヲ帶ス

元和元年五月七日

九〇八

〔長澤聞書〕 眞田左衛門ハ四十四五も見へ申候、心まひ口に二三寸程の疵跡有之、小兵成人よき候、

〔西山遺事〕 三 西山公御咄し此序は被仰候者、眞田左衛門信仍世云幸村と云、幸村ハハ東照宮へ御敵對仕候、其はハより千子村正ハ大小を常ハ身ハ茂離さハ指ハ其故ハ村正ハ道具ハ、當家へ祟り候と申説を、信仍聞ハ當家調伏の心ハよハのハ志ハを盡ハ候事尤ハ思召候、

〔翁草〕 百五 眞田左衛門佐信仍略譜

眞田左衛門佐、名を世に幸村と覺ハたり、水戸西山公御穿鑿の上幸村は非なり、信仍と仰られし由、西山遺事に見ハたり、仍の字の訓は付けられず、諸録系圖等には悉く幸村と有り、續武者物語計には、左衛門佐信シ繁と有り、依之考るに、若くは仍の字をシゲと訓するにや、猶可追考、
信仍佩劍は、雙方共に千子村正なり、村正作の物は、清康公以來御三代共に御過有之に仍、御家に於て御停止なり、依之世上一統に村正の作廢れり、信仍急度思ひ測て、自の佩刀を悉く村正を用ふ、是當敵降伏呪咀の心

幸村ノ性質

幸村ニ對スル評論 三人衆

五人衆 長曾我部 眞田毛利 後藤明石 五人ノ劣

なるべし、西山公殊に此事杯を稱嘆有て、武士の志は最斯こそ有べけれ、誑敷信仍が心の嗜なり、總じて城中に純一成ものは、信仍に不如と宣ひしとぞ、信仍生質屈僻ならず、常に人に交るに笑語多く和せり、譬へば大野が士に遇ては、目利はさぞ上りつらんなど云て興ハ、而も和にして嚴なれば、諸士の怖懐く事、餘將とは頗る懸隔せりと云り、

大坂へ馳籠る諸浪士の中、長曾我部宮内大輔盛親、眞田左衛門佐信仍、毛利豊前守勝永は、元來大名なれば、城中に於ても、格別の會釋にて、三人衆と號し、萬の商議も、此三將の意に洩る、事なく、銘々恩顧の手の者共も、追々ハに馳集つて、舊主を守護し、其威尤諸浪士の冠たり、氏家内膳正入道も、江州水イニ勢州桑名口城の舊主なれ共、年老勢ひ盡ての上なれば、大將の任を辭して、御伽衆の如くにて御前に候す、又後藤又兵衛基次、明石掃部介全登タケノリは、元來陪臣なれ共、世に聞ハたる功士なれば、三人衆に列して、軍議に加へんことを、大野修理頼りに執し、三將許容の上、秀頼公より此兩人を上將に取立られ、夫よりは五人衆と稱して、諸將に上首せり、偕此五人の優劣を評せんに、長曾我部は、八尾表にて藤堂の物主を餘多討取、大に氣色ばうたりと雖、是は藤堂郎

元和元年五月七日

九〇九

元和元年五月七日

九一〇

徒同士の宿志に仍り、自暴自棄の討死なれば、強ち長曾我部が功とは云難し、何れに親元親には迫に劣れりと見ゆ、落城の節も、戰場より直に落失せ、京師にて被捉梟首せらる、毛利豊前守世に森豊前守と記せる書多し、非にモリト唱、其後紛しき故に、毛利をモウリと唱るは、近は、驍勇天下に敵無るべし、東軍の先備粉の如く切崩せしは、真田が奇兵と毛利が正兵兩備の功にして、他の援なし、一旦平場の駭合に、天下の兵總崩れせしは、偏に真田毛利兩氏が功ならずや、而して真田は陣頭に死し、毛利は城へ入て殉死す、明石全登は、回兵の手筈相違して、肝要の戦にはづれ、期過て戦死す、後藤基次は、自是前道明寺表にて戦死、此死色々説有り、爰に摺筆、右五將の優劣正録を以て糺す處如斯、依之列序を立んに、古今獨歩は真田信仍、第二の功毛利勝永たるべし、惜い哉、後世真田を云て毛利を不云、是毛利が不肖歟、明石は遙かに劣り、長曾我部最凡下なり、後藤が死は安定ならざれば、可否の論に涉らず、此外城中に於て可稱ものは、未少弱ながら木村長門守重成なり、今福の初陣盟使の沈勇若江の討死、冑の薰、其餘の美談後世に遺るもの一々擧るに不遑、弱冠に不満して如斯、年長せば如何なる良器とやならん、心

真田ハ古
今獨歩

木村重成
ニ對スル
評

幸村ノ奇
策ト附會
ノ傳説

憎くも惜まるれ、分て真田信仍事は、千載人口に遺る奇策幾百千ぞや、抑信州已來、御當家に敵する事數回、一度不覺の名を不得、御當家の斑猫なりと世に沙汰せり、當御陣に於て、住吉御巡檢の御危難、尼が崎文右衛門が由緒龜井村の十六疵、望月宇右衛門、穴山小助等が影武者の事、此類には尤附會妄誕頗る多ければ、事實定かならず、是無他、御當家御危難の事なれば、事實匿れて後世に傳はらぬも、理りなり、仍摺筆す、信仍陣中より、其子大助を城へ回し、秀頼公御先途に殉べき由を遺旨す、大助父の命を重んじ、紅涙を押へて、父子長別の暇乞し、城へ引返し、蘆田曲輪に候して、秀頼を守護す、其體楠子の息正行に教訓せしに、彷彿たり、大助僅年志學にして、志金鐵のごとく、公を守護するを、城中宗徒の面々感慨して、速水甲斐守、大助に謂らく、足下は御譜代の臣にも非ず、其上幼弱の身にして、斯迄の忠誠には及ばし、須く曲輪を出て、東軍親戚の方へ立退るべしと教諭す、大助對て曰、父命重く、父が最期を見捨て、君を守護し奉る處なり、奚ぞ今さら父命を背き、何地へ可罷越や、不義の教諭を聞んより、我は一人廣庭に控居て、君と存亡を共にすべしとて、其後は人と談せず、公の落居に殉ひぬるとぞ、

元和元年五月七日

九一一

元和元年五月七日

九二二

秀頼薩州へ退去の事、古へより人口に在り、虚實を不知、殊の外長壽にて、延寶天和の頃、九十餘歳にて薨せらるゝと云、同薩州に眞田と云士有り、是信仍マコトが裔なり、公儀を憚りて、眞田と唱ふと云々、不知虚實、吁當世の英雄信仍に非ずして誰ぞや、惜むらくは信仍に都督を賜ひなば、如何成神策を以て東兵を挫んも測るべからず、左無き故に、總軍を統る事不克、是大坂の微運の爲す處歟、

御和睦後、原隼人集會の事、難波戰記等に録す、略之、御和睦破て後、關東より、信仍伯父眞田隱岐守を以て信仍を召す、信仍固辭して召に不應、重て同人を御使として、信州一圓に可被下條、御味方に可參由なり、信仍勃然として席を掃つて曰、我東公に對し奉て、飽迄御敵をこそ仕れ、聊かも忠義を不存、然るに斯る褒賞は何の所以ぞや、苟も信仍武門に長て、不義の富貴を忝しとせんや、重て斯様の御使に來給はゞ、對面に不克とて、襖を礎と鎖て、不再言、隱岐守立歸て、其由言上に及ければ、公にも甚だ廉潔を稱贊し給ひ、惜み憐み給ふとかや、絶等離倫一世の人物、今に至て婦童も其名を聞て其美を知る、尙事實を糺明して、一箇の列傳に舉ん事を庶幾する而已、

幸村部下
戰功者
ノ戰功者
ヲ與フ
幸村ノ臣
青地牛助
後加賀横
山氏ニ仕
フ

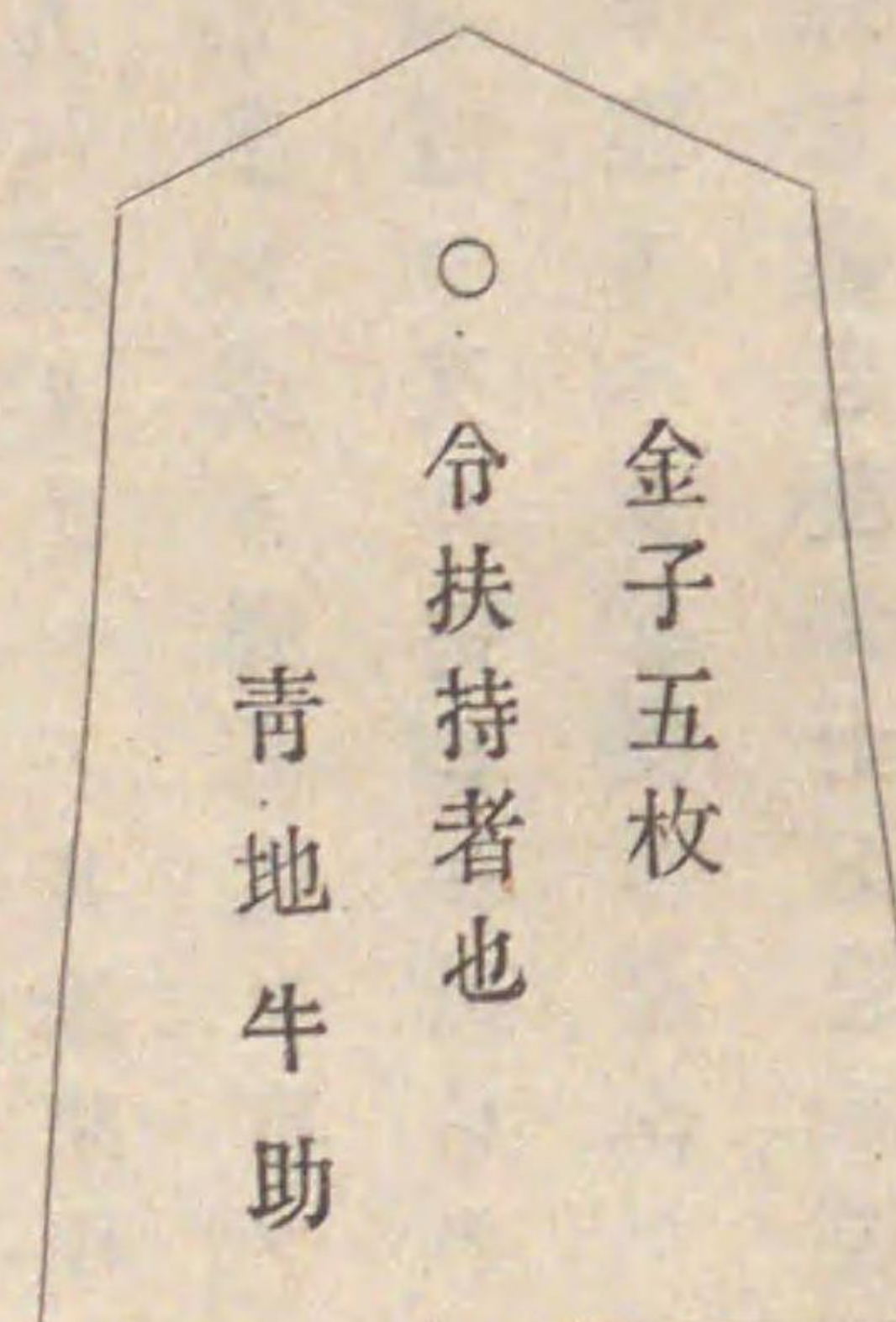
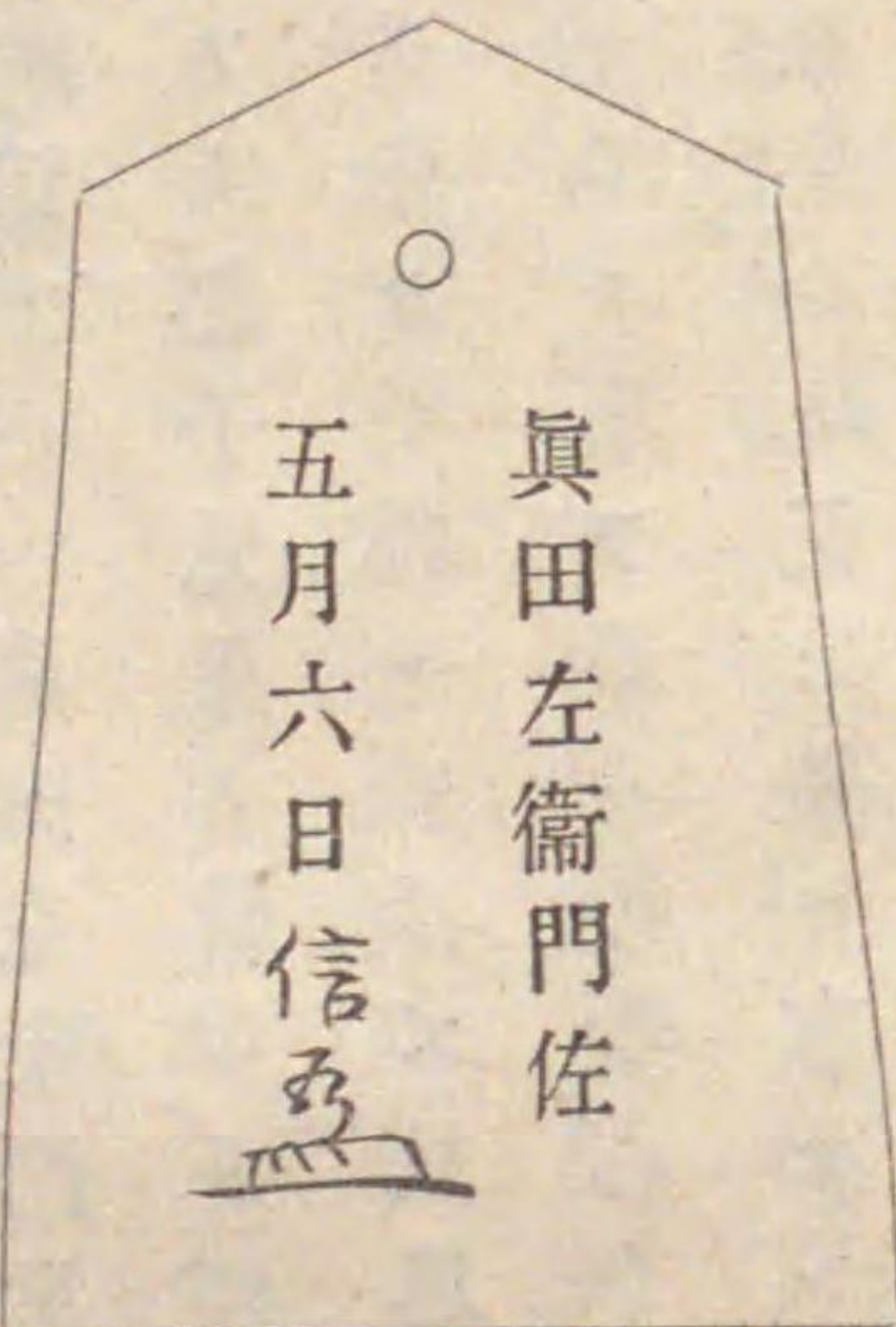
〔可觀小説〕

七

略

○上夏陣五月六日、平野ふて渡部内藏助人數困れ候由よて、眞田と入代る、敵ハ大和衆也、内藏助と左衛門佐と入代るを見て突々懸る、左衛門佐突立々追返せ、其時眞田手へ首六ツ取之、一番青野勘兵衛、二番絹川彌左衛門、三番塩野掃部、四番青地牛助、五番西村喜左衛門、六番金安松右衛門以上首六つ取、何れ將某の駒を左衛門佐賜之、其夜各登城し候處、各金子五枚宛拜領すと、右之青地牛助話、牛助後ニハ勘左衛門と稱し、横山大膳與力よて百五拾石取、後御暇申て他國すれとも、人品不宜不有附、又御國へ歸り、其子、笹原織部よ奉公し、勘左衛門ハ浪人よて病死ス、

左衛門佐名乗
幸村ト云、
此名乗不審、
又按、左衛門尉
大坂江入時分
名乗信賀ト云、



私曰、牛助本姓ハ奥村氏、父も牛助と云、蒲生氏之臣ニシテ、千五百石を領シ
又、青地駿河守茂綱ハ本家ニ付、奥村牛助ヲ乞請ル、三千石ヲ與ヘ、姓青地

元和元年五月七日

九一三

元和元年五月七日

九一四

氏を授ぬ、自是奥村ヲ改め青地氏ト稱ス、其子牛助、真田左衛門佐ニ仕ヘテ三百石領ス、本藩へ來テ横山家ノ與力ト成、勸左衛門ト云、

〔明良洪範續篇〕

一十

真田左衛門幸村人ニ語リケルハ、凡家來程油斷ノナラヌ者ハナシ、親子兄弟ノ間ニテモ偽リ多シ、或ハ利ニ迷フ事アリ、然ルニ家人ハ血ヲ分タル者ニモ非ズ、只恩義ニ感ジ、又ハ勢ヒニ恐レテ下知ニ隨ヒ、命ヲモクレル事アレバ、委敷心ヲ用ヒ察スベキ也、我等古ヘヨリ當時迄ヲ考ヘ見ルニ、一々云ヒ難キ事ナレトモ、昨日迄忠義ノ士ト思ヒ居タル者モ、主人ノ好ミ給フ事替レバ、忽チ其風ニ移リテ機嫌ニ叶ヒ、幸ヒテ得ント思フ、其中ニタマハ、眞忠ノ者有テ諫言スル事アレバ、大キニ耻カシメニアヒ、又ハ妻子迄ノ難儀トナリ、家名ヲ汚セバ、大方ナル忠義ノ者ト雖モ、後ヲ生シ日々オシ移ル也、一旦忠臣ニテモ、耻ヲ請テハ主人ヲ恨ミ憤リテ、邪佞ニ成者モ儘アル、其故ハ少シ諫言ヲスレバ機嫌惡ク、萬事常ニ替レバ、詮ナキ事ニ家名ヲ落サンヨリハ、ヨキ程ニシテ時ニ從フガヨシト了簡シ、勤ヲ余所ニスル者モアリ、或ハ傍輩ノ事ヨリ、主人ニモ恨ミヲ含ミ工ミテ、主人ノキゲンニ合ヨフニモテナシ、惡敷事ヲ勸メテ、主人ニ惡名ヲアタヘ、傍輩

ニモ耻ヲカヅケ、自分ハ身ノ落付ヲ拵ヘ置、ヨキ時節ニ身ヲ引テ、主人ヤ傍輩ノ難儀ヲ笑フ者モアリ、兎角ニ頼母敷思ヒテモ油斷スル事有ベカラズ、常ニ眞實ヲ以テ理非ヲ考ヘ、惡敷道ニ引入ラレズ、又惡敷事ヲナサヌヨフニ心ヲ付ベシ、少シノ相談ニテモ、御身ノ樂ミニ成事ヲ宣フ時ハ、其樂ミノ筋ヲ計リテ、御心ニ叶ヒ、身ヲ立ントスル也、内甲ヲ見ラレテ扱ヒ者ニナラシハ口惜カラズヤ、誠ヲ以テ國ノ爲君ノ爲ニナス者ハ、萬人ニ一人モ非ズ、重キ位ニ有ベキモ、此ノ如キノ境ヲ辨ヘ、君ヲモ諫メ奉度ト申サレケル、

〔月窓寺舊記〕

五〇先公實錄
五十六所收

傳叟山月窓禪寺

曹洞宗

小縣郡馬越村

浦野宿東

昌寺末、大本寺ハ越前福井、開基海野信濃守滋野棟綱公之三男常田出羽守隆永侯也、往古ハ上田御城御鷹匠町ニ有テ庵室也、中興御開基ハ真田左衛門佐信繁公也、慶長御合戰之砌、御遺言有之ニよつゝ、御秘藏有ヒ馬具之類、漸持來リ、鷹匠町の庵室ニ葬リ、御菩提を吊ひと云、

〔若王子神社文書〕

〇三山城

返々、御遊さいつともく、あいうをらびいさき、うすくありうさく、かさしけあくせんにらり、つ不存りさへも、たき物くさされ候、過分り

元和元年五月七日

九一五

御ぬまあいうらに大ミ御き存んの御ふららひ一色くさされ候、
すくかさけあくせん候、そこもといよく御無事の事、うそく
くさくそん候、めてさくトシ、

さあ

左衛門

母

よやくじうし様

人々御返事

○本書原本ヲ檢スルニ、紙質
墨色等稍疑ハシキモノアレ
ニドモ、姑ク茲
ニ收録ス、

〔老翁聞書〕

○乾磐城

大坂落城之砌、城中、年之程十六七計の容顔美麗
る女性、白綾乃鉢巻し、白柄の長刀を杖に以て、重綱公
重綱公、れをたき歸りたは、以後室とす、誰人の息女たる事
を語らば、其所行凡あらゆる、さき太閤様の御息女もあらん
りと、とりく乃沙汰なり、後その家來乃者尋來りて、臣下
とぬる、真田左衛門佐幸村乃息女とす、寄手諸將の中、
片倉兼右乃英名殊、此度目を驚す武功の事、ぬき、末繁
昌ぬらん事を豫に計り、容色万人に勝れたる息女あま、
捨たぬふるきよ

幸村ノ女
片倉重綱
ノ室トナ
ル

らにと幸村申置、重綱公の陣乃前へ押し出したるならん
と皆以へり、あるとなじ、

〔異説區々〕

坤

光明院派と云く、真田流といへる軍學の元祖を、
院也、是ハ真田左衛門が落胤との事也、あつれとも
真田がむつをなりと云説も有、百八歳に
て死去也、甲陽軍鑑を疑有とて用ひすと
なり、真田故武家よ成りさくて桑門と
まじといふ、

右の光明院物語よハ、大坂陣十九歳の時也、
藤堂比人、數長曾我部ヲ追え、れある跡を見
し、逃る勢ひ不とつよ、たをたをの也、
竹藪をおし、さふしたるを見さり、
竹ともひしと臥居りりと也、

〔取捨録〕

五〇先公實錄
五十九所收

樋口四角兵衛と云者あり、日本ニ三人とハ有まし
た、ぬえけ者也、甲刃武田勝頼公の御抱守、
樋口下總、三男也、甲刃没落の後、此家
に來り、左衛門殿ニ仕ゆる、左衛門佐殿ハ
名譽の勇士あれ共、不思議の事あり、
刀脇指をへ物一圓きまに、随分能切る刀
ニても、左衛門殿所持とあま、一圓
きれさる故、何とあく氣味、あつく被思
召ふと也、大谷刑部少輔ハ左衛門殿
見廻給ひし折柄、來國俊の二尺

元和元年五月七日

九一七

真田流軍學

藤堂勢長
曾我部隊
二道ハレ
テ竹藪ヲ
押シテ
逃ル

幸村ノ家
樋口四
角兵衛

大谷吉隆
來國俊ノ
刀ヲ幸村
ニ贈ル

樋口某國
後ノ刀ヲ
望ム

幸村樋口
ト國後ノ
刀ヲ賭ケ
テ双六ヲ
打ツ

四寸の刀を持出申さまなるハ、いつの比ハ御指替にてモ、物被成なる時、殊の外不業にて有しを不足し給ふと聞つるハ、誠あるハ、左様の事も、何事も、此刀ハ寸ハ短ハなれ共、双強き刀也、様し見込して差給へ、度々手ニ覺さる中ニ、五枚兜を着る頭を切候ひしニ、水をさくる様ニ候ひしと云、出さまなる、左衛門殿ま、めまらに歡給ひ、歸宅あり、身近き侍共を召出して、ミせらまなる、何事も押頂き感し褒なる、中ニも樋口ハ、焼あし裏表三四度見、さして褒もせに、褒ま男と生れさる思ひ出、ケ様の刀さし度も、の哉とつふや、ね振廻し、坏して鞘ヲ納め、左衛門殿前ニ持出、此御刀私ニ被下候へと云、左衛門殿取上らまあら、まをけめと云、持て立給ふ、其跡にて四角ひとりことニ、殿ニ似合ぬ頼母敷あは事と云、立出なると也、其後春雨打つ、きて物淋敷折、四角、左衛門殿方へ参り、此長雨あるニ、御機嫌能御入あらま候や、餘り淋しく候程、今日ハ双六を遊し候得と云、左衛門殿能こそ來りあり、双六打んと宣ふ、四角云ハ、ケ様の雨中ニハ、唯ハいさミ、賭ハ遊し候へと云、左衛門殿ハ、元より双六上手ニおとしなれハ、對様あらハ百兩賭ニ打るし、引てあらハ羽織賭と宣ふ、四角の云様對様あらを首

樋口國後
ノ刀ヲ
出奔
ス

かけニも可仕候、引と申ことモハ侍の上ニ無之と云、左あらを引て賭あしニ打テと宣ふ、いや狂言ニも引と云事ハ仕間敷候、唯對様にて被遊候へ、も對様にて御負候ハ、刑部殿ハ被進さる御刀被下候へと云、左衛門殿對様あらハ望ニ任せんと宣ふ、扱双六初りなるハ、三番つ、んで打負給ふ、扱も合點ゆぬ事とて、さいを取て見給へ、ハ、いつの間ハあこしらひあるさいニ取替置さり、己盜賊め、ケ様の事ををる物、ケ大ニ機嫌を損し給ふ、四角ほ、笑て、何と申させ給ひ、ケ、刀ハ我等ケ物とつぬや、き、歸り、ケ、其後五三日過、奥へ來り、女中を呼出し、御刀を取出し遣し候へと御意也と云、女中承り、ケ、何事の御刀ありやと問ニ、刑部殿より被進さる御刀也と云、則取出し渡し、ケ、れ、受取、宿所へも歸ら、直ニ出奔、其後左衛門殿ニハ、樋口ウミへさるハ、病氣あるケ見、見よと近習を遣し給ふニ、宿所ニ居ら、びと申、何方へ行さるやと云、差置給ふニ、五七日過、ケ、歸ら、十日過、ケ、も來らされハ、左衛門殿大ニ不審し給ひ、日比人を人とも思、ケ、大言放ちて人ニ憎まれし、ケ、必定鬮討あ、と小やらま、ケ、覺ゆ、不便さよと落涙し給ふ、日數重るハ、從ひ、扱も惜、侍を殺し、ケ、と後悔し給ふニ、付、御刀渡し

元和元年五月七日

九二〇

さる女中申ハ、先の何日ニ参リ、御刀まいらせよと御意也と申候まゝ、私御
刀取出し渡して候と云、夫ハ何きの刀そと問給へ、大谷様ハ被進候御刀
と申、其後返し納さるか尋給ふ、いや其後ハ返し納候と申、其時思し
召當り、扱ハ其刀盗まゝ遠國しあるニ相違おし、悪き奴尋出して成敗せ
んと怒り給ふ、何事有くも腹立給ふ事あき、此時ハ面色替りて、へ給ひ
たる、扱も四角兵衛ハ、面向こそ欠落と申もの、さして忍ひさる氣色も
あく居さりたる、親類懇意の輩氣のとくニ思ひ、左衛門殿いつニ替り、氣
悪くまへさせ給ふと云を聞て、早々陰を隠し、遠國せよと異見し、れハ、樋
口ハ、あざ笑つて、事々し、何程の事うあるへ、た、まろた分にて首をきらふ、
外何とし給ふへ、たと云放ち、其後ハ彌忍ふ氣色もあく日を送り、
安房守殿此由聞給ひ、急き左衛門佐殿を呼給ひ、此比樋口ハ居らぬと云
事を聞し、例の事よと思ひ居つる、只今申者有之、聞つる、其許の心ニ
そむき、陰を隠し、さると云、實あらハ呼出し仕給へと仰たる、左衛門殿畏り
て、年來日比我まゝ、千万法外の事のニ御座候へとも、由緒有者と申、自然
の時ハ用ニも可立取得も候半と存候て、ゆるし罷在候へ共、此度の儀ハ差

昌幸幸村
ヲ宥メテ
樋口ヲ赦
サシム

置難き事ニ御座候、御意を伺ひ、心のみ、計ひ候ハんと宣ふ、安房守殿開し
召其許、夫程ニ腹立あるハ、能々の事あるへし、我等ハ其許、双六の賭ハ負、
刀をとらむ給ふと聞つると仰せ、れハ、左衛門殿、其儀にて候、渠作りさい
をこし、らい、私ハ目をぬきて勝候へ、實の勝ニ老無御座候、其上刀を取出
させ、奪取て出奔致し候へ、盗賊ハ紛れあ、候と宣ふ、安房守殿打笑給ひ、
夫あれ、猶更其許誤り給ふ也、元博奕と云ものハ、偽ま、人を出しぬくを
以本意とに、其理ふくら、其許ニハありし、刀の惜さ、其理、淡忘れ給
ふ、早々呼返し、目を懸仕給へ、刀の惜きも用ニ立ん、爲なり、其許差を、よ
り、樋口ニさ、せ、あら、用ニ立る、思ふ也と宣へ、左衛門殿、赤面有、退出
し給ひし、直ニよ、戻し、元の如く仕給ひしと也、其刀、樋口家子孫ニ至り
持傳ふと云、其子、角兵衛、其子、又角兵衛と云、其子、淺右衛門、若死して、其子、今
年、十三、四才、にも成也、

關ハ原合戰敗、後、石田ハ與力し、さる大小名、或死刑、或流刑、ハ行ハれ、安
房守殿、左衛門佐殿、も、高野山ニ入、九度山と云所ニ蟄居し給ふ、左衛門殿
ある時、忍ひ、京都ニ出、宮社佛閣へ參詣し、名所舊跡を詠、風情して、國々

元和元年五月七日

九二一

の風俗家々の風儀をそ伺まなる世を憚る習あれハ、編笠深く打冠リ、樋口四角兵衛唯一人召連給ふ、其比日の本ニ隠きおた龜の甲と云關取四條河原にて勸進角力興行する、老若上下見物夥し、四角兵衛珍敷見物也、御覽あれと云故、左衛門殿、さらそとて見物し給ふ、龜の甲折ニ出て取組なるニ、片手ニも廻る者あく、修練の程ハ云よ及そハ、器量骨から並ぶ者あく、内懸と云術を得物ニせし、平日己り庭ニ四寸角の栗の木を堀立置て、角力望きて來る者あれそ、其角木をりけをりそ見決なるとそ、又此樋口の、何亥ニよらハ我慢つよく、負と云事生涯いそぬ氣姓者也、左衛門殿をむれニ、汝龜の甲ニハ勝事あるましと宣ふ、樋口聞や否帶を解なるを、左衛門殿をえけるそと留め給へそ、御とらせ不被下候ハ、罷歸ると自害仕ると叫く故、手を放ち給ふと其ま、踊り出、龜の甲殿御出あれと呼せりなる、龜の甲出云様、今やうの時の作法よて、先關脇を出し候といふ、樋口曰、見給ふ通不意ニ出え候ハ、先程ハの御手練を見て、男の名聞し御手先ハ廻り見申度存候故罷出候、太儀ありら甲殿御出候へと云、龜の甲是非あく出て取組なるハ、不器量あれ共、小力も有て早業あれそ、もし何をもちて負もそへき

樋口四條河原ノ角力ニ進出ル折ル骨力ヲ

あと思按して、例の内りらニ引あけれそ、四角兵衛打投らき、芝居へひくそあり、お糸の骨を打折なり、腰を下ハ動く事あらされ共起直り、龜の甲を睨と押へ、夫まいつさり角力ニハ勝たと云、龜の甲少しも騒かば笑ありら、角力ニハ負候と云ありら、樋口をあら抱き動かせば、夫氣附よ骨繼持來よと呼せりなれハ、かくおより藥持來る、必動き給ふお、お糸の骨の折て候、只今即時ニ繼候へそ、後々迄も子細おき物にて候、此氣付をふくし給へと云、四角兵衛ハ大の眼を見出し、龜の甲をえたとみらると、あはけ侍たる者り、お糸あら一本や二本押折たと、目を廻し様にて用ニと何もあるり、如何様ニも引すり廻して療治し、吳よと申なるお、則骨つれを付、柳の皮にて巻なり、口ハよくきんおき、なれ共、起直る事さへ出來兼ハれハ、左衛門殿樂屋へ頼み、駕籠を借人をやとひき歸り給ふと也、後ニハ能治して早走りも力業も聊障りニあらハ、乍去老年お及ひき痛き出え、死前々およ不とのちんおふき有しと也、

綱徳接ズルニ、四角兵衛後ニ渡邊ト改ム、渡邊綱ニ自ラ比シテ渡邊ト改ムト云、一生ニ二十五人切タリト云、大坂陣ノ時モ、君ニ從ヒ武功アリ、落城ノ後本國ニ販リ

幸村家臣
石合道房
戦死ス

伊木七郎
右衛門幸
村共ニ
死セシ
トコ

元和元年五月七日

九二四

シト云、傳記多シ、御事蹟ニ預ラサル故略之、又按スルニ、樋口家所傳拜領
ルノ誤ナ
ルベシ、

〔石合系圖〕

濃〇信 石合 信濃 道重 長久保善五
信濃 和泉守

道相 石合新左衛門、義正秋女、
母甲州石原清門、
道房 石合庄次郎、
母同

慶長十九年甲寅秋、屬真田左衛門尉幸村、到攝津大坂、於大坂而死亡、

〔落穂集〕

十三 伊木七郎右衛門恩を思ふ事

問テ云ク、伊木七郎右衛門恩を思ふ義如何ニ候哉、答ク云ク、是は真田左衛
門佐ハ、伊木七郎右衛門遠雄を招き、さらハ一戦仕リ、それから討死仕
候ヘシ、かゝらば備ヘの亂れざるやうニ、八方ノ心をかゝらば然るヘシト
いひなれハ、七郎右衛門、貴方討死おされしうヘハ、いかゞ私の命をかから
ヘ申さん、去冬の合戦も御手ニ屬して人並の武功をあらはし、今ハ關東
方の人々も、伊木七郎右衛門遠雄とて一方のかたカと思ひあてらば候
と、むとヘハ貴方の驥尾よつく遠雄ウ仕合よて候、それかゝらば御先ヘ討
死仕らんと思ひささカト葉の末世またのもしくそ見ヘよなるとおぼ

真野豊後
伊木七郎
右衛門ト
刺違テ死
ス

平野作左
衛門

〔大坂記〕

俘虜ヲ被誅事

〇上略、城兵逃散、爰ニ真野豊後、伊木七郎右衛門何トシテ遁ケン、佐田邊迄
スルコトニ係ル、爰ニ真野豊後、伊木七郎右衛門何トシテ遁ケン、佐田邊迄
落テ、芦原ノ中ニ隠レ居ケルカ、連ノガレヌ物故ニ、耻ヲサラサンヨリト思
イ切、差違ヘテソ死ニケル、

〔紀伊國續風土記〕

伊都郡四

相賀莊 安布雅

學文路村 加牟呂

舊家

平野作左衛門

家傳にいふ、其祖は佐伯姓にて、天長中、空海の母阿刀氏に附屬し、讚州より
當地に來り、那賀郡中野村に住す、末孫佐伯大千代大夫の男孫六大夫吉元
といふ者、當郡錢坂の城主生地新左衛門吉澄の縁あるにより、天文中、學文
路村に移る、文祿四年、關白秀次公、高野登山の時、當家に御休息あり、鎗一筋
殘し置かる、其鎗今家に傳ふ、二代目孫右衛門吉次、學文路平野壇を領し、平
野と號す、慶長十九年、真田左衛門に屬し、大坂に籠城す、明年平野合戦に持
鎗を折る、幸村與ふる所の鎗なりとて家にあり、子孫代々當村に住し、莊の
長たり、勤功數度ありて、官より屢金を賜ひて褒賞す、

○以下毛利勝永ノコトニ係ル、

元和元年五月七日

九二五

毛利勝永
家康ノ陣
ヲ衝カシ
トス

勝永ノ
式部秀頼
ニ殉ズ

勝永ノ
岩村清右
衛門佐治
内膳競ヒ
戦フ

元和元年五月七日

〔常山紀談〕

二十

毛利勝永軍配相違の事

大坂五月七日、毛利豊前守勝永ハ、軍をおし出せしが、住吉の松ヶげよ白旗見ゆまば、此駿河の大御所あるべし、一文字よ切てかゝり討死せんと志して、兵をせむむる所よ、白旗見えざりしうば、長井傳兵衛、水野伊右衛門よ、見て來まるとてやりぬるが、暫有く乘歸り、住吉よ白旗ハ見えざといひたり、此ハ東照宮御旗を俄まらせ給ひ、茶磨山の後よひらへさせ給ひぬる故とらや、勝永ハ小倉の城主壹岐守が子あり、勝永が子を式部といふ、父子共よ秀頼ふあさうひ、芦田矢倉よ籠り自害せり、

〔正武將感狀記〕

四

岩村清右衛門佐治内膳功名事

大坂陣ノ時、森豊前守勝永ガ家士岩村清右衛門佐治内膳鑊頭タリ、秋田河内守俊季ハ鑊頭ト、堤ヲ隔テセリ合ケルガ、勝永漫リニ放ツ事ナカレ、放ツ時ハ心ヲ静メテ下テ放セト下知ス、敵ハ堤ノ上ニ登テ、透間ナク放テ、放ツヨリ早ク堤ノ下ニ屈伏スレバ、鉛子ハ虚空ニ飛テ、更ニ人ニ不中、佐治ハ若武者ニテ、岩村ハ老功ノ者ナレバ、佐治常ニ岩村ヲ以テ目當トス、岩村鑊頭ヲ取テ立上リ、二放シ放ツ、佐治モ又然ス、岩村鎗ヲ提テ堤ヲ走リヨリ、

勝永先手
淺井周防
組川左
太夫

鎗ヲ合セント思フ者ハコ、ゾト云テ駈出ル、佐治モ岩村ト並進處ニ、敵四人鎗サキヲ揃テ相向、佐治ハ岩村ヨリ先ダ、ントシ、岩村ハ佐治ガ後ニ不居、二士競ヒカ、リ却テ四人ヲ撞卻ル、事十歩バカリ、敵ヨハメニ成タレバ、堤ノ上ヨリ投ツキニシタル鎗、岩村カ鎧ノ胸板ニ中テ、道ヨリ下ニ斃タリ、佐治是ヲモ不顧敵ヲマクリ立追ツムル、敵短刀ヲ拔テ岩村ガ首ヲ取ントスル、勝永ガ旗本ヨリ、一同ニ聲ヲ揚テ進ミ來レバ、堤ノ上ノ俊季ガ兵、ムラムラト引退ク、佐治、岩村ガ首ヲトランドスル者ヲ撞伏セ、抑ヘテ首ヲ取ニケリ、

〔鵜川宗宿覺書〕

先年大坂御陣、五月七日、天王寺南表森豊前先手よて、淺井周防組よての事、

- 一 拙者參會仕候敵之裝束、甲立物黒き鹿角黒具足、道具之儀、長刀共鎧共、其刻見とけ不申候、兎角かぎの分り無御座候と覺申候事、
- 一 拙者裝束、黒キ頭ありの甲立物ニ金の丸具足とらみ朱、さゝ物ハ壹と、よ九尺の白まゐい、但上壹尺置て五寸の黒一文字壹筋御坐候、惣して

元和元年五月七日

周防組不殘此指物よて候、扱右之てきと良久戰申候内ニ、もそや成間敷
 と存儀御座候、敵言葉を懸、すきぬなく詰懸り、私内の者又市と申若黨と
 貳人して戰申うち、彼又市敵の左乃うゑろへ廻申所を二三度そらい、
 うゑろへ見うへされ候所を、むきより上のだ此あさりうと存所貳鎧は
 き申候、不うあてり不仕候様ニ覺申候、畑きりの下せえき田へころび被
 申所を、又貳鎧はき申候、其疵は左のうちも、う又ハ尻のあさりうと覺
 申候、拙者鎧五寸余の足すこと、成鎧ふて御座候、以上鎧疵四ヶ所と
 覺候、大坂ものといぐんゆへ、くびり上ヶ不申のき申候事、

一 拙者と戰申仁ふさきへそやくすそかちの者壹人參候、事外そらき
 申様ニ相見へ申候、手前せりき故、然と見留不申候、同組ノ内ふて、淺井
 周防せられ熊之助、同組之者中嶋太郎兵衛、拙者戰不申先ニ、右兩人高名
 仕候、拙者戰申儀三番目うと覺申候、蜂五郎左衛門戰申候へ共、手前せり
 べき故、いり様ニ罷成候も、彼ハ不存候、其時分見覺申候組之者、此外ハ不
 存候事、

一 敵打留まがい納候田のきり成道、其後所之古キ者ニ相尋候へば、あめ

寺海道と申候、又鎌倉海道共申由ニ候、右之田と道筋とのえりふ田よ
 ハ南えつとふ名所御座候、由所之古キ者申候、うしを塚と申候、又ハうし
 廻り塚共申由ニ候事、

一 敵打留置候きりの下の田、其後參見申候へハ、横え、貳三間程も可有御
 座候りと存、田ふて長サ三十間余も御座候ハん程ニ見へ申候、田のうち
 ふ打留申候、則頭道筋の方へ成申候様ニ、其時の有様覺申候、左候ハ、東
 枕ふても候ハんと存事候、

右之様子詮議初めり山村角右衛門と申仁、大坂表之儀物語仕出し、拙
 者儀も右之趣咄仕候處ニ、角右衛門氣茂付、懇比ニ相尋被申候て、本田
 出雲様よて候と申候、扱り出雲様よても可有御座候哉と、是迄ハ努々
 不存候、角右衛門寂前之御陣ニハ、出雲様之御手ニつき罷在候、彼者井
 伊掃部様の御手に居申候、則掃部様御内渡部九郎左衛門せられ之由
 ニ候、此後鈴木六郎左衛門ニ被相尋候ニ付、有躰之様子委物語仕候
 へハ、鈴木六郎左衛門ハ本田美濃守様御内長坂茶利殿(忠尚)へ咄被申候事、
 重々出雲様之由、茶利殿被申、六郎左衛門ハ私方へ之状共越候間寫進

元和元年五月七日

九三〇

候以上

前ハ左太夫と申候

鵜川宗宥(宿)

〔坪内文書〕

一書申入候江戸御年寄衆様御上洛ニ付長坂茶利被罷上爰許へ九月晦日ニ被罷下候處ニ會所町橋本や常金所宿ニ由承候間拙者參相申貴様五月七日天王寺表ニ有之御とらきの様子茶利へ申きけ候則貴様七日之鎧あいての男ふり又者まやうそく鎧疵傷所までも具ニ聞とけ被申候茶利被申者男ふり武者之出立黒ろふとにくろき鹿角之たて物くろ具足鎧之手所場所までまきれ無御座候本多出雲様ニ相究り候と被申候此鵜川左大夫と申人ハ大坂落城後者何方ニ居被申候哉と拙者ニ被相尋候間九州ニ被罷下此近年爰元へ被罷上候通申入候へ茶利被申候者其砌ハ出雲様之鎧あいて西國へ被下と承及候歟是もちろい不申候と被申候ニ付多彼貴様之御書付見せ申候へ拙者申きけ候も又者書付之面もまきれ無御座本田出雲様ニ相究り候と被申候扱後日之證據之とめと存其

長坂茶利
左太夫ノ
對手ヲ本
多朝ナ
リト認ム

書付長坂茶利相渡し申候間其御心得可被成候何様以面上可申入候恐惶謹言

鈴木六郎左衛門

十月二日

在判

鵜川左大夫様

尚々茶利被申候ハ男ふり武者之出さち此場所にて別ニうちぢ御
えさもとに御座あるまきと迄被申候以上

一番の狀

已上

乍幸便一書申入候其元御無事ニ御座被成候哉御床敷存候貴殿様子於此地長坂茶利殿ニ懸御目候彼去々年之書付美濃守様御覽被成候有則掛硯ニ御入置被成候由茶利殿被申候于今甲斐守様ニ可有御座候於爰元貴殿様子本多能登守様へも具ニ茶利殿被仰上右之通小川左太郎殿へも談合申候間可御心安候將亦拙者身上之儀も鶴屋清兵衛爰元へ下り次第可被

長坂茶利
鵜川左太
夫ヲ本多
忠政ニ推
舉ス

元和元年五月七日

九三一

元禄元年五月七日

九三二

仰上候由被申候、小川新九郎殿同左太郎殿殊之外御肝要被成候、其外内證
肝要衆御座候、何も跡ふ可申進候、我等宿之義諸事御心付被成可被下候、先
可申入候處、御内儀様へも能様御心得被成可被下候、恐惶謹言、

鈴木六郎左衛門

三月十四日

判在

此本書有

江戸

左太夫事

鵜川宗宿様八々御中

尚々、鵜川左大夫と申者、出雲様をつき留申候次第之義、うきつけ候、
鈴木六郎左衛門を以、我等を頼候間、美濃守様へうきつけ懸御目候處
ニ、御覽被成、うけ硯よ御入置被成候間、甲斐守様ニ可有御座候由、能登
様へ具ニ貴殿之義被申上候、以上、

乍幸便一書令啓上候、其元御子共衆御無事ニ御座候や、我等もそくさいニ

同上

罷有候、將又拙者手前之様子、我等ハ少もうぬい不申候得共、小倉助十郎殿
事外御肝煎ニ有、岡本半助殿と御相談候へハ、木^(候)撰右京殿共御相談被成候
者、菟角七里清兵衛此地へ下申候間、其時分掃部様へ被立御耳ニ相濟シ可
被申候由ニ有御座候、我等ハうぬい不申候、將又余之御大名衆へ少きりく
ニ御座候、小川左太郎殿于今御煩候、何方へも御出無之候、御親父新九郎
殿、我等身上御請取何方へも可被御肝煎由ニ有御座候、然者貴様之様子、於
爰元ニ長坂茶利殿ニ逢申候、彼せんさくの書付之様子相尋候へハ、去々年
美濃守様へ懸御目申候間、其段可御心安候、念を入被成御覽、則掛硯へ御入
置被成候、定る甲斐様ニ可有御座由被申候、美濃様御意被成候者、鵜川左大
夫と申者ニ、直ニ逢き、候へと御申付候、其後大坂へも罷上、其後美濃守
様御果被成候付、無其儀由茶利殿被申候、左候へハ、以來之事をも、茶利殿ニ
直ニ申渡候、恐惶謹言、

鈴木六郎左衛門

三月廿七日

有判

此本紙御座候、

元和元年五月七日

九三三

元和元年五月七日

左大夫事

鵜川宗宿様人々御中

江戸

九三四

猶々拙者儀も去年大坂御番に罷有候、當八月に罷下申候條、もし江戸において御用の事候へ、御申こし可被成候、以上、
 如仰いませ不申承候處に、遠路御狀殊に名酒樽壹ツ送被下、別る忝存候然者吉田助左衛門方と咄申に付、御子息宗叔老と、おりに御物語申候、宗宿老先年大坂表にの様子風聞に承候間、鈴木六郎左衛門方と申仁うへ、以書狀様子相尋申候へ、委返狀參候に付、委承候、其刻に御若年御座候へんに、さりとて、御手柄と申事、御座候、拙者儀おしき申事候へ共、出雲殿御あいていませ不承候故、扱鈴木六郎左衛門殿へ尋越申候、六郎左口上おも承、彌必定と存事、御座候、若當暮江戸へ御下御尋候へ、忝存候、尙重る可申述候條、早々及御報候、恐惶謹言、

卯月八日

小川左太郎

則判在

宗宿親所への御狀

鵜川傳左衛門様御報

○以下大野治房御宿正友ノコトニ係ル、

〔落穂集〕

五十

城方大野主馬、同修理の手に此者、其外の城兵等暫く防ぎ戦ひしうとも、加賀勢此大軍に指向ひ、其上御右備本多豊後守、遠藤但馬守、本多縫殿、片桐兄弟、宮城、蒔田、石川あつと横合は突懸りなれ、主馬終は戦ひ負、城の方へ引退候を、當手の面々勝は乘逃るを追ふ事、數十町及ふ、稻荷の前に於て、城兵共踏留り相防ぎ候へ共、不叶しく崩れ行、玉造口より城内へ引入候と也、
略上

〔老士語録〕

五

大野主馬正治ハ、大坂ヲ落テ終ニ行衛シレストイヘリ、落城ノ節、池田森口邊ノ葎原ノ中ニ二三日隠レ居テ、其後播州姫路へ行シト也、年來ノ鎧持一人附居テ、晝ハ往來ノ者ニ似セ、所々ニテ茶屋ノ餅ヲ買夫モ買取テ行ヲハ、人アヤシムルニヨリ、腰掛テ其所ニテ食フ振ヲシテ、食ヒナカラ、彼ヲ立テ、主馬ニ運テ食セケル、其節姫路ニハ、池田武藏守利隆在城也、大坂落城以後、燒跡掃除ノ爲、惣軍百日在陣ス、姫路ノ家中ニ内田勘解由

元和元年五月七日

九三五

大野治房

治房播磨
リトノ説

池田利隆
家臣内田
勘解由治
房ヲ隠ス

ト云士有、日比主馬ト無二ニ心安ク語シ、大坂滅亡ノ節、主馬討死自害モセサルヲ聞テ、扱ハ存シ、寄有テ、死場ヲ遁レタリト見エケル、シカラハ我等方エ來ルヘシト思、毎夜々更テ自分ノ屋敷ノ内ヲクルヤト廻リ、セキハライヲシテ待ケル、五六日有テ、曉外ヨリ小キ石ツフテヲ打込、是主馬成ヘシト思ヒ、高塚ニロチ有シ其所エ、セキヲセキナカラ行シニヨリ、外ノ者モツイテ廻リシ、案ノ如ク主馬成ニヨリ、露次ヨリ内へ入、奥へ同道シ、女房ト惣領ノ男子ニ知セ、勘ケ由翌朝ヨリ病氣トテ引籠リ、奥ニ蚊屋ヲツリテ臥セリ、(屏風カ)風屏ヲ立廻シ、其影ト主馬ヲ置テ、女房ハ夫ヲ看病スル躰ニテ、下女杯近付(スカ)又、食物ハ勘ケ由カ食事ヲ、人シラヌ様ニ分テ養ヒケル、或時惣領外ヨリカヘリ、主馬殿是ニ居玉フ事、天知ル地知ニ戸粗人知タリト見エタリ、番所ニテモ外ニテモ、人ノ集リ物語ヲスル所エ、我等參リカ、レハ咄止、是主馬殿ノ噂ト存ルト云、親仁、成程余程久シキ事ナレハ左有ヘシ、縦討手來ル、我々ハ覺悟ナレ、御自分ハ所存有テ大坂ヲ遁レタルニ、其詮モナク卒爾ニ死玉フヘカラス、殘多ケレ、今夜何方へ成、御越有ヘシ、又時モアラハ、何時ニテモ御出アレ、父子共ニ一度御自分へ遣シ命取カヘシ申スヘキト

勘解由治
房ヲ遁レ
シム

三年後大
坂浪人赦
免セラル

ハ存セス、何年過テ成、疑ヒナク思ハレヨト、子シコロニ暇乞シ、夜更テ露次ヨリ三人連ニテ出、四ツ辻ノ所ニテ、サア爰ヨリ何方へ成、御越アレトテ、親子ハ目ヲトチ耳へ指ヲ入、ウツムキテ足音モ聞ス、暫クシテ起上リ、屋敷へ歸リケル、翌朝大勢人數來ツテ、勘ケ由屋敷ヲ取廻シ、是ニ大野主馬居ラル、由、城代中ヨリ申付ラレ、迎ニ參リタリト、甲冑ヲ帶シ弓銃炮ノ足輕引連來レリ、勘ケ由出合、成程主馬參リ、暫逗留致シヤカ、夜前何方へカ、是ヨリ參タリ、申ス所僞リト思召ハ、家内御サカシアレト云、左申サルヤ上ニ、僞リ有マシ、行先ヲ尋ルトモ云モ致サルマシ、カヘリテ其由申サント、人數引取ケル、利隆ハ在大坂故、其段姫路ヨリ注進ス、武藏守聞玉ヒ、大坂ノ落人、殊ニ主馬ヲカクマイ置事、公儀へ對シ言語道斷ノ義也、早速父子共ニ切腹サスヘキナレ、先主馬カ行先シルヤマテ押込置ヘシトテ、二人、坐敷籠へ入置レケル、畢竟用捨ノ心ナリ、三年目ニ大坂籠城ノ諸浪人御赦免ノ御觸有シ、是ヨリ諸浪人世間廣クナリ、身上持キ方々有付ケル、此時勘ケ由父子モ、利隆ヨリ免サレ、却テ褒美セラレ、面目ヲホトコシ、世上ニテモ稱美致セリトイヘリ、或人勘ケ由ニ、主馬ト別レノ時、目ヲ閉耳ヲフサカレシ事

元和元年五月七日

九三八

ハトイヘハ、自然主馬カ行先ヲ強ク御尋ニテ、イカヤウノ拷問ニ合トモ、正氣有之内ハ申マシケレモ、心身弱リ、幻ノヤウニ成タラハ、存シタル事ハ寢言ヲ云カ如ク、我覺ヘテ申事モ有ヘシ、根カラシラサル事ハ、幻ニモ云ヘキヨウナシ、夫故兼テ參ル先ヲモ承ス、別レノ叱、ドノ方へ行シヤラ、足音モ聞スト云ン爲ナリト云エリ、

治房天下ヲ望ム

〔本多藤四郎覺書〕 御陣の前方、大野主馬天下を望むと申、あれは左様ニ有之りと被仰、少も御よくみの御意もあし、其後仰よは、天下をのぞむも無理にてはあし、武邊達しざる計にても不成、定りて生れ姓有て、それへは天下ころひくる故被成ざる也、信玄謙信武勇ハ達候得共不成、生れ合有儀あり、誰ニはよらば、主馬ウ望も無理よてはなきと、何もに被仰聞候、名將の御詞至極之理奉感也、

秀康正友ヲ庇護ス

〔武功雜記〕 三十 御宿勘兵衛御家ヲ立退ク、三河守殿カクシオカル、其後勘兵衛事御ニクミ深キ由御雜談ノ刻、三河守殿御尤千万ニ奉存候ヘトモ、何方ニ居候トモ御用ニ立ベキモノト存シテ、手前ニカクシ置候間、達而御免ヲカフムラント仰上ラル、御免ナサレ候、後ニ大坂ニコモル、越後守殿内野

家康野本右近ニ正友戦死ノ状ヲ問フ

本右近、勘兵衛ニ言ヲカクル、勘兵衛カヘリ見テ、御宿ト合手ニナルベキモノヲ覺ヘス、志ハヤサシ、勝負セント取テ反ス、終ニ右近ニウタル、爲御褒美判金五十枚右近ニ被下置候、

〔武功雜記〕

七十 討チ取リシ有様ヲ問フコトニ、幸村ヲ御宿越前首ヲ野本右

近取候付、其躰ヲ是モ御尋ナリ、野本ハ左ノ肘ニ手負タルヲ、三尺手拭ニテク、リ罷出申上ルハ、越前事、カ子テヨク見覺ヘ候、猩々緋ノ羽織キタルモノ十八ハカリ召連通ルヲ、跡ヨリ、越前ニテハナキカト言ヲカケ申タレハ、越前ナリトテ取テ返シ、鎧ヲ合セ突伏タル叱、十八計ノモノハ撥ト退タル故ニ、難ナク首ヲ取申候、

〔落穂集〕

五十 上略家康、幸村ノ首級、次ニ野本右近ヲ討取候御宿越前首

を御覽被遊、扱々御宿めハ年寄さる事哉と上意よテ、右近方へ御向被遊、勝負ハと御尋ニ付、右近申上候ハ、越前儀ハ、天王寺表より只一騎乘來リ候ウ、馬の側ニ茜の羽織を著候、歩行士兩人罷在候を呼よせ、何事やらん申付候ヘハ、二人共ニ跡へ走り歸申候、其後私方を見候、鎧を取り馬より下リ候處へ走り寄、鎧付申候へ共、手向ハ仕り不申候と申上候ヘハ、能高名を仕候

元和元年五月七日

九三九

元和元年五月七日

九四〇

との上意此由、右近御前を罷立候跡にて、御側衆へ被仰候ハ、御宿めり若き時あらハ、中々あの者あとに首取らるゝ事にてハ無之と有上意候由也、

右ハ高木伊勢守、其節直よ承りさると有く物語の由、丸毛五郎右衛門方我等への雑談を以書留候也、御宿若き時分御家に御奉公申上候由、

〔武徳編年集成〕

五十七

十二月十七日、

略中、小栗又一忠政ヲ蜂須賀カ陣所

へ御使トシテ、昨夜討ノコヲ尋ラル、渠飯參ノ、敵軍撃入テサガル者ハ十五

間計ト云云、神君廻リ討歟ト問玉へハ、又一然ラサル由ヲ答フ、神君黙然ト

シ、昨夜ノ首將ハ塙直之ナルヘシ、城門ノ張ハ越前ニアリシ御宿ナラント

宣フ、又一カ曰、蜂須賀カ陣所ニ札ヲ立、夜討ノ大將塙團右衛門ト書ス、觀ル

者其大忠ヲ感スル由ヲ述ル、近世戰國ノ俗語ニ、敵陣ニ夜討メ淺ク入ヲ下

ルト稱シ、深ク入ヲ上ルト稱ス、又敵營ノ前ヨリ撃入テ後ニ出ル歟、左ヨリ

撃入テ右へ出ルカ如キヲ廻リ討ト稱ス、或ハ城門ニ在テ、敵若クハ引取勢

ニ交リ來ル歟ト改メ糺シ、最モ敵ノ幕ヒ來リ、附入ニセントスルヲ拒ク役

ヲ張ト云へリ、此御宿正倫ハ、豆州ノ産ニメ、駿州ノ葛山監物友綱入道カ嗣

子トナル、友綱遂ニ今川氏真ヲ叛キ、甲陽ノ信玄ニ屬ス、天正十年、勝頼没

落ノ時ヨリ、正倫北條家ニ仕へ、御宿勸兵衛ト稱シ、數度勇烈ヲ顯シ、後年越前黃門秀康卿ノ臣ニ列シ、當少將忠直朝臣ヲ恨ルコト有テ、落魄ノ身トナリケルカ、今度秀頼ノ亂ヲ起スコトヲ悦ンテ馳至リ、大野治房カ隊ニ屬スル時混一ノ後ハ、越前ノ國ヲ賜ランコトヲ約セシ猛兇ナリ、

○以下明石全登ノコトニ係ル、

〔大坂記〕 岡山合戰之事

明石掃部ハ真田ト約セシ謀ノ如ク、船場ヨリ天王寺へ出ントシケルガ、早南ノ手敗北シテ逃散ス、味方ニ行逢ケレハ、城中へ引入ル處ニ、水野日向守掛合セ相戰イ、自ラ鉾ヲ振テ粉骨ヲ盡ス、郎等廣田茂太夫左右ニ有テ相戰フ、明石モ今ヲ寂期ノ戰ナレハ、死狂イニ成テ働キ終ニ戰死ス、首ハ行三右衛門討取ケル、此外小倉作左衛門岡田丹後守、塩川清右衛門、前田主水若原勘太夫、岸勘解由モ掃部ト一所ニ取テ返シ、散々ニ相戰、終ニ戰死ス、上略

〔翁物語〕

三前集

又曰、明石掃部事、後藤程手柄ハナシト聞シ物共、世間ニ名ノ高キ者也、如何ニモ古風ナルモノ成シト見ユ、後藤カ如ク、人ヲ付ケ氣ニカサノ在ル者ニハ非ス、近來浪人シタリシモ、主人ニカ、リテノ事也、主人

元和元年五月七日

九四一

之爲ヲ思ヒシ事深カリシト也其身古主ト秀頼トヲ分テ思ハシ秀頼ニ古主ヲハ替マシモシ計策アラハ立乘テ利運セハ某ニ對シテノ御恩忝ナシ此御恩ノ上ハ某ニ被對セ御恩ヲハ被差置古主ハ八條カ嶋ニ被遣此流人ヲ此度之御恩ニ御免有テ心易日本ノ地ニ被召置可被下ト言ヌマテモ可言形儀ノ者也主人ニ志深キ侍ハ加様ノ手行セシタメシ多シ是又右ノ如クニシテ不苦所也是ヲ思フ時ハ是モ先衆ニ加テ様子ヲ見度モノ也武功ヲハヅルニハ非スト云ヘリ

〔戸川家譜〕

○上略大坂ノ殘徒ヲ明石掃部ハ耶蘓を專進心伴天連成敗御惡しニ強ク肥後守に被仰付西ハ九州東ハ關東まで尋れとも終に生死を知る者なし南蠻へ渡りしといふ説あり

全登ノ搜

南蠻へ渡リタリトノ説

〔浦上宇喜多記〕

明石飛驒守 傳ニ云始源三郎ト云兒島足多飯山ノ城主ト西國太平記ニ有リ浦上宗景ノ家臣也宗景ト隙出來テ天神山ヲ立退ク直家抱へ置ル浦上滅亡ノ後直家ノ家臣トナル四萬石組無シ大名分也直家馳走有テ結構ニ應答シ給フ智武共ニ有ル能人也ト聞ヘタリ嫡子明石掃部頭家督ヲ受テ國ノ大小ノ用ニモ構ハズ家老分ニテ耶蘓天宗尊敬シ

全登ノ略歴

全登ノ子刑セラ

米倉永時ヲ全登ノ弟ヲ捕フ

全登ノ系圖ト其餘ノ生ニ關スル諸説

テ浮田ノ家ノ宗ノ張本ト成ル其後石田叛逆ノ時秀家ノ家老戸川岡越前浮田左京花房志摩守等家ヲ離レテ退ク掃部家老ト成リ一人軍陳相勤ム敗北ノ後浪人ト成テ大坂ニ住シテ吉利支丹ヲ專ラ廣ム權現様此宗旨堅ク御禁制也シカハ播州邊ニ隱レ住ス大坂亂ノ時大坂ニ入テ浪人集メ一萬許ノ大將ト成テ兩年ノ軍ヲ務ム大坂城滅却ノ時生死知ラズ彼宗ナル故御憎ミ深ク日本國中尋レ生知レズ南蠻へ渡リ候トナン云掃部頭子共二人大坂亂數年過テ殺サレタリ

〔寛政重修諸家譜〕

百六 米倉永時 助右衛門今乃呈 元和元年大坂落城

のち城兵明石掃部全登ヲ弟をよひ從者相模國三浦ヲ乃々來るにヨリ速よその主從五人を捕ヘクあまの

〔土佐國諸氏系圖〕

○明石佐 明石氏系圖 根須村

○則春

仕太閤紀昃根來寺ヲ責ル大將分ナリ

○金則

一本ニ曰備前國兒島飯山之城主 則安明石源三郎

初浮田中納言秀家ニ仕後永祿年中秀吉ニ降ル關白秀次公ニ仕

元和元年五月七日

九四四

秀次公ハ高野山ニ入テ自害、以後浪人シテ紀劔大津ニ蟄居シ、其後淺井周防守取持ヲ以、秀頼公ノ旗本ニ被召抱、

イニ庄三兵部少輔勝資ニ被討トアリ、

全延 明石丹波守、

仕秀頼而大坂陣没、

閑入坊

大忍里被山上和久保(マ)所ニ來ル、後五臺山大島ニ住居、二千石、

全登 同掃部助、

イニ宇喜多家老職賜二万石、サイ古澤四郎兵衛滿興女、

女名ニリ、

政太郎

慶長十八年癸丑生、

吉田初右衛門

正雪ニ組ス、

全登ノ子
由井正雪
ニ與ス

全登ノ閑
歴

父ハ明石氏源三郎金則

臣 柳瀬五左衛門

〇〇全登 掃部助、

備前備中之太守浮田中納言秀家ニ仕、慶長五年子秋、美濃ノ國大垣

ノ城ニ楯籠リ、首數二百五十討取(マ)、其内也、浮田滅亡ノ後浪人、同十

九年大坂陣、秀頼公ニ屬、城ノ南ヲ防ク、三千人主將、騎馬五十騎、小筒

玉目三、六、元和元五月七日合戰、敗軍、家臣柳瀬又左衛門、水野日向守

家來廣田儀太夫ト鎧ヲ合セ、岸又左衛門ニ被討、掃部者毛利豐前守

ニ加リ、雖戰績テ敗北ス、故夜中ニ四國へ渡海、阿笏ヨリ山中ヲ經テ、

大忍里庄披山郷庄谷相村上久保ニ落着住居ス、其後公文氏ヲ爲養

子、此所ヲ讓置、菫生郷下々田村八反三十代ニ住居ス、其節同所之南

山ニ祠ヲ建立シ、所持ノ金佛ヲ籠、則天王宮ト號ス、今子孫ノ者共氏

神トシテ、六月九月九日神事ヲ勤行シ來ル、右金佛者前方盜取ラレ、

今無之由、扱又閑入坊ハ五臺山大島村ニ住居ス、室ハ古澤四郎兵衛

滿興女、墓根須村船井ニ有神ト祭ル、

元和元年五月七日

九四五

全登土佐
ノ説
ニ通ルト

元和元年五月七日

(欄外)

五月朔日、後藤又兵衛後陣道明寺表上向ニ付、

五月三日、天王寺ト岡山ノ間ニ向フ、木村主計、湯淺右近長岡與五郎、小倉作左衛門、青木豊後守、樋口淡路守、伴田平三郎、内藤宮内少輔、織田左衛門尉、三浦飛騨守、稻水三衛門等也、

五月六日、大野修理、真田左衛門、森豊前守、伊木七郎衛門、渡部藏助、大谷大學、長岡與五郎、小倉作左衛門、

五月七日、真田ト評シ合、軍兵三百余人、堺道ヲ經テ、瓜生野ヨリ家康公ノ後ヘ押寄合戦スル處ニ、天王寺表味方敗北、七日午ノ下刻大ニ戦フテ敗北シ、城ニ引入、

△明石儀太夫、天正十年左可崎ニテ沼ヘ足ヲ□込水□ヲスケテヨドノカエル、

全登ノ子孫

吉田初右衛門

幼名 茶丸

慶長十乙巳年生、塩山寺天神谷ニ會山ト云フ僧ニ成リテ閑居ス、同十九、大坂陣以後、江戸目黒ノ行人坂ノ邊ニ住居、寛永十七年、由比正雪ニ組ス、

九郎右衛門

九郎右衛門土佐ヘ落テ後出生ナリ、

武兵衛

勘助

文右衛門

女

父養寺村 八右衛門妻

女

新右衛門

船井八反實者
地渡置

以根須佐平爲養子、船井村ニ住ス、室同村吉村氏女、

七右衛門

サヒ日浦込村岡村氏女、

武右衛門

根須邑本村ニ住居、此家エ九寸五步、矢ノ根ヲ相添仕渡ス、

元和元年五月七日

九四七

九四六

元和元年五月七日

彦右衛門

同邸赤木エ仕渡ス、

右新右衛門ヨリ以後之墓地、居屋鋪之内ニ有之、
彌兵衛ト云アリ、女岡村氏伊左衛門サイ、

新右衛門

妻日浦込村岡村氏女、

太平

明和八辛卯年永野村へ往ク、鎧ヲ持往仕附今ニ傳ル、此鎧今永野
ニ在、甲片袖不足尤宜キ品御(順カ)須覽之節御上覽ニ具エル、

喜八

永野村エ養子ニ成、

喜平

七右衛門

實ハ下タ田村公文氏、六右衛門長子、妻家女、

新右衛門

サヒ日浦込村岡村氏次郎右衛門女、

七右衛門

サヒ同村吉村氏權右衛門女、

女

同村吉村氏幸左衛門妻、

女

名跡榮藏妻、

女

日浦込村岡村氏弁作妻、

慶助

實ハ梅久保村藤次右衛門八男、

作之丞

サイ名跡彦右衛門女、

女

同村吉村氏權右衛門妻、

元和元年五月七日

元和元年五月七日

榮藏

實ハ日浦込村岡村氏善五衛門二男也、妻名跡新右衛門妻、

佐次右衛門

實日比原村名本久保氏彌傳次二男、サイ家女榮藏女、後妻安丸村、後妻(脱アルカ)榎山郷山崎村覺丞女、

女

左次衛門配偶、

女

同村吉村氏專六妻、

梶之助

早天、

女

慶助サヒ、

龜之助

早世、

九五〇

鉄五郎 ノチ榮藏ト改ム、

母榮藏女、サヒ上ノ尻大石氏幸六女、

女

母安丸、

○慶助 幼名巖平、後慶助ト革ム、

實ハ梅久保村北村氏藤次衛門八男七右衛門跡ヲ嗣ク、サヒ佐二右衛門女、

榮之助

早天、

女名

嫁梅久保村北村氏、

女名

金太郎

宇太郎

元和元年五月七日

九五二

元和元年五月七日

九五二

〔攝戰實錄〕

七六

明石掃部全登之傳

明石掃部全登ハ、備前中納言秀家の臣也、其父明石三郎左衛門景親ハ、赤松の浦上伊与守宗景の臣成りし、同臣宇喜多和泉守直家浦上家にて權勢の上、主人浦上家の領國を奪んと志を以、明石景親術を以、渠に組し謀反し、終ふ宗景を追ふ、是より直家より、浦上の領國備前美作を奪取を以、明石景親より厚く恩賞を與ふ、是より宇喜多家臣と成、直家より子備前中納言秀家代より、景親より子掃部、父の跡を繼奉仕を、文錄末慶長初年ハ、備前家にて功臣戸川花房等も立去を以、關ヶ原合戰の節ハ、明石掃部、其家の長臣と成、本多安房守とも、先手の大將と成合戰を、大坂方皆利を失ひ敗軍し、秀家も戰場より落足ニ付、家臣皆散々と成を以、明石掃部も沉落より潜居數年の處、秀頼公御謀反の志にて、諸宰人を被召抱ニ付、掃部も召し應じ、大坂城籠り、真田後藤も差續き、宗徒の者也故、真田等と申合、夏陣より、五月七日より、西國勢の後へ廻り切崩へきと申定る處、遅りしうを、天王寺の合戰ハ、落着して、真田も討死を、是より寄手皆々大坂差て押入あつを、今は是迄とく皆落去りぬ、明石掃部も戰場より直より立去、再落魄を、然共備前

家にてハ大身あれハ、宰人身上相應よして潜居を、大坂落城三年の後、籠城の者御免之由被仰出、掃部も是より押晴し身と云共、早老衰よ及ぶを以、浪人にて病死を、其子明石の苗字憚り、三方次郎左衛門と号じ、物ふと練達の者あれハ、慶長中年より、金山の儀を被仰出候ニ付、次郎左衛門此義を願ひ、佐渡の金山堀可申義を申御免を蒙り、佐渡へ行あり、堀之といふ共、マブノ金も取付を、父より宰人余計の有を以、此義も掛り、有金不殘遺失、今は是非あ、く京都を立飯る、其道中にて座頭の官も勸む爲、官金相調、官位も上ると申、行合、其座頭の所持の官金を是非借し申様よと申懸、不叶とあらを、忽ち殺害をへし、此義合點候て、其金子を借し送らハ、此度の金山成就の上ハ、早く返濟し、官位も可勸候様よをへしと急度申よ依、座頭否と申ハ、忽殺さるへき旨、是非よ不及、其金を渡されハ、次郎左衛門此金を以、佐渡へ參、又々堀掛られハ、マブニ取付、是より分限と成、りの座頭方へハ、早速右の金子を返し、檢校の官位も進ませり、座頭も約束の信義を不失仕方を感じ、相互ニ入魂あさりしと也、斯金山も出續繁昌ニ付、次郎左衛門京江戸駿府へ、毎度下り上りよ付、刀指し、鎧立る事を願、御免を得、鎧持せ往來を、此時の

元和元年五月七日

九五三

元和元年五月七日

九五四

格式を以、金山願人の鎧を持せタルといふ此事也、次郎左衛門此時分三方但馬と名乗さり、住居の京都よて豊饒にして一生を経る、京の妙覺寺よて葬、石塔今も在り、ケ様は佐渡よての御用よ掛り、公儀も專一成者おれ共、御扶持方のおし、御代官等同事よ口前を被下故也、依之但馬の子後年よ及、禁裏の記之所之列ニ願入相勤、是音樂御用司る處也、依之深尾左近將監と改號し勤む、其子深尾右近將監、其子左近將曹と相續、右役義よて甚輕き録也、官位ハ從六位上也、左近將曹よハ享保十三年病死、其子當時幼少なり、

全登ノ孫
深尾左近
將監

〔事實文編附録〕 三

明石掃部逸事

赤石正經

掃部頭名全登、明石氏、其先出於赤松次郎則村、々々五世裔孫周防守宗安、居播磨明石郡、因氏焉、宗安子左近清景、始徙備前國、全登則清景玄孫也、事天神山城主浦上宗景、爲其家老、宗景爲浮田直家所滅、乃事浮田氏、爲和氣郡大股城主、食祿三萬三千百十石、及浮田氏亡、漂泊不知所依、慶長季年、豐臣公秀頼募諸州兵士、全登往歸焉、勇戰之蹟炳載乎稗史、豐臣氏亡、乃復歸備前、居采邑

全登備前
ノ故郷ニ
選ルト

説

全登ノ墓

全登陸奥
ニ遁ルト
ノ説

小板屋村、徳川公盡誅大坂遺臣、全登家僕澤原源藏兵衛亦被逮捕、徳川公詰以全登所在、源藏兵衛詐答曰、吾主甚崇信邪蘇宗法、聞其法盛行于朝鮮、航海赴之、一身飄零、不知今果如何也、因泣然泣下、公信其言、不復問、而遂誅源藏兵衛、全登元和二年八月二十一日病没于家、葬於小板屋山西犀澤山、建五層石塔奉之、高六尺許、無有文、若銘、後數十年、子孫徙居他邑、宅趾爲草蕪、彷彿可認、土民稱之掃部邸、今訛曰鎌邸、以國訓相近似也、

正經曰、吾聞之齋藤子徳曰、明石掃部、去大坂、竄陸奥華仙郡、事覺被捕、將赴江戶、途得疾、卒於下野宇都宮、蓋明石氏累世襲稱掃部頭、掃部助、其事大坂、亦有二掃部、則知遁陸奥者、果非全登也、夫戰國之際、文獻無徵、巨族大豪、赫奕一時者、猶或沈湮不傳、况倍儻之賤、而采地不大、安得詳覈其實哉、今且錄野乘所記、與存土人口碑者、以補家譜之闕如此、

〔薩州舊傳記〕 八

土持大右衛門宅に、大坂落城以後、鹿兒島上田吳服屋の手代、夜々折節夜咄ニ参る由候、然も其比幾利支丹宗別多稠敷御制禁有之、右手代切支丹宗之由相知レ、此御方る擷取、上方に被召上候、其時大右衛門暇乞ニ被參候得者、彼手代、大右此内の段々叮嚀馳走忝之由相應申候、大

元和元年五月七日

九五五

全登ノ子
左近ノ摩
ラテ捕ヘ
ノハ

全登ノ子
内記ノ島
ノニテト

佃又右衛
門内記ノ
留メタル
嫌疑ニテ
福島正則
ルニ貴殺
ルニ貴殺

全登ノ家
臣草野原
孫兵衛廣
島ニテ捕
ハル

元和元年五月七日

九五六

右衛門ハ懇勸ニ返答、彼是被申候由、右手代ハ如何様成者ニ候哉、不審
存候、明石掃部子ノ明石左近ト爲申、秀頼之人ニ有、大坂落城以後、當
國ハ忍居被申候、大右衛門ハ其以前ノ知人ニ有候ニ付、夜々咄ニ被參候由、
此人物毎利を以、有之、木地ガミヘ、關東ノ落人御尋之儀、稠敷有之、只人ニ
有ハ、何らざると、夫ハ被召上候ト申説有之候。

〔士談會稿〕

明石掃部ノ嫡子内記、大坂落人と成候、廣島ニ下リ、佃又右衛
門所ニ一宿ス、翌朝罷立、此儀相知レ候て、又右衛門事、江戸ニ召呼、福島氏芝
之屋敷ニ有尋候得共、曾多不存候由申切候ニ付、大夫自身出られ、拷問の上
ニ炬松ノ火を付、又右衛門ニト付られ候、又右衛門ヒタリト身をひ絲
る、大夫眼を見出し、臆病をのめト絲を付ラル、又右衛門返事、クツをくら
へ、御手前ノやう成侍道ノ欠タル人間を、主ト頼奉公し、さるグ口惜次第也、
御手前ノ身ニ火を付て見やレ、此已後火をまき付候と、何とをすまし、ア
ツハレ御手前ノ用ニも可立侍ヲ、此やうにおシヤルもの、覺ておシヤレ
ト齒ガミをなげ、大夫をこまらま候得共、終よせめ殺サル、又草野原孫兵衛
ト申候、此、明石ハ附隨廣嶋迄も參候もの有、是を江戸ニ引レ、評定所ニ有

孫兵衛義
ヲ守リ主
ヲ言ハズ

全登ノ家
臣澤原孫
太郎節ヲ
守リテ全
登ノ在所

問狀ハ懸リ候へども、白狀不仕候ニ付、奉行衆被申候ハ、天下之御威光よて、
日本國中ニ罷有候ハ、知レぬと云事ハなし、有ていよ申セとの事也、孫兵
衛返答ニ、明石掃部浪人ものニ御座候得共、主人の有所を申候やうある腰
ぬけハ、一人も不召仕候、天下様御奉行之御威勢、此孫兵衛を命之限り御
せめ可被遊候、主人の居所、能々存有罷在候得共、ごんニ罷成候とて、申
上候義、罷罷成候と申切、中々おち不申候、奉行衆も希代ノ器量もの、命を
取候得者として、此上ハおち申まじとて、孫兵衛在所備前をく郡草野原村ニ
返し被遣候、諸大名ノ聞傳、五百石千石よて被召呼候、孫兵衛申候ハ、掃部
不仕合ものニ有、廣キ世界ヲふさげ候へば、我式二度奉公之望も無御座候、
其上侍のまををも仕候もの、アレハてんびんせめ逢候あと、人の口
ハ懸リ候を迷惑ニ候、中々御用ハ立候者ニ有ハ、無御座候あど、申候て、何
方ハ罷罷罷出、一代百姓ニ有終申候。

〔常山紀談〕

二十 澤原孫太郎節義赦免を蒙る事

明石掃部助全登大坂ノ籠リ、落城の後討死スル、や落行あるや定か
ならば、明石ノ士澤原孫太郎ノ一説ハ、孫を生捕て、明石ノ行衛を問る、ふ、志

元和元年五月七日

九五七

元和元年五月七日

九五八

らにといふ、さらばとて拷問よ及びれども、更よいをば、あまりよきびく責らまき、涙を流し、行方をいふふこそあまきとて、いかよと問ふよ、澤原いひたるハ、關東の兩御所の運によくおひし、ま候を感じ奉りての事よ候、士さるよどの者、骨をきまざる、とも、主君此ゆくへを申べきや、此度大坂軍、勝バ、兩御所落行せ給ふべし、其時御邊たちをからめて、今我をせめらま候ごとくあらば、主君此行方をも白状せべき心あれは、おそ、かく我を責らる、ならめとおもひ、おぼえに涙の流る、と申まき、人々詞あり、東照宮聞し召、さびあは忠義の士なり、よくいたそり候へと、御赦し有なるとぞ、今細川の家よ其子孫あり、又池田の家よ、何り、澤原ハ、備前磐梨郡の村名なり、孫太郎が一族、此村より出さりといふ、掃部が居城の跡、備前和氣郡和氣村の東の山上あり、

○以下渡邊糺、正榮尼ノコトニ係ル、

〔別本落穂集〕

十三 渡邊内藏介母子愛憐城内面々切腹之事

渡邊糺正榮尼ニ自害ヲ勸ム

問て云く、渡邊内藏介母子愛憐城内の面々切腹之義如何候哉、答て云く、是渡邊内藏介ハ、先刻を以て大手をふせきさ、へて深手をおひ、打物を杖よつ

きあから本丸よ來り、母の正榮よ見參していふをう、既よ君の御運是まよよて、寄手城中よ亂れ入て候へハ、是非なく自害仕るなり、母人の御事もよもや關東よ御たに事ハ有ぬ、そやく御自害とせ、せなれハ、正榮うち見らいて、みつから自害とハ兼て心得侍れハ、かあらに寂期を取まは、事よ何らに、其方深手をおひたま、自害あとを仕損して、をし寄手よ首をとられんも覺束なし、先其方切腹を見て、みつから安堵して自害せん、早く仕れと有なれハ、内藏介、母の御慈悲有かたし、然らハ御先へ參らんといむも、何へに、持たる刀をさか手よ取直して、腹よつきたてきるまよ及せ、背中へ四五寸つきぬき、うつふきよあり、そそよなり、正榮今ハ心安くして、頓てのんとぬ刃をつきたて、母子同し枕よ死よ、○下略、秀頼自殺セントスル

コトニ係ル、

〔寛政重修諸家譜〕

千三百 嵯峨源氏 渡邊

家傳云、先祖渡邊出雲守告山城國よ住し、其子宮内少輔昌、豐臣太閤よ依り、其男内藏助糺、豊臣秀頼よ仕へ、秀頼生害よとき、大坂をいて自殺せ、まき權兵衛守り父あまといふ、舊家嵯峨源氏渡邊兵九郎精、今子孫詳

渡邊糺ノ系圖

元和元年五月七日

九五九

元和元年五月七日

九六〇

う譜よ、始祖出雲守某、山城國田中に住し、松永久秀に屬せざるに其二男に宮内少輔某をかき、其の以下所見あり、今父子此呼名おれしきより考まへ、此家か乃宮内少輔の子孫あり、いまさ詳あらは、

守權兵衛

櫻田乃館德川ふつうふ、

勝權兵衛

女子 米倉丹後守昌尹の室

〔續武家閑談〕

八十 渡邊黨よ、代々攝津の士渡邊民部少輔子内藏助ハ、大坂落城のとき、櫓よて二男三男をさし殺し、めのとよ惣領を連來るへきよし申る、婆甲斐く、くも白小袖を着せしむるとて其場を遁き、澁紙よは、にて綱を下ケ、櫓よりおろし、其身も漸死を遁き、町屋の不淨所へ彼子を入置、日を経て逃去んとする時、關東勢よ捕へらる、色々拷問よ逢れども、渡邊内乃水谷清兵衛と申え、妻よ被成、己の子よ侍るよ、陳しける、彼子も六才よ成し、打擲して問はせられども、遂に内藏助子也と不申、依之金壹兩を出よ、末々の者の子おれをゆるすへきよ、關東勢申け

亂ノ子德川綱重ニ仕フ

亂ノ長子乳母ニ助ケラレテ遁ル

南禪寺ニ入りテ僧トナリ後還俗シテ德川綱重ニ仕フ

亂近江ニ遁レタリトノ説

天守ノ怪

る、彼女右乃子を質し、殘し、渡邊の郷に往き、百姓共よ頼まられ、土民どもも渡邊代々のよ、ミを思ひ、彼女の忠を感じ、金子をあらへし、漸々彼子を請出し、洛陽よ潜り居て、後よ老かの子を南禪寺の僧とあす、十八歳の時、一門の細川越州一柳土州あとり還俗させ、是も由緒有ゆへ、牧野兵部太輔後家前田了心母乃素心尼を以、清揚大君德川綱重へ仕へしめんと願ひたる、免角して事ゆるず、夫より數ヶ年を経、終に甲府へ被召抱、誠よ武功至極の内藏助子あればとて、五百石を賜り、輕卒の頭と成て、長くかの御家よ仕へ畢ぬ、是近き、大坂の渡邊權兵衛の父也、其娘を米倉丹後守よ嫁、内藏介ハ、秀頼の御行衛いり、ふもして御命計も安全にいらひ給へ、時を待んとて、大野よ暇乞し、近江の國へ落行暫休息せし、秀頼も御自害と聞へしと也、今ハ誰をり頼り露命をあらへ侍らんやとて、忽立あら腹を切らふよし、彼家の正説疑ひあり、討死と言き、定て内藏介ニ似と首あるゆへ、夫を名付る歟、

〔明良洪範〕

二十 大坂ニテ、秀頼籠城ニ及ヒケル前方、天守ノ五重目ノ兩方ヨリ煙リ出ケルニ、段々ト煙リツヨク立登リシ故、大坂中ノ者共追々見

元和元年五月七日

九六一

亂等薩摩
トノ野郎組
嘩嘩

元和元年五月七日

九六二

付、天守ノ燒候ト申ス、城中殊ノ外騒動仕リ候、城近所町々ノ女童ナドハ、雜具ヲ持テ逃迷ヒケリ、後ニヨクノ見候ラヘバ、天守ノ兩方ヨリ虹夥シク集マリ、雲霞ノ如ク空ニ立登リ、サナガラ煙ノ如ク見ヘ渡リシト也、後ニハ城中ニテ不吉ノ前表ナリト申シ合ヒケルト也、日頃秀頼ノ小姓ドモ十人計リ、其外近臣津田出雲守、渡邊内藏之助ト同道シテ、野田村ニ藤ノ花ヲ見物セントテ罷リ出シニ、其邊ニテ終日芝居シ酒盛シタリ、其後醉ニ乗ジテ五三人ヅ、小舟ニ打乗テ、福島海老江村ナドニ遊行シケルニ、家來共ハ皆々所々ニ行テ、林齋ト云盲人一人ノミ側ニ在シ所ニ、薩摩ノ野郎組ト云者、是モ六人計リ、藤ノ花見ニ來リシニ、例ノ太刀四尺計リナルニ、小サキ車ノ付タルヲ差テ、甚ダイカツナル體ニテ、出雲守ガ休ミ居タル所ヘ來リ慮外セシヨリ口論トナリ、薩摩者六人ナガラ抜合ヒ切テカ、リケレバ、出雲守十文字ノ鎗ニテ戰ヒ、六人ヲ野田ノ濱マデ追出シケル、彼者共濱ヨリ取テ返シ必死トナリケレバ、出雲守九ヶ所迄深手ヲ負、既ニ危ク見ヘケルガ、右ノ盲人、濱表ニ積アリケル割木ヲトリテ、六人ノ方ヘ透間ナク投付ケレバ、野郎共ニ當リテケレバ、少シヒルミシ内ニ、渡邊内藏之助遙ニ此體ヲミテ

萩原某ト
ノ口論

欠來リ合セ、六人ノ中三人討取、残り三人ヘ手ヲ負セシカバ、ホウノニ引ケル、其後家來共馳歸リ、出雲守ヲ介抱シテ大坂ヘ歸リケル、出雲守ハ其疵ニテ相果ケリ、其後籠城ノ時博勞ガ淵ノ砦ヲ一番ニ西國方蜂須賀家ニ乗取ラレシ故、彼野田ニテ西國方ニ出雲守ガ討シ事、且方角ト云不吉ノ由城内ニテウワサシケル、其頃渡邊内藏之助事、私用アリテ天王寺邊ヘ行ケル所ニ、關東ヨリ參リ候由ニテ、萩原ト云ル者ニ出合ヒ口論致シ候ラヒシガ、關東者ハ大勢ニ、内藏之助ヨウノ切拂ヒ、這々ノ體ニテ大坂ニ歸リシト也、又其節内藤新十郎、其外小身ナル者共生玉ヘ參リ候所、右ノ惡黨共ニ出合ヒ、大坂者餘多手負テ城中ヘ引取ケリ、右兩度ナガラ方角天王寺表ニテ、殊ニ相手ハ關東者ニ仕付ラレシユヘ、籠城ノ節モ、臆病者ト寄合テ不吉ノ沙汰ノミ申セシト也、其時内藤新十郎事ハ、鎗ノ柄ニ切込ミ所々コレアルヲ證據ニ差出シテ、手柄ノ様ニ申シ觸シケル所ニ、其切込ミハ自分ニテ致シ候由訴ヘ候者有シ故、大ヒニ面目ヲ失ヒケルトゾ、内藏之助事ヲ其頃鬼神ノ様ニ申セシ所、籠城ニナリテハ、サンノ様子ニテ在シト也、
略

元和元年五月七日

九六三

元和元年五月七日

九六四

〔本朝武藝小傳〕

七槍術 渡邊内藏助糺

糺ノ槍術
秀頼ノ師
内藏助流

渡邊内藏助源糺者、宮内少輔登男也、奉仕豊臣秀頼公、自壯年好槍術、悟其妙、嘗爲秀頼公師範、元和元乙卯年五月、浪速城没之時、顯勇名而自殺、凡遊糺之門者許多、得其宗者三人、船津八郎兵衛其一也、船津奉仕秀頼公、後仕河越侍從松平信綱、清水新助、從船津繼其技術、推曰船津流、或稱内藏助流、

〔諸寺過去帳〕

中城所友仙本

渡邊内藏助源尙宮内少輔某男、元和元年五月七日、於大坂戰死、源(マ、)太靜間

同日自殺、往想院西譽正榮源尙母

〔清凉史略〕

甲集 元和元乙

當年五月七日、渡邊正榮様御逝去ニ付、御葬式等、入用金正永様ノ請取

候覺、

一判金壹枚 御葬式料

一判金貳枚 四拾八夜別時料

一判金壹枚 御一周忌及第三年忌法事料

以上

正榮尼葬
式等ノ費

糺正榮尼
法名

正榮様御吊入用覺

一銀百目 御中蔭

一銀百目 □□及滿中蔭施餓鬼料

一銀百五拾□ □□□□灌頂

一銀百貳拾九匁 御石塔

以上

元和三丁巳

當年五月七日、往想院正榮大姉第三回忌相當、於栖霞寺修四十八念佛万福寺長老結衆十二人委有帳、

元和七辛五月七日、往想院西譽正榮大姉第七回忌御相當、則於清凉寺、三月十九日、をり四拾八執行ハ、

〔青大録〕

幸利様、他處ニ名ある浪人を御聞被遊候へハ、早束手筋御吟味被成、高祿を以て被召抱候、夫故名ある侍多く被召仕、何事も御事此欠候儀無之由、其頃大坂籠城の砌、手首尾能仕候と云、山本鐵齋と申、半人有之由被及聞召、京都御留守居尾關半左衛門當時宗八曾祖父也、を以て、鐵齋様子を御聞合御吟

糺組山本
鐵齋落城
後青山幸
利ニ仕ヘ
トス

元和元年五月七日

九六五

元和元年五月七日

九六六

味被仰付候上よ、可被召抱由御沙汰ニ付、半左衛門委細手寄ヲ以テ、大坂之働ヲ承合如左、

鐵齋口上書

山本鐵齋事 自是末ハ鐵齋口上書之覺

一先年大坂御合戰之時分、渡邊内藏介手ニ罷在候、五月六日、於道明寺表御合戰之砌、大坂ヲ爲士大將、真田左衛門佐、後藤又兵衛、渡邊内藏介、右三人、此處ニ罷出候、其外之諸勢不殘此場ニ罷出、道明寺表ニ出向申候、但軍ハ辰之刻ニ數度之懸合手柄無比類事、諸軍見物ニ候、其節真田左衛門佐子息大助ハいさん、山藤井寺ニ陣取、其間四丁宛ニ御座候間、内藏介働を目の下ニ見おろシ被居候、兩人共駈出不申候、是ハ心得之軍法ニ承候、

鐵齋ノ道明寺ニ於ケル働

一内藏介冬合戰之砌、其身も不存内藏介馬印大勢之敗軍ニ被引立、城中迄參候を一入無念ニ存、此度者大差物を自身腰ニ指、一足も不引心入ニ御座候處、又内藏介人數敗軍仕候、其時私親山本伊右衛門と申候、兄も此場よ、一處ニ討死仕候、然共内藏介一人踏留り、近處ニ幸私と山田頼母兩人罷在候、頼母申候ハ、今日之士大將と御名乗可然哉と申ニ付、尤と、田

此あせの少し高き處ニあけ上り、今日之侍大將渡邊内藏介手之者山田頼母、川村外記と名乗申候得ハ、正宗殿御手と、兩三人、黒具足同色ニ御座候武者、け出、内藏介へ突掛り、此方も三人よ、半時計せり合申候得共、何も勝負見へ不申候處、敵を鉄炮打り、内藏介むあふ臍を打おられ、下ニ罷在候をいり、と存候處ニ、右之三人鎗を捨、拔、抜、抜、首を取、掛申候を、頼母私兩人切拂、内藏介を肩より引掛退申候處、又手之者とも返し合、無異儀城中へ引取申候、此儀ハ其日道明寺表ニ居立候か、大形可存候、私具足ハ朱の具足金銀の山道紺之、ま、金銀のほり合、候、敵よ一入目ふあけ、稠敷鉄炮を打あけ候へ共、無異儀候、指物ハ大間様(由緒カ)りて物頭指申候を、私親(ウカ)よゆつり候、緒所御座候、私事幼少之時分、木村長州袖を留くれられ、川村外記と申候、真田左衛門佐ハ具足をきせ給り候、故別多六日之日之合戰、真田左衛門佐被致見物候と後、承候、右之組ニ罷在候者若し生残り候ハ、御尋可有候、

一七日、秀頼公櫻之御門迄御出馬之時、速水甲斐守取次よ、右之働之様子一々被申達、山田頼母、川村外記兩人ハ御目見仕、則忝御意御座候、此節猶

元和元年五月七日

九六七

元和元年五月七日

九六八

以諸人之見聞ニ御座候其時秀頼公紗ノ御羽織ニ御立付御召被成候御馬ハ七寸計も可有御座候

糺自殺ス

糺ノ子權兵衛徳川綱重ニ仕

一七日酉ノ刻時分ニ御城ヨリ歸リ忠之者出來火を懸申候ニ付秀頼公御前ヨリ内藏介切腹申候秀頼公被下候きり貞宗壹尺八寸御座候脇差ニテ私介錯仕候其座ヨリ内藏介世倅渡邊權之助と申テ十歳計ニ罷成候只今左馬頭様綱重ニ被召仕渡邊權兵衛と申罷在候右私證據人ハ權兵衛ヨリ御座候其座ヨリ切腹可仕と存候得共頼母達ヨリ引留申ニ付任其儀立退申候

鐵齋淡路ニ遁ル

鐵齋池田忠雄ニ預ケラル

一七日之晚落城以後頼母私一處ニ立退三日ハ山ヨリ籠其以後淡路島筋目有之方へ參候處池田宮内少輔様ヨリ御穿鑿ヨリ切腹ニ及候處土井大炊頭被承先宮内様ニ御預ニ罷成其時御使松平庄右衛門殿花房五郎左衛門殿ニテ尤土井大炊頭家來寺田與右衛門も參申候其後宮内殿備前御拜領ニ付テ私事供仕參候ヨリ八年少知ニテ罷在候殊之外懇ヨリ鷹迄ウルされ申候

鐵齋土井利勝ニ仕

一其後大炊頭ヨリ松平新太郎殿御内日置豐前ヲ以被申請二十ヶ年ニ及

ひ大炊頭ニ奉公仕候大炊頭心易仕被申候間御大名様方御旗本御衆中御存知之方も可有御座候其節私儀山本權右衛門ト申候其後品御座候ヨリ大炊頭下致浪人候處松平新太郎様ヨリ可被召抱之由ニテ度々被仰下候得共致遠慮不罷出浪人之内兩度御國元ニ伺公仕候ヨリ預御馳走候一其後藤堂大學頭様ヨリ藤堂采女永田主馬ヲ以可被召仕ト被仰下候得共遠慮御座候ヨリ取組不申候

一尾張様ヨリ間宮大隅松平助之進ヲ以忝御意候得共遠慮ニテ御請不申上候此段于今證據之狀有之候

一近年ハ安藝守殿御内寺西將監筋目ニテ國元下屋敷ニ罷在候彈正様ヨリ御懇之仰候得共御早世ヨリ首尾不仕候私行年七十八冬ノ御陣ハ十七夏御陣ハ十八歳ニテ御座候

一私親山本伊左衛門儀大坂御陣以後古雅樂頭殿ニ罷在候今以一類共數多御座候以上

右鉄齋可被召抱思召右之書物入御覽候定ヨリ可被召抱是程迄ホキ浪人サヘ少々手首尾能ものハ被召抱候間必定可被召抱と御家中之面々末々の

幸利鐵齋ヲ疑ウテ召抱ヘズ

元和元年五月七日

九六九

者迄恐察仕候處、其通よく御捨置被成候、幸利様思召ニ者、木村ニ袖を被留、眞田ニ具足ヲ着せ貫しハ、筋目一通あらぬもの也、誠ニ秀頼御直之褒美、も預りし程の者、落城之節逃落たしハ、不心得、腰ぬけて落さる、さあ、くハ此書付偽書、何れニ御心入不申候趣よく不召抱候由、少々此儀、も、武士此意味合之悪敷ものハ、毛頭御取上ケ不被遊、浪人被召抱候、も、御吟味委敷事、是ヲ以て乍恐可考、

○以下堀田圖書等ノコトニ係ル、

〔永日記〕大坂七組の内、堀田圖書殊之外よし、甥の平右衛門見事の鎧を、する也、大坂の手遣ひ、冬と夏と相違、夏の様は冬、冬の様は夏よりらんと也、

〔常山紀談〕二十 郡主馬事

郡主馬良利ハ秀吉の臣あり、石田權威を恣よせんとせり、人をなつらん、爲よ、公用よ金銀を出し事あまば、必其半を引け、密に私よあまふ、郡もかゝる事有し、ふ、何らそふあらば禍よあんと思ひ、辱きよし、石田お謝して、其金ハ大坂の庫よ收め置たり、それよ病と稱して出仕もせ、後、旗奉行よりしる、大坂落城の日、千疊敷よ歸り、床の上よ旗を置、去年の冬、

七組ノ中
堀田圖書
殊ニ優レタリ

郡主馬良利
石田三成ヨリ
贈レシ
金ヲ大坂
ノ庫ニ蓄

主馬黒田
長政ヨリ
贈ラレシ
協差ヲ長
政ニ返ス

郡主馬自
殺ス

藤堂高虎天王寺よあし入し時、速見時之と謀を合せ、夜討をへきを寵臣よ、妨げらぬ、住吉平野の陣所よ忍びを入、火をうけて不意、一軍せんと、いひ、謀も用ひらば、運盡ぬると思へ、バ口惜とて、從者よ、此小脇差ハ、黒田長政我よ贈らましとき、用る事有、功を立んといひし詞ある、ゆゑなり、よく長政よいひ返し候へと遺言し、其子兵藏と、もに自害に、行年七十、一歳とかや、秀吉の時より、黄母衣ゆるさま、り、

〔大坂記〕大坂勢逃亡之、夏、秀頼自害ノ事

郡主馬正ハ、太閤ヨリ、黄母衣御免有テ、數度武功ノ勇士也、今日天王寺表へ、出張シ、御旗ヲ押立ケルガ、巳ノ刻ニ、敗軍ノ跡ヲ見テ、爰ニ來リ、預ケ置ル、處ノ御旗ヲ押立、甲冑ヲ脱、母衣ヲ床ノ上ニ置キ、日比出仕ノ如ク、拜禮シ、押、ハタヌキテ曰、兼テ御自滅ノ想アリ、然シテ後悔ハ先ニハ立サル物也ト云、モアヘズ、腹カキ切、郎等ヲ招キ、汝介錯シテ、此短刀ヲ黒田筑前守ニ可達ト、云含メ、首ヲ討セニケリ、是ハ片桐ガ諫言御耳ニ逆イ、當年後藤又兵衛ガ謀、ヲ用イ不給、去年籠城ノ時、藤堂ガ卒爾ニ天王寺ニ入テ、速水ト内談シテ、明、曉兵ヲ可發ト云シ、善言ヲ智謀ナキ輩不用、此事ヲ日比心ニ思イケルガ、取、

津川左近
ノ自害

野々村伊
豫鳥居成
次ノ戦フ

伊豫ノ戦
死

元和元年五月七日

九七二

期ニ及ンテ云シト云云、歳七十一歳成田兵藏、眞野藏人、中島式部モ一所ニ
自害ス、堀田圖書、野々村伊与南表へ出張シケルガ、城中へ引入ケルニ、早猛
火ニムセヒ、本丸ト二ノ丸ノ中段ニシテ、石垣ノ上ニ双ンテ自害ス、津川左
近ハ斯波氏ノ末葉也、瓢單ノ馬檢ヲ預リ、岡山へ上ルトイへ共、敗軍ノ上ハ
討死スベキト思イシガ、御馬印雜人ノ手ニ掛ンモ本意ニアラサレハ、戰場
ヲ遁レ、秀頼卿ニ相理リ、駸辰テ自害ス、

〔別本落穂集〕

十三

諸士武功高名、附野々村伊豫守討死之事

○上略、阿部正次、御旗本ヨリ鳥居士佐守討て出る、是を我等よまかせ給へ
等ノ勳ヲ記ス、野々村伊豫守一分ノ軍勢を引從へテ、土佐守ヨリたゞ
と、惣勢の中ヨリ野々村伊豫守一家ノ十三騎討れられ、野々村も宗徒ノ郎等十
以、散々よ攻戰ふ、土佐守ノ家人十三騎討れられ、野々村も宗徒ノ郎等十
八人討とられ、味方ノ勢へくゞ、とゞる所を、横合よ酒井雅樂頭ノ軍勢
さしもや引せしと打て出て、甲首を三十取りたりたるニ、野々村もえやの
かまぬ所、爰よて討死せんと討殘されし軍勢ノ備へをつくり引かへ、
關東かよ、且井上主計乃軍勢、爰を請取候といむも、あへて討てか、且宗
徒ノ郎等十六人手ノ下ようちとてたゞ、又安藤次右衛門加賀利常多勢を

仙石宗也
ノ系圖

以て取まき、野々村爰よて討死、略、○下

〔寛政重修諸家譜〕

三百

仙石秀久

權兵衛、
越前守

女子 實は某氏乃女、秀久み養をまゐ、佐野半四郎政秀ノ妻とあはれ、

某式部 母ハ伊豫守々々、村某ノ女、病リヨリ嫡子せられ、

某豐前守 母ハ上におれ、豊臣秀頼リつりふ、

女子 母ハ上におあし、古田山城守某ノ妻、

忠政 左門、三左衛門、
兵部、大輔 母ハ上におれ、

某市藏 母ハ上におあし、

某丹後 母ハ某氏、

某内膳 母ハ某氏、

久隆 彌兵衛、左
近、大和守 仙石彌兵衛久功ノ祖、母ハ式部某におあし、

某菊平 母ハ某氏、

女子 母ハ式部某におれ、大久保權之助某ノ妻、

女子 母ハ某氏、藤堂和泉守家臣藤堂仁右衛門某ノ妻、

女子 母ハ某氏、家臣森左馬之進某ノ妻、

元和元年五月七日

九七三

元和元年五月七日

九七四

〔某主水〕 母ハ某氏、駿河大納言忠長卿ヲ侍ル、

〔諸寺過去帳〕下 廬山寺

持明院基
久法名

永壽院贈大納言松月如空持明院基久、慶長廿乙卯年五月二十八日卒、三十歳

〔武功雜記〕一十 大坂御陣之刻、平野遠江守長ハ出氣トテ不參ス、實ハ太閤ノ御恩ウケナカラ、敵トナルハ不快ユヘナリ、權平勝○長ハ城ニアリ、遠州

平野長勝

申付テ知行所ヨリ兵糧ヲ入ル、遠州願ハ、大坂ヘノホリ、權平ヲツレ出度

トノ事ナレトモ、御許容ナクシテ江戸ニアリ、何レモ申サル、ハ、貴殿ヲト

ヒ大坂ヘノボレタリトモ、子息ヲツレ出ス事ナラズハイカシ、遠州、若左様

ニ候ハ、某モ幸ト籠城スベキト申サル、御掌握以後、遠州今度在江戸ノ儀

御直ニ御感ナサル、遠州、私儀ハ籠城ヲ願ヒ候ヘトモ、被成御押留候ユヘニ、

心ナラズ在江戸仕候トノ御請ナリ、

〔常山紀談〕二十 伊藤武藏守馬驗を拾ふ事

同日、五月七日 秀頼ハ樓門イヲ打出、灑金を緋威ヨリイスる物具著テ、太閤の

時より傳ヘラまし金の切さた二十本、茜染の吹貫十本、玳瑁の千本鎗を並

べさて、大平樂と名付さる七寸有し黒の馬引さてらまし所、先陣皆敗北

父長泰大
坂ニ入城
セシトシ
テ果サズ

伊藤武藏
馬驗ヲ拾
フ

小笠原權
之丞ノ家
康ノ子ナ
リトノ説

切支丹タ
セル故改
易

權之丞西
郷惣右衛
門共ニ衛
城大坂ニ
ス

しなると聞えなれば、今ハ是まであり、敵の中ふかけ入討死せんと進まれ
しを、速水時之、今打て出さりともし勝利候まじ、疾本丸よ入せ給へとて引返
せ、かゝりなきバ士卒ちりイト成、馬を棄たりし、伊藤武藏守
に、かくれて歸入し、是を見、朝鮮まで聞えし豊臣家の馬を、敵に
ろひあバ大坂城中ふをのこ、一人もあきと、日本國中の物笑ひとならん
といふまゝ、に、手づからふりうさげて、城中千疊敷に歸入なり、

〔御降誕考〕八十五 權之丞殿誕生の御事不分明、公康御本妻被召

仕、大きい小さいと云々女房達二人あり、大きい公御子懷妊、御本妻深く御
隱密其節、小笠原越中守朝といふ人、歴々之者本妻死去、幸と有、大妻越

中守方へ被遣、越中守よ誕生ゆへ、小笠原權之丞殿と號、越中守吉利支丹

ゆへ改易權之丞殿も共、牢人、上方よ被居候節、甲州の者よ西郷惣右衛門

といふもの有之、公被召仕候所、吉利支丹ゆへ、越中守同前改易、上方よ有

之、越中守同宗旨故、權之丞殿と上方よて入魂、惣右衛門大坂籠權之丞殿

も大坂へ被籠、於大坂權之丞殿、公御子行カ無之由風聞、三十騎不と預り被差置

候とき、冬陣中こゝかゝこよの様子、大坂よても目よ立候つるよし、夏御

元和元年五月七日

九七五

元和元年五月七日

九七六

陣五月七日、天王寺表へ被出候節、權之丞殿存候者とも、天王寺表之體を見
ため、權之丞殿被出候へ、其方義ハ少しもくるしかるまゝ、き旨雖諫申、
權之丞殿、我雖不知、公の子と風聞ある、去冬中より籠城いとし、定く何そ一
手立をもいとし、公へ可致忠義同意よ、籠めと存候故も可有之候、我もし
存命出者、定く權之丞一謀をも可仕可罷出と存候處、其甲斐あく逃出候
と以來批判可有之候、我其心毛頭無之候、無二、秀頼公へ忠節可申と存知、
此表之體無是非討死、相究たりと有、天王寺口よ、大勢の手、懸入討
死あり、大形越前の手よ、可有之と申候き、この物語ハ山川帶刀、小川次郎
兵衛、松田利助、首藤八左衛門、水野伊右衛門、あと同備よ、有之つる物語あ
り、

〔武功雜記〕

六

大坂陣六年前ヨリ、邪宗法度ツヨク被仰付、二年前三河ハ
ツニ居候小笠原權之丞、邪宗ユヘ追放被仰付、三河ヲ立退テ小濱右京方へ
立寄通り候ヲ、右京カクシオキ候ヤトテ御穿鑿アリ、右京迷惑仕候へトモ、
後ニハ云ワケ立候權之丞ハ千石領知仕候、權現様遺子トモ申沙汰候、

〔武功雜記〕

二

渡邊内藏介ト大野修理同座ノ所へ、後藤又兵衛來リ、オモ

シロキ事ヲウケタマハリ候、大住與左衛門ハ、東へ内通ノアルトナリ、修理、
イヤ、與左衛門ニカギリ、其氣遣カツテ無之、アレハ大間ノ魚洗ニテア
リシヲ、實ナルモノトテ御取立ナサレテ、秀頼公ニ御機嫌ヨク物ヲアガラ
セヨトテ御付ナサレ候、今度御籠城以後モ、方々アマタノ倉ノ鑰ヲ與左衛
門一人カ手前ニトリ置晝夜ヲカキラス御用ヲ辨シ見廻リ候、アノ心入ニ
テハ中々二心アルマシキモノナリト云、又兵衛、鈍ナルモノヨリモ、其様ナ
モノガ、結句氣遣ニ候ト云、如案市正外ヨリ、火矢ヲ射タル時、内ヨリ火ヲ付
候ハ與左衛門カ所行ナリシ、

〔筆のすさび〕

二

樽崎景忠 樽崎十兵衛尉景忠といふ人、備後の府中に
住す、水野侯入國の時に、景忠がことをたづねられしに、此もの大坂籠城の
士なれば、答あるべしとおもひけるに、處の里正より既に死せよよを
いつそり申しければ、勝成公歎息して、大坂城中にて二十四反の母衣をか
け、貫木を飛び越したるをまのあたり見うけぬ、大力の精兵當時名譽かぐ
はしかりしもの、あはれ世にあらば、祿千石はをすからずとのたまひける、
里正これを聞て悔ゆれども詮かたなかりし、樽崎は同國久佐村二子城に

元和元年五月七日

九七七

元和元年五月七日

九七八

あり、樽崎加賀守豊氏といふ人の後なり、豊氏、正慶二年、足利より蘆田郡の地頭に補せらる、

二宮與三右衛門

〔備前老人物語〕

○遺老物 語一所收

關ヶ原の戦に筑前中納言殿の、少々高き所に陣を取給ふ、彼麓の方ふあやうき鐵炮の音聞えければ、今日の使番二宮與三右衛門をめて、今の鐵炮の音心許なく、急て見て參るへいと仰ければ、畏て候と申て、馬をひひかせ、かちたちて麓に下りけるに、麓へても武者一騎のほりけるか、二宮にゆきむかひ、貴殿の今の鐵炮の音につきて、麓のありさぬ見よとの御使候や、某その事につきて、中納言様への使也、今の鐵炮の藥あめりければ、うちすてし也、すこしも御氣遣なる事にあらず、御心安しめされ候へとの事に候、もはや御出におよふへからず、此旨仰上られ候へといふ、二宮聞て、其方も使我等も使也、あれに平岡石見守罷在ル、石見守におほせ入れ候へといふ、再三にをよひて、無用のよしをいひてと、めしに、二宮の互に使なれ、面々埒明たるか能候とあひそうなげにいひ捨て、たちわかれ、麓の躰を見聞に、かの使のいひしにかそりて、すこしころありて、むつかうき躰をよくく見届て、たち歸、此旨くそく申ければ、

與三右衛門戰死ス

中納言殿聞召れ、よくこそ見て參りたれと感し給ひ、褒美など給りけり、其時によるへき事なれと、使たらんもの、心得かくあるへき事也と、坂崎半兵衛語りし也、又此與三右衛門の、わうた時に二宮與太郎といひしもの也、大坂陣の時は、天王寺口にして、三宿越前守と一所に討死せしよし、坂崎又語り、

〔紀伊國續風土記〕

六十四 日高郡二

蘭莊 御坊村

吳婆字

舊家

地士 宮井万平

宮井重家戰死ス

宮井氏、姓ハ藤原、宇都宮豊綱伊豫國大洲の城主ありて、足利家より永祿中大洲城没落ス、其の子豊重始めて宮井の氏を稱し、土佐國に蟄居、都のヤイの訓あり、因りて其子宗重、淺野侯に仕へて廣島に移る、弟重家大坂に籠城し、元和元年戰死す、其子万吉郎重定、父討死の後、切目莊島田村に住し、切目八幡宮の座首となる、後當村に住して、代々地士に命せらる、

〔皇國名醫傳前編〕

下 竹田氏

略 上 定加、一名光英、號雄譽

元龜二年、正親町帝患

痢、定加奉藥驗、叙法眼、天正九年、宮女罹瘡、衆治無驗、定加與藥一劑而差、進法印、織田氏豊臣氏、以其良工、皆異待之、子定白、定宣、定白、號永應齋叙法印、大阪之役

白竹田定戰死ス

元和元年五月七日

九七九

在城戰死、定宣承家後仕神祖、爲醫官、

大野治長、秀賴夫人德川氏千ヲ城ヨリ脱セシメ、使ヲ家康ノ行營ニ遣シテ、秀賴母子ノ助命ヲ請ハシム、

〔駿府記〕五月七日、申刻從城中、大野修理郎從米村權右衛門爲使參于茶白

山、以本多上野介、後藤少三郎訴申云、諸宰人不殘討死、今日姫君城中令出給於岡山御座、秀賴并御母儀、其外女中數輩、大野修理母子、速水甲斐守、其外山里帶クルワ二間五間之庫ニ取籠リ給由、秀賴并御母儀命於御助者修理ヲ始各切腹可仕由、則上野介披露之處、可有御赦免、幕下可令問之旨雖被仰、及黄昏、右之使者被召預于後藤少三郎云々、

〔義演准后日記〕九十五月九日、雨、姫君城御出、伏見城へ今日御着云々、是ハ

大野修理馳走申出云々、其子細ハ修理母大藏子共、京ニ在之、御タスケニ可預トテ出申由風聞

〔細川家記〕十四 忠興八

一姫君様無何事被成御出、兩御所様御満足不斜候事、○上下略、五月十一日、附氏家入老外五人宛、興書狀、

〔萩藩閩録遺漏〕一四ノ 中澤九郎左衛門所持

一姫君様ヲハ、七日落去之刻、御城ハ被成御引取候て、伏見ニ被成御着候、○下略、五月十四日、附福原、越後外六名宛、毛利秀元書狀、全文ハ五月八日ノ條ニ收ム、

〔寒松日記〕一 五月廿五日、班雨、籌筑自大坂歸宅、實說初聞、六七兩日合戰、七日夜

中、從城中送姫君於御陣中來、駉騎八日入二條、姫君聞騎入二條而入二條云々、〔細川營也、乃入伏見〕

〔大坂御陣山口休菴咄〕天樹院様御城出之事

〔五月〕同七日、方々の攻口よおめて、大坂勢打負候故、秀賴公并御母公、大野修理と御相談にて、秀賴公之御前姫君様を城中ハ出し、大御所様へ御送り被成候、御供よハ南部志摩守と申者一人、馬上よて御こしの先を拂、大坂ハ姫君様御出被成候間、何も道を開き候へと敵方へ相斷、天王寺表へ御乗物一挺よて出し申候、内々ハ敵方ハ御姫君様を出候様ニとの手〔たカ〕にてても在之候由、取沙汰御座候先御城を御出被成候ハ如此御座候、

〔山本日記〕大坂御本丸火ノカ、ル時、内ヨリ姫君様出シ申事ハ、此上御一所ニ果シ申テモ無詮事出シ奉ル、俄事ニテ其期ナレハ、イカニモシタルヤ

治長家臣
米村權右
衛門ヲ遣
ス
千姫岡山
ニ至ル
秀賴等山
里曲輪ニ
居ル
家康助命
ノコトヲ
秀忠ニ問
ハシム
治長千姫
ヲ脱セシ
メシニツ
キテノ風
説

秀賴母淺
井氏治長
等千姫ヲ
脱出セシ
ム
南部志摩
守千姫ニ
從フ

元和元年五月七日

九八二

ラン、鹿相ナル乗物ニ乗セ參ラセ、上下六拾人計ニテ、鎗ノ柄切折棒程ニメ、天王寺表へ御出被成、皆名乗テ御輿近邊人ヲ拂テ出ル、坂崎出羽守ト云異風者乗向ヒシガ、彼異風者モ拂ワレ、御供仕ラント申モ近邊エ不寄セ、御本陣へ御案内仕ラント、先へ乗ヌケ、家康公へ御注進申、我才覺ヲ以テ御供仕タル様ニ、其砌モ云フラシ、其時家康公御詞質ヲ取、後ニ何カト申故終ニ討果サル、也、

〔祕覺集〕西島氏書記寫

大坂勢ちゞ々、八方へ敗軍仕候、寄衆城きゞゞまで御押詰被成候、高虎公も天王寺口之門際まで御押詰、自然城よりつき出候ハ、御仕留可被成とて、御人數御集メ被成御座候、然内ニ天守ニ火の手上ニ申候、城よりつき申事も無御座候キ、扱暫候、城内ハ女郎を壹人負申、供の女二十計ニ罷出候、五十余りの老女一人(之カ)よのせ、警固之者廿人計、竹杖をひきかこみ御簾中様ニ御座候由、扱とやく仕候内、城中方々ハ火の手上リ炎上仕候、晚ヨ及ヒ寄衆おもひゞゞ、七日夜野陣ニ御座候、高虎公も暮ヨ及ヒ、城際を引取御在陣被成候、

〔寛政重修諸家譜〕

七百四十四

堀内氏久

主水

母は九鬼大隅守嘉隆の養女、

元和元年、秀頼乃はねきふよめて、大坂にこゑを、五月七日落城此とき、氏久、茂よひ南部左門某、刑部卿乃局等と、もに千姫君茂護したては、城、茂出、坂崎出羽守直行の仕寄にいた、直行よはきて茶磨山乃御本陣ふいたる、あのとよハ、めて東照宮に拜謁し、後めさまで台徳院殿よは、へた、は、け、下總國のうちにして、采地五百石をたまひ、その、ち大番に列、
〔本光國師日記〕
八十 八月十七日、一乘院殿、八月十五日御狀來、島田越後と云者、大坂ニ奉公申候へ共、片切(桐)主膳肝煎よて、衆徒ニ先年入候、今度大坂へ籠り候ツル、姫君様之供仕候、出候間、又衆徒ニ入候、んと申來、此狀ハ目安箱ニ入置、則返書遣ス、案左ニ有之、

御書忝存候、衆徒嶋田越後と哉覽儀被仰越候、一圓様子不存候、可被成其御心得候、此由可有御披露候、恐々謹言、

八月十七日

金地院

一門様御内

中沼左京殿

元和元年五月七日

九八三

○秀頼夫人徳川氏秀頼ニ嫁セシコト、慶長八年七月二十八日ニ、江戸ニ歸ルコト、本年七月三十日ニ、本多忠刻ニ嫁スルコト、及坂崎出羽守之ヲ妨ゲントシテ誅セラレ、コト、元和二年九月ニ、又堀内氏久ノ徳川氏ヲ護送セル功ニヨリ、一族ノ罪ヲ減ゼラル、コト、本月十一日ニ其條アリ、竝ニ參看スベシ、

〔参考〕

〔大坂陣物語〕 天壽院様大坂落城之節御供申參候者堀内主水と申候者、坂崎出羽守と知音故出羽守小屋へ御同道申候、後主水よ千石被下置候由、坂崎ハ浮田左京事也、

〔元寛日記〕

一 七日ノ晚景大坂勢悉ク敗軍也、城ニ放火、南部左門、中川小兵衛、村井喜兵衛等カ方へ、本多正信方ヨリ内通シケレハ、姫君ヲ奉盜出、送正信ノ陣、取送正信ノ方ヘト云云、一説、坂崎出羽守入城中奉 姫君遁出給フヲ、速見甲斐守見之奉取留ト云、大野修理亮カ云、無用也、姫君モ流石御夫婦之事ナレハ、何トツ兩將軍家へ嘆キ給ハ、御命計ハ申宥給フ事有シカト云テ、甲斐守ヲ押留シタリケリ、

堀内氏久
守出羽
坂崎出羽
守出羽
ナリ知音
リ千姫ヨ
其營ニ送
ル

本多正信
千姫ヲ脱
出セシム
トノ説ヲ
治長之説
黙視ス

〔大坂記〕

大坂勢逃亡之夏、秀頼自害ノ事

秀頼卿御母公ヲ勾引シテ、天守ノ上ニ登リ、自害可有處ニ、速水甲斐守カ曰、軍ノ慎ミハ先陣敗シテモ、後陣利有事多シ、先御遠慮可有ト云云、(控方) 誠ニ頼ミナキトイエ共、老兵ノ異見ニ任テ、天守ヨリ下リ給イ、東ノ櫓ニ入テ抱ラレニケル、此時ニ至テ、修理大夫治長、秀頼ノ御臺所ニ申上ケルハ、兩御所ノ御前ヲ能様ニ申サセ給イ、秀頼公并ニ御母公ノ御命ヲ助ケサセ給ヘト申含メニケリ、御輿モナケレハ、帷子ニテ御貞ヲ掩イ、下人ニ負セ奉リ、刑部卿ノ局ヲ指添、坂崎出羽守カ陣所へ入奉ル、坂崎大キニ悦ヒ、則アヤシケ成御輿ニ召サセ、大御所ノ御陣所へ入奉ル、大御所ハ不斜喜バセ給ヘ共、大樹ハ御機嫌不宜、女性成共、秀頼ト共ニ燒死ヘキ處ニ、見苦敷出タリトテ、久敷御對面モナカリシトカ哉、○上略

〔續武家閑談〕

七十 八日の朝、藏の内よ秀頼籠り給ひたる前迄者五六百人(右カ) 從ひてなるり、皆落失て廿八人と成ぬ、大野修理亮簾中よ向ひ奉り、淀殿并大府の御命助ケ給ふ様よ、兩公へ可被仰上候とて、刑部卿の局女中壹人付奉り、南部左門堀内主水をそへく出、奉りぬ、爰に堀崎出羽守、大御所彼御

秀忠千姫
悦脱出ヲ
ノ説

坂崎出羽
守千姫ヲ
救フ

簾中の御事御苦勞よ思召故、煙の中馳廻り尋逢奉り、則帷子にて姫君の御顔を隠し、下人よ負せ奉り、我陣へ入奉る。漸興よ乗せ申、大御所の御憂苦を散し奉れ、羽刃大り喜悅し、御本陣へ移し申ぬ。甚(カ)して甚御感有て、羽刃面目を施したる、然まとも將軍の、我老女成とも、秀頼と一所よ身を没して、そ本意あれ、見苦躰哉と御對面あし、翌九日、二條の御城へ入奉り、又伏見御城へ渡らせ給ふ。堀内老、十六日將軍家へ被召出、則五百石被下、是老新宮の城主、みて關原の後領知沒收努らまじ、安房守氏茂り子也、又南部左衛門(行カ)の、南部信濃守直利構有之者、達て御斷申上るゆへ、御知行老止らまて、金五十枚被下之、罪老信濃守可宥之由也。

〔燒殘反古〕

乾

大坂落城之時、秀頼卿御臺様御出之事

大坂落去城中ニ火懸秀頼卿以下御生害也、此時兩御所様者、秀頼卿御臺様と云也。後天樹院之御事病敷被思召、誰人ニあるも、城中に走入、奥方を伴ひ出る者あら、不撰貴賤妻女とあし、其上賞祿を給らんと被仰出、然處ニ城より大野修理罷出、寄手之矢口を留め呼はりたる、秀頼卿御臺様可奉出、誰御受取可有と云、折節坂崎出羽守貞盛居合承之、則城中に入て請取、堀内九助と云

家康千姫
ヲ救フモ
ノニシテ
嫁セシメ
ト約ス

家康坂崎
出羽守ノ
功ヲ賞シ
婚嫁ノ約
トス

者ニおはせ奉り勝山に參る、御兩公御太悅不斜、誠ニ汝り働き一人當千之兵と被仰、則一万石御加恩被下、其上御臺様を妻女可被下之由御契約也、出羽守難有奉存、諸軍もうらやみ冥加之者と感しける、○下略、千姫、本多忠刻、嫁スルコトニ係ル、

元和二年九月二日收

〔異說區々〕

乾

天樹院殿を坂崎出羽守助奉り、東北御陣へ御供し奉る

れ老、秀忠公ハ、秀頼と一所りハなせ死あぬぞ、なせり生々來りしといくらせ給ふ、神君ハ、坂崎よよく控は來まり、控ちよくまんとの給ふ、江戸へ御歸の時、忠刻角前髪此美男にく、毛みの下帶茂し、尻をそいおこさ、金のさいを以を打、舟の音頭さし圖を志さる、御心むけ有、忠刻よ嫁し給ひぬ、坂崎ハ御約束あてし事など言て悲フツクみられハ亡滅しぬ、此事など寫本此老のよき有、

天樹院殿入興ありなれとも、關東をきつういかり、秀頼一度も奥へ入らばと云、

〔越登賀三州志〕

十〇 雜考

浪華再役、發金城、并功士舉名

秀頼君ノ御臺ハ、台徳公ノ姫君ナリ、秀頼君生害ノ時、天守へ上ラントシ玉

千姫脱出
ノ一説

秀頼ト千
姫ノ關係
ノ一説

フヲ乳母携へ行キ、本丸ノ塹へ衝墮シ、乳母モ繼テ墮ツ、然レトモ死人ニテ塹中埋マレタレハ、是ニテ死ヲ脱シ城外ヘツタヒ出ル所へ、富田越後守前年追放セシ臣濱名小源太ト、安彦半兵衛行合フ處へ、乳母コレハ御臺ナリ、茶臼山マテ送ラレヨト云、ヨリテ駕ニ乗セテ昇キ送ル、之ヲハ忠節トナシ、江戸へ出テ上聞ニ達スレハ、江戸ニ止ラハ、千石賜ハルヘシトテ、安彦ハ江戸ニ止ル、濱名ハ富田ニ怨ミアレハ、加州へ祿仕ノ命ヲ乞ユヘ、將軍ヨリ我公へ命アリテ加州へ歸リ、四百石賜ル、而シテ途中富田ニ逢フテ乗打スルヲ喜ヒ誇ル、然レトモ後貧窮ニ及ヒ、馬ヲモ持コト能ハス、此時内藤助右衛門、速水武左衛門ナト、番所ニテ、イラヌ腕立シテ千石取損ズトイヘハ、濱名後悔スト、三壺記等ニ見ユ、小源太ヲ三壺記ニ彌五左衛門ニ作ル、今ノ榮太郎ノ祖ナリ、

〔鍋島勝茂譜考補〕 四 大坂夏陣

小督等千
松平忠明
千姫ヲ迎
フ

今度大坂落城ノ時、秀頼公ノ北ノ方難ヲサケテ大堀ノ内ニ遁レ玉フヲ、小督其外ノ侍女二三人コレニ從ヒケリ、時ニ松平下總守此體ヲ御覽シ、急キ行テ御介抱アリ、家康公大ニ總州ノ功勞ヲ賞セラレ、三人ノ侍女ノ中ヨリ

家康小督
ヲ忠明ニ
賜フ

小督ヲ撰テ、下總守室トシ玉フ、小督父ヲ藤本太郎右衛門ト云、此女幼年ヨリ大坂城中ノ侍女トナリ、秀頼公ノ北ノ方ニ仕ヘシナリ、此女腹ニ忠直公御室慧照院殿御出生アリ、又光茂公ノ傅母ニ小倉女ト申セシハ、此小督ノ伯母也、藤本系圖

〔視聽混雜錄〕

元 同八日大坂落城、秀頼公及諸臣等咸伏誅也ト云々、或分散闕落之中、大將分或不卑俗者、追日搔出サレ、大概梟首タリト云々、同日城

刑部卿

擲灰燼タリ、其已前ニ、御臺後號天壽院公尼、同大局刑部卿内藤兵庫庫姊、御臺ヲ介抱シ奉リ、追手櫓門之下ト石壁之上ヨリ、負背シ奉リ飛降玉フトカヤ、其節寄

手之勢中ヨリ、坂崎出羽守早刻馳寄働有之トカヤ、後録ニ粗見畢、

〔老談一言記〕

十五所收 遺老物語 辰二年 正徳ノ二月廿九日、文廟公徳川家宣此

仰テ、天壽院殿よつゝあへし松坂ハ、今此越知民部祖母也、大坂落城の時、十四歳よてありし、天壽院殿を淀殿びりとつきそひ給ひ、事急あらはさし殺し參らせん様子ありし、矢倉ふ上りて、淀殿御側よ居よりてお目せし、可然御運よや、誰とあはしに、秀頼様御自害よて候と申せし、は、淀殿御自害ハ時まさそやしとて、つねたちて矢倉を下り給ふ間、女中ぬとんを以て

淀君千姫
ヲ抑フ

侍女松坂

元和元年五月七日

九九〇

天壽院殿を卷て、矢さは押開ておとし參らせし時、松坂も石垣をつとふて下り、残りの中もおあしく石垣を下り、お目せんとせし處、淀殿歸り給へ、かゝる見へし、堀内主水御供して、岡山へ入まいらず、松坂ハ武者の通ルをよひうけて、其、馬のせらまて御供し、多の死骸の上あとをとりて出さりし、其後大雨の時に、簀を着る馬のりて京へ參りしといふ、天壽院殿かけさせ給ひし天神の御筆の法花經こそ、去夏見せしめし物よて、故殿へ御ゆつとありしなり、此松坂、ちかくまで在なり、いとけあき時、大坂城中の物語せしをき、し、いとけあき故く、しくハ覺へ、人々の人物杯をよく見おへて語り、城中美麗あふ營作の事物、うさりせしとの仰あり、

〔柳營婦女傳〕

天樹院殿御局 十 松坂局御由緒傳

松坂局ハ兄弟三人アリ、一人ハ上方比丘尼御所ト成リ、一人ハ紀州ノ松平左京大夫頼純ノ實母、後剃髮淨ノ一人ハ松坂局也、此局始ハ天樹院殿ニ御奉公イタシ、名ハチヨボト云、其歳ハ天樹院殿ニ一ツ劣リ也、大坂落城ノ時、朱三矢倉ノ舖藏二間ニ五間ノ所ヲ三ツニ仕切、兩方ニ秀頼公ト淀殿天樹

院殿トヲ分チ置、中ノ仕切ニ女中ヲ籠置、此時淀殿ハ天樹院殿ノ御振袖ヲ自ラ膝下ニ敷居、質ニ取玉フ心ニテ少モ離サス御坐ス處ヲ、刑部卿ノ局才覺ニテ、女中ノ内ヨリ、唯今秀頼御生害ノ様ニ、秀頼ノ名ヲ呼ラセシカハ、淀殿驚キ周章テ、天樹院殿ヲ不計放シ、秀頼ノ方エ欠入ラル、其間ニ刑部卿御側女中僅二三人計ニテ、此場ヲ御立退キ成サレ、岡山ノ御陣所エ遁入り玉フ、此時右ノ於チヨボ、如何メカ御跡ニ下カリ、天樹院殿ヲ見失ヒ、漸ク城中ヲ落出、或ル陣所ノ前エ行テ、天樹院殿ノ御退キ方ヲ尋問ヒ、其教ニ任セテ、岡山ノ御陣所エ赴キ、天樹院殿ヲ尋ネ附キ奉リ、夫ヨリ御供ノ二條ノ御城ニ入り、又關東ニ下向アリ、此趣キ常ニ於チヨボ物語ナリ、此御由緒ヲ以テ、後年迄天樹院殿ニ御奉公申シ、松坂局ト名ヲ改稱セラル、然ルニ清揚院殿○徳川ニハ大猷公家光 四十二ノ御歳ノ二ツ子タル俗忌ヲ避サセラレ、天樹院殿ノ御養子ニ成サレ、松坂ノ局御素立テ申シ局ノ部屋エモ、後々マテ毎度御入成サレシ也、此時局ノ召仕女中御意ニ入、御子文昭公家宣○徳川ヲ諸ケ奉リテ後、此女中又間モ無ク懷妊シ、御廣メモ餘リ敷ク、何レモ取計ラヒ、兎角ニ公家侍ナトノ筋然ルヘキ方エ可賜トノ沙汰ニテ、姪身ノ五ヶ月

元和元年五月七日

九九一

侍女ヲ感
智與右衛
門ニ賜ハ

與右衛門
松坂局ノ
弟分トナ

元和元年五月七日

九九二

目ノ時、此女中ヲ御家臣越智與右衛門エ下サレ、與右衛門方ニテ出生ノ男
子越智民部後從四位下侍從松平右也、此産後氣色重リ死去アリ、是ニ依テ
右女中ノ姉天樹院殿ニ直御奉公勤シヲ、右ノ出生ノ小兒介抱養育ノ爲ト
テ與右衛門エ下サレ、嫁ノ後ニ二人ノ娘ヲ出産アリ、右ノ縁ヲ以與右衛門
事松坂局ノ弟分ト成、其一跡ヲ貫ヒ自分ノ祿ノ高ニ入、都合三千石ヲ領セ
シ也、松坂局長壽ニテ九十一歳ノ時死去、本所石原ノ妙源寺ニ葬リ、墳墓ア
リ、此故ヲ以テ越智家ノ菩提所モ、今以テ妙源寺ノ由ナリ、
一説ニ、松坂局ハ水野監物忠善ノ家臣二本松右京義繼カ女ナリト云云、
追テ考フヘシ、

〔元和年錄〕

乾 元和元年八月中略、八月二十日、千姫江去五月七日、城炎

上之時、秀頼御袋より、女房二人刑部卿局、侍二人、堀内主水、等を御附、御所様
之御陣へ御送り被成候、五月八日、二條へ御移被成、同九日、伏見へ御座、御供
よ參候、左門主水兩人ハ、將軍様へ被召出、知行五百石令拜領候處ニ、南部左
門之、本南部信濃守家來ニ、深きかまひ御座候て、中く達る御訴訟申上
候間、不被召出、黄金五十枚被下る、此左門事、元來信濃守小小姓より仕とて

南部左門

左門舊主罪
部利直討
手南門久
遺左衛門ヲ

左門大坂
ニ籠城ス

久左衛門
モ亦大坂
城ニ入ル

左門南部
利直ノ構
出サレ召

申候處ニ、重科仕令欠落、京都ニかくれ罷在候間、南部信濃守、何とそ尋出し、
可致成敗由申付、南部久左衛門と申者を京都へ指上せ置申、右之左門を結
らひ相尋罷在候、其比大坂殊之外さるち申候ニ付、左様之浪人躰之者京
都に徘徊申事、伊賀守堅御法度ニ申付候間、久左衛門京都居住不叶、溝口外
記久敷知人ニ、多候間、久左衛門方より外記を頼申候ニ付、溝口外記右之様
子委細存候間、此者南部信濃守家來ニ、左門打手ニ罷上候處紛無之候、以
來惡事も候ハ、我等ニ御懸リ可有由、板倉伊賀守方へ一札を遣し候間、伊
賀守、無相違久左衛門京都ヨリ置被申候、然る右之左門大坂へ令籠城、扱
又久左衛門も奥州之方よて、人之存知さる者ニ候間、大坂より色々すうし
音信をいさし、高知之朱印を秀頼へ給はり候ニ付、久左衛門主之使ニ、乍參
大慾をかまへ、忽大坂へ入、彼左門と令和談、一組之組頭仕候、今度大坂落城
之後、南部信濃守此旨達上聞、彼久左衛門尋候へ者、落城之時丹波へ落行か
く罷罷在候を申上、召捕候て侍の法を背候付、京都を引渡、火あふりし仕候、
右之外記一札、伊賀守方より出申候間、外記ハ改易仕候、南部左門を根本
の罪人候間、南部信濃守達ニ申請、成敗可仕旨言上仕候得共、今度御姫様之

元和元年五月七日

九九三

元和元年五月七日

九九四

御供申、御陣中參候事無比類御忠節ニ多、左門命を御助、金子致拜領、浪人ニ
多紀州へ參候、主水ハ被召出、御知行五百石被下、其上主水兄之堀内若狹と
申者も、大坂令籠城、落居之後大和口ニ多生捕候て已ニ成敗ニ及候處、弟御
忠節仕候故、命を御助被成追放也、

〔熊野巡覽記〕

伊○紀 新宮 附城○中 新宮城主安房守堀内氏善者、紀州之

人新宮十郎義盛之後裔也、刑部大輔氏綱、刑部大輔氏教、壹岐守氏家、主水正
氏忠、隱岐守氏定、宮内少輔氏光、安房守氏虎、宮内少輔氏高、安房守氏善、十世
相續、住新宮、氏善不應羽柴秀吉、舉族據新宮城、後和睦而仕秀吉、慶長庚子
之亂、黨石田三成、除封、氏善之子若狹守行朝、慶長十九年冬、屬淺野氏、翌年有
故、率兵五千、入大坂城、屬秀賴、其弟新宮左馬之助、堀内大和守、堀内主水正久
氏亦入城、五月七日城陷、久氏自里郭逃出、有婦人數十人、呼曰、救我輩、則佗日
有厚賞、是乃秀賴之夫人天壽院而、江戸將軍之女也、久氏乃奉之、遁于茶白山
陣、亂平賞功賜食祿五百石、赦堀内一族罪、

新宮鵜殿村の人鵜殿藤助ハ、堀内主水正ハ一族也、主水と同時、秀賴公御
簾中を奉守護、茶白山御陣へ立退し事、神妙ハ思召、鵜殿村千五十石、秀忠公

ハ永代御朱印頂戴也、此御朱印新宮社家鈴木眞學坊所持也、眞學ハ鵜殿一
族、よて元祿年中迄、鵜殿地の代官也、新宮矢倉明神此山を砦と唱ふ、是ハ鵜
殿孫三郎ハ砦也とぞ、鵜殿石見守ハ名跡、元祿十三年ハ斷絶、領地千五百拾
石當國御領と成る、

〔落穂集〕

五十 略 ○上 秀賴公ハ一先ツ天守へ上られ、程なく下り給ひ、月見

の矢倉より、芦田曲輪此矢倉へ取入被申候と也、其節御臺所ニも御同道有
之候所、大野修理御介抱申女中に向ひ被申けるハ、最早如此の次第ニ成
申さる儀ニ候へハ、御前様ハ御城外へ御出被遊、大御所様へ御願被仰上、
秀賴様御父子の御身命御恙無御座様ニ御取計ひ被遊被進可然との義、
付、御供の女中も口々に、修理被申上候通り、被遊被進御尤ニ候よ、申ニ
付、夫より城外へ御出被遊候へ共、其節大臺所ハ燒上り、城兵共うろろへ騒
き、拔身の長道具を携へ走り廻り候ニ付、御供の女中を初め、身を縮め、あ
るきり、高石垣の下へ寄集り、御姫様を中、取包居候處ニ、紀州熊野士ハ
堀内主水と申者、新宮左馬助と一所、冬陣の頃より城中へ罷在候、右
の石垣此方を見やり候へハ、廿八計の女中ハ中、白地ハ葵の丸此ちらし

元和元年五月七日

九九五

治長米村
權右衛門
ヲ遣シ千
姫ニ秀頼
母ノ助命
願ハシム

坂崎出羽
守千姫ヲ
警護ス

此付候うつきを着被申さる女中方の御座候よ心付、主水走り寄、誰人そと尋候へ、關東の御姫様よ候、御用有之城外へ御出被遊候儘、御供被申候へとの儀ふ付、左候へ、御供可申上とく、主水御先へ立く人を拂ひ罷出候處へ、坂崎出羽守參り逢ひ御供仕り候由、其節大野修理の家老米村權右衛門義ハ、修理側をえまはに供仕り候處ふ、御臺所御立退被遊候以後、修理權右衛門を招き寄せ、其方儀ハ、いそぎ御臺様へ追付奉り、我等娘を以可申上候、先程申上候通り、今日此内夜中迄の間、御願の相立候様よ可被遊候、兩御所様へ御直に御願にて、事濟申間敷之間、本多佐渡守へ御願可被仰上此由、能々申上候様ニと有之ニ付、權右衛門申候ハ、只今此時節ニ臨み、御城外への御使と有ハ、心外の至候と申候へ、修理不興致し、我等の申付候儀を違背仕り、とへ手前一所、相果候へ、とく、夫を不足と思ふへき、秀頼様御父子の御助命と有ハ、重き儀にあらはれやと申て叱り候ニ付、夫ハ權右衛門走り出、大手此堀端ふ於、追付奉る處、坂崎ハ人數とも、女中方を取包ミ罷在ニ付、權右衛門ハ、出羽守側へ立寄、其段を申候へ、貴殿の儀をハ兼く聞及候、急き其旨を被申上可然候、幸此事ハ候間、其方ニハ女中方

家康千姫
スノ請ヲ許

秀忠千姫
悦ノ脱出ヲ

千姫等農
家ニ宿ス

ニ相交り、御供被致候様ニと、坂崎差圖之由去ふ依、坂崎ハ、佐渡守陣所を開合を、御供仕り候處ニ、茶白山と天王寺との間、佐渡守家來共一所ニ集り居候近所ニ、百姓の家有之を幸ふ、御姫様の御座所ふ致し、坂崎ハ人數を以、四方を警固仕り、茶白山へ佐渡守を呼ふ遣ハし候へ、早速山うこよ乗り來り、御願の旨を承り、則茶白山ハ參り、被申上候處ニ、大御所様ハ、お姫御願と有ハ、尤の儀也、秀頼父子を助け置され、とく、何程の事ハ可有おられハ、お姫願の通り、致し可置間、其方ハ岡山へ罷越、將軍へ其旨申候へとの上意ニ付、岡山の御陣營へ佐渡守被參、御姫様御願之趣、大御所様仰の趣共被申上候へ、將軍様ハ、以の外御機嫌悪く、いれさる事計をぬりし、何りハ共、秀頼と一所、罷在、相果ハ不致し、と迄の仰にて御座候故、佐渡守承り候、大御所様此思召次第ニ被遊、おと御尤ニ御座候と申上ら、直ニ陣所へ歸り、兩御所様御聞届此上ハ、御安堵被遊、御膳をも被召上候様ニと、附々の女中方ニもあ、めあ、と被仕、御伽被致候様ニとの儀ニ付、女中いつきも悦ひ候由、權右衛門儀ハ、爰元ハ誰も男きれ無之候間、其儘相詰居申様よと有之、其夜ハ右の百姓屋の片脇、在之牛部屋の内へ罷

在御膳下の由ふて、御食御酒被下置候ニ付、少の間休息のさめふせり居候
 り、數日の辛勞故り、只一眠も致し、翌日此晝前目覺め候へ、修理娘も付居ら
 る自分の娘も様子を相尋候へ、間違の儀有之、御城内にて、上々様方不
 殘御果被遊候との儀を御聞被成候へ、御臺様もも殊の外なる御歎き此由
 修理娘も立出、泣々被申聞候ニ付、權右衛門大きも驚承合候へ、城門にて
 の義、昨晚方御旗本の諸組へ、勤番被仰付、出入も不罷成候との事故、其
 儘御姫様の御方ふ罷在候よし也、

天樹院様大坂城中より御出被遊候次第、右之通の譯紛も無之候處、今
 時世間流布の舊記等ニ、御未練ゆへ、淀殿、秀頼卿あつ一所も御滅亡を
 御厭ひ被遊城中を御落出候如く書記し有之候、勿論御女姓様の御事ふ
 も在之候へ、其通りの御事ふ、有之候得共、御未練うぬしき儀も無御
 座候處に、末代迄の人口も御懸り被成候と有も、御本意あらざる儀あり
 と存るニ付、我等の承り及ひざる趣を、此末も書付候也、右申米村儀、主人
 修理娘、天樹院様へ御奉公申上居申候ニ付、其身浪人よて罷上り、折々御
 屋敷へ罷上り候へ、大坂以來御聞及ひのちの故、天樹院様にも御懇よ

千姫ノ態
 度ニ關ス
 ル風説ノ
 辨

權右衛門
 ノ女治長
 死ス

權右衛門
 剃髮シテ
 權入トイ
 ヒ妙心寺
 嶺南ニ參
 ズ

權右衛門
 ノ履歴

被遊御金衣服等の拜領物あつとを被仰付候と也、然るも修理娘虚勞の如
 くある煩を仕出し、種々養生此儀御世話被遊候へ共、耽り無之、存生の内
 親の寺詣あつとをも仕り相果度との願も付、御暇被下候節、權右衛門を御
 呼被成、其方召連上り、随分養生をも致し遣し候様よと有之、關所手形道
 中雜用等をも潤澤も被下置候ニ付、自分の娘共も召連登り、種々保養を
 相遂候へ共、快氣無之、修理娘相果候ニ付、都妙心寺よて取置火葬し仕候
 節、權右衛門へ用事有之、方丈に罷越候、其跡よて娘火葬の火の中へ飛入、
 棺も抱き付燒死候ニ付、灰よせを致し候節、主従の骨の見分ケ無之候故、
 一所よ仕て高野山へ持上り、骨堂へ納め、則頭を剃權入と名を付、京都妙
 心寺内嶺南和尚も隨身致し、江戸へ罷下り、芝東禪寺此衆寮も罷在、寺
 内の掃除あつと仕り罷在候處、或日東海寺の澤庵和尚と同道よて、淺野因
 幡守治長殿に振廻り入來候節、澤庵和尚被申候へ、御亭主も随分の人
 數寄ニ候へ共、嶺南和尚の持まざる如くなる人を、御持ある間敷と也、
 因幡守殿聞き、夫何と申者ふて候哉と被尋候へ、澤庵和尚宣ひたる
 へ、大野修理り家來米村權右衛門と申者有之、其者修理配所への仰をも

元和元年五月七日

一〇〇〇

相勤め、關ヶ原合戦の刻、浮田中納言家來高加七郎左衛門と申者を組打
ふ致し、其後大坂冬陣御和談の刻、城中織田有樂、大野修理方、物よ心得
候侍壹人ツ、差出候様ニと有之、有樂方より村田吉藏、大野方より米
村權右衛門、兩人義度々、城中より罷出候、和談相濟候前方、茶白山御陣所
於、兩人共に御目見被仰付刻、權右衛門義、御前を不憚段々の次第を言
上い、し、罷出仕候跡より、大御所様、米村義を殊外なる御賞美の由、其權
右衛門、今程の男を止め、嶺南和尚方より罷在候と也、于時因幡守殿被申候
者、其權右衛門の世間より隠れおき者よて候、拙者召抱申度候、修理よての
宛行を、御存知おく候哉と有之候へ、兩和尚共に、先知り、貳百石の由
聞及ひ候と御申候へ、因幡守殿聞き、然るに於、り、四百石遣し可申と
也、澤庵和尚、逆の義より五百石御やり候へ、かしと御申候へ、五百石と申
知行高ニ、ちと指合申子細も有之間、其替り、足輕を預ケ、道心者の躰
よ候へ、腰刀も有之間、敷候間、時分月迫より候へ、共、當年の物成を不殘
支度料より遣し可申との義よて、身上相濟、因幡守殿家來と罷成、八十有餘
の年齢迄、無病息災よて、物頭役相勤罷在候、然る所へ、同家中より旗尾又兵

選俗シテ
淺野長治
ニ仕テ

薄田兼相
ノ舊臣
又兵衛

又兵衛千
ノ行動
ヲ難ズ

權右衛門
ノ幕府ニ
訴ヘテ
惡名ト
スガント

衛と申者、町奉行役よて罷在候り、此もの義も、薄田隼人正近習を相勤罷
在候、差ゑ武功とて、無之候へ、共、利發成者ゆへ、因幡守殿目を懸被仕候
り、或時件の又兵衛町方此用事より罷出候刻、大坂一戦之義を、因幡守殿
被申出、落城の日、天樹院殿城中を御出被遊候儀を、被相尋候處、又兵衛
承り、世上よての取沙汰之通り、淀殿、秀頼卿と御一所よて御座可有儀を、
御女中様と、乍申、御不甲斐おき御事より、其砌より申觸候由、物語仕
候と也、程過候て、權右衛門是を承り、大きき腹立仕り、家財諸道具迄をも
悉く取片付、其上より申出候へ、旗尾又兵衛儀、去ル頃御前より於、天樹
院様御噂を申上候段承り傳へ、其通りよて、難差置子細、天樹院様城
中を御出被遊候儀、秀頼卿御父子の御助命の義を、御願ひ被遊候様よ
と有之義を、修理達より申上候ニ付ての事ニ候處、又兵衛申上候趣、有
之候て、天樹院様より御惡名を取らせ申候と有、修理より身よ致して、
迷惑と申物より候、ケ様の片田舎に於、り、又兵衛を相手よ仕り、御裁許よ
預り候分、世上への申譯よは、不罷成候間、私儀より御暇を申請、江戸表へ
罷下り、公儀へ相願、天樹院様御耻辱此申譯を、不仕候て、故主修理への

元和元年五月七日

一〇〇一

元和元年五月七日

一〇〇二

私奉公相立不申候と申ニ付、家老山田監物、八嶋若狹も大きふ難義致し、
内證ふく種々申聞候ても、米村得心不仕候よ付、因幡守殿へ其段申候へ
ハ、又兵衛方へ内意有之候ハ、其方故主薄田事ハ、五月六日、道明寺表よ於
く、後藤と一所よ討死の義あまハ、隼人組下此士の義ハ、城中へも引入、家
來共の義ハ、六日の晩方城中を立退候由也、然まハ、天樹院殿城中へ御出
候儀ハ、七日の義あれハ、直ふ可存様とてハ、無之よ付、定く世上一同の取
沙汰の通りを聞の儘申さるよて有へし、然ハ其方如在も無之儀あまハ、
權右衛門へ其段理りを申、合點致させ尤も候、同くハ内々ふく事濟候
様よ有之度事よ候、左様候へハ、我等の爲よ候との儀よ付、又兵衛能合點
仕り、近頃不調法の至り迷惑仕り候との儀よ、權右衛門堪忍仕り候由
也、右の次第を以考へ候へハ、天樹院様御未練ゆへ、城中を御出被遊候と
有之説ハ、大きある相違と可申候也、右堀内主水儀、御旗本へ被召出、我等
若年の頃迄無事ニ罷居、我等親類水野如心齋と申者の方よ於く、節々出
會致し、物語あとも承り申候、子孫今以御旗本ニ被居候也、

〔正武將感狀記〕

七

米村權右衛門養育大野修理之小女事

權右衛門
治長ノ女
ヲ養育ス
權右衛門
大坂城中
ノ金銀財
寶ヲ問ル
答ハズレ
テ行ハル

家康ノ
剛氣ニ感
服ス
淺野長治
ニ仕ス

米村權右衛門ハ、大野修理亮治長ガ草履取ナリシカ、大坂一亂ノ前ニトリ
立テ士トナシタル者ナリ、才器勇力アリケレバ、治長ガ恩顧ヨノツ子ナラ
ズ、大坂没落ノ後、米村治長ガ遺言ヲ受テ、密ニ其小女ヲ養育シテ、匿居タリ
シヲ、囚テ江戸ニ到ル、於殿中、大坂ノ金銀財寶ヲ問ル、ニ不知ト對、汝修理
カ寵士ナリ、何ゾ不知ト謂ンヤ、不知ト云ハ、責テ問ト云フ聞テ、米村額ヲ
地ニ付テアリシガ、頭ヲアゲテ、是ハ御奉行衆ノ御詞、臣不覺候、拙夫ハ鄙賤
ナリシヲ、今ハ士ノ數ニ入候、修理大坂ニ在テ、軍陣ノ成敗ヲ司リ、運命ノ存
亡ヲ社且晡ニ計リ候へ、嘗テ金銀財寶ヲ心トセズ候、是以テ修理ガ部下モ、
亦敵ヲ擊首ヲ取ントノミ思テ、他ノ慮ヲナスニ違アラズ候、以理申候ニ、城
中戰ニ負ル時ハ、首領ヲモ不保、千萬ノ財寶アリ、臣何ニカ用候ン、如勝軍ナ
ラバ、兩將軍ノ御腰物マデ、皆我儕カ有ナリ、財寶ヲ不求シテ、財寶ニアキミ
チ候ハン、且可申ノ義アラバ、即坐ニ申サン、可申ノ理ナクハ、口ヲ裂舌ヲ拔
レテモ可申ヤ、責テ問トハ、何事ゾト、憚氣色モナク申ケレバ、源君聞召、カレ
ハ無類ノ剛ノ者ナリ、彼ガ如キ者ヲ兵衛常陸ニモ付置タキ事ナリトテ、則
御赦免アリ、米村、後淺野因幡守長治ニ仕ヘヌ、衣服飲食ヲ賤クシ、武具ヲキ

元和元年五月七日

一〇〇三

ラビヤカニス、治長ガ小女ヲ京師ニ置テ育事懇情ヲ盡セリ、因州ノ祿ヲ受タルハ爲之トゾ、

〔翁物語〕

前集 四

或人語曰、大坂籠城之時、從城内度々忍ヲ出シテ寄手ノ責ヲ計ラントスルニ、所々ニテ囚レ、或ハ坊主ニナシ、又者耳鼻ヲツキテ城内

エ追歸スニ付テ、重テ出ント云者無シ、爰ニ大野修理カ被官ニ米村權右衛門ト云者アリ、頃日忍ニ出ル者ナフシテ、城外之沙汰不聞、某出テ様子可承シトテ忍出テ、諸手之陣ヲ廻リ、其ヨリ堺エ行テ様子ヲ聞歸ルサニ、生鯛ノアリツルヲ見テ、城内ニ海肴拂底セリ、此肴ヲ買取テ如何ニトシテ城内エ持可行ト思、其鯛ヲ買取テ、兩之袖ニ入レ、堺ヨリ大坂エカヘルニ、道ニテ本田上野介ニ行アヒタリ、日頃此權右衛門、上野介エ度々使ニ行而、別而知人ナリ、笠も不着シテ行ケルニ、ヒシト行カ、リテ、センカタナクカタ目ヲツフシ、腰引ニ成リテ通りタル故、上野モ不見知シテ、其難ヲノカル、然者權右衛門カ忍ニ出タル跡ニテ扱アリテ、明ル日ハ和平之御使ノ往來有之ニ定リヌル夜、權右衛門忍ヒテカヘリ、諸手之趣、大野修理ニ申聞テ、ソコニテ右生鯛ヲ出シテ修理ニ與フ、修理不斜悅テ、一ツヲハ秀頼公ニ獻ス、一ツハ諸

權右衛門
忍ニ出デ
生鯛ヲ携
へ歸ル

和平ノ使
者ニ生鯛
ヲ饗ス

組頭ニ料理セントテ、振舞ヲ催ス、其朝家康公ヨリ御和平之爲使ト、京極若狹守母儀同道ニテ城内エ指越ル、并ニ市井殿ニ本田上野之介使ニ指添テ、以上四人ノ御使也、右之御使ニ城内ニテ料理ヲ玉ルニ、右之生鯛ヲ料理ス、御使歸テ家康公江籠城ニ珍敷生鯛ノ料理アリシト申シケレハ、家康公被聞召、此肴ニ付テ、寄手ノ内ヨリ内通之者モアリヤト深ク不審ヲ立玉フトナリ、偏ニ是米村權右衛門カ才覺之故也ト聞及タリト語ル、

按之、米村權右衛門功ノ入タル者ニテ、忍ヒ出テモ初ノ者如ク人ニ不囚、亥手柄ナリ、剩ヘ和泉ノ堺エ越シ、世間之様子ヲモ聞、生鯛ヲ買取カヘル心サシ深シ、道ニテ本田上野之介ニ逢ヒ、俄ニカタ目ヲツフシ、腰引ニナリタル智恵フカシ、定テ城内ヲ出シ時ヨリ、形ヲ變シテ所々ヲ見廻リタルモノ成ルヘシ、人目ヲ忍フ躰ナラハ、笠ヲ着スヘキヲ着セハ人ニアヤシメラレヤセント思ヒテ、笠ヲ不着セモノナレバコソ、上野介ニ逢タルトキ、片目ヲツプシツラメ、形ヲ替テアラハレテ徘徊セシモノナルヘシ、忍ベハ却而人ウタガヒ、不忍レバ人ウタカハサルカ如シ、是トテモ計策計ヲ頼ムニ非ス、偏ニ一命ヲ君ニ投ト不思シテハ、可成業ニ非ス、侍タ

今木源右衛門

源右衛門常高院二位常高院常高院二位常高院

源右衛門前田家二

ル者ノヨク心ヲ付工夫シテ後學ニスヘキ莫ノ端ナルヘシ、

〔老談一言記〕

語一〇遺老物

略

上 淺井の家、淺井絶あハ長門繼へしと

云傳て淺井の長門といひし者あり、淺井没落せし後、又淀殿の繁榮ありし
ウハ、大坂よ仕へる名乗を改めて今木源右衛門と名乗し、今木をいまきと
とあふへきなるよ、コンボクととあふといふハ、今木も又近江あとの地の
名の、又ハ源右衛門新恩よて領せし地の名あつたあし、とて此源右衛
門ハ、淀殿よ近き人あまハ、大坂落城の時ハ、是も淀殿供して糶藏よこも
し也、然ル處よ、淀殿より大御所様に御使あり、四人といふ、京極の常高院、一
人ハ二位尼、一人ハこの源右衛門、腰一人ハとよヤ、淀殿ハこれよていあよ
もあり給へし、まくれえた、いあよもよても、秀頼の御一命をを申請
ハる、由也、既よ倉を出る後ハ、えや糶倉よ火か、まをへきやうあしと
て、此の使の人々の、ちりく、よありぬ、此後は源右衛門ハ北國加賀の家へ
仕へ、千石迄領し、淺井源右衛門と名乗し、能士あまハ、利長の肥前殿へも
まよつけらましく、肥前守殿死去之後、腹切て死し也、こまハおもふよ大坂
よ死せざる事をよ無念よ思へとも、死所を得まハ、せんあよああ

しよ、かゝる時よ逢しを悦ひて死せしものと存び、この事ハゆめく、人よ
ひろく傳ふまよきと木下半兵衛殿被申由也、

〔吉備温故〕

三十一 干城十四

原田帶刀

五右衛門

田

原と一所

二浪人仕、原田攝

津へ引籠罷有候處、五右衛門死後、帶刀義ハ、石子紀伊守取次を以、秀吉公へ
被召出候、然共御知行被下候御定ハ無之、御藏米又ハ金銀等を度々拜領仕
候、其後秀頼公へ御附被成候、

原田帶刀

帶刀ノ千子
太郎助千
姫ニ侍ス

帶刀御宿
正友ヲ扶
持ス

原田太郎助悴之時、父帶刀一所ニ、秀頼公へ被召出候、幼少之者之事ニ御
座候へハ、天樹院様之御側へ被召寄、常ニ御碁あと被遊候御相手ニも罷成
候、其比大野修理方ハ、太郎助處へ、七月末躍をかけ申候、其様子天樹院殿御
耳達早速躍返仕候様ニ御意被成候、秀頼公醍醐花見之御装束を御借し被
成、金子等被下、右之躍返し仕候由、大坂陣之前方、於御本丸諸士大將之軍評
定有之場所へも祖父帶刀、父太郎助義、每度罷出申候、殊帶刀手前ニ指置申
候、三宿道悦与申者、若名ハ勘兵衛、寂前上杉景勝ニ罷有士大將仕、後ニ越前
与申候、若時分ニ權現様と兩度追合仕、於其砌手疵負申候故、左右之手とも
ふ不自由ニ御座候へ共、武功之者ニ御座候ニ付、軍評定之場へも、帶刀と彼

道悦を召連罷出申候、道悦も秀頼公へ被召出、人數をも引廻申候、夏御陣之刻、祖父帶刀、父太郎助父子共ニ、御本丸相詰候様被仰付候へ共、御先手を奉願候へ、然ハ早水甲斐守を御本丸ニ被指置候間、則甲斐守鎧をも、帶刀父子引廻候様被仰付、御先手ニ罷越候、大坂五月七日之御陣ニ、右之三宿道悦義、人數を召連、天王寺表よて打死仕候、祖父帶刀、父太郎助兩人ハ、人數を召連、東の假門ニ罷有、帶刀敵間爲見分ニ、算用場三丸迄乗出候處、大野修理南之方ハ、乘立參敵、競來候由を申、帶刀も左様ニ見及申と辭を合、一先請取所東之假門へ罷歸、御門を堅め罷有候へ、無程加州肥前殿之御先手、人數、大勢堀際へ着來候、此處之堀ハ、前方堀を埋、俄ニ懸置申候假堀候へ、殊外手薄敵容易乗入可申様ニ、相見申候故、味方敗北仕、僅十二、三人計り残り候處、櫻之御門之方ハ、敵亂入、味方之後へ廻り申候ニ付、右十二、三人計と見へ申、味方猶又散失、蹈留り居申者ハ、六人、吉松次兵衛、横井作右衛門、勝間半太夫、祖父帶刀、弟忠右衛門、父太郎助よて御座候、然ル處敵大勢押寄候ゆへ、右六人よて、逆此所持堅事難成見及申、帶刀致手段、鉄炮打申候へ、ほうろく火矢を放候様ニ罷成、敵大分打放、手負も餘多有之候ニ付、寄手敗走仕候、然

東ノ假門ヲ固ム

帶刀等ノ奮戰

帶刀ノ後妻正友ノ花房正成ト陣營ニ赴ク

帶刀等千姫ノ請ニセラル免

共其内ニ敵四人堀際ニ居残り相働候故、互ニ堀を隔鎧ニて迫合申候、折節敵方ハ突出申鎧を、太郎助堀越ニ押引取可申と仕候へとも、敵も鎧を放不申、互ニ引相候處ニ、横井作右衛門走參、此鎧の柄を切折申候、此鎧主ハ加州肥前守殿御内、黒坂吉左衛門と申者よて御座候、扱兎角仕内鎧合延申候故、祖父帶刀、父太郎助父子鉄炮を打申候へ、右四人之内、森權太夫、佐藤帶刀と申者二人ニ手負セ申候ニ付、殘兩人之者も早々引取申候、就夫勝間半太夫申候ハ、中々此處を引取申、咎ハ不存候、所詮此處よて打死仕と申候へ、殘者共も、何も尤左様と覺悟有之と申居敷罷有候へ共、其場へ敵一人も不寄來候、其内ニ早御本丸ニ火懸り落城仕候故、無是非立退申候、帶刀妻ハ則太郎助母花房志摩守成○正不遁者ニ付御座候ニ付、落城仕早々帶刀、志摩守方へ小屋へ引取申候、其節三宿道悦後家をも召連候、志摩守小屋引越申候、大坂落城以後、帶刀、忠右衛門、太郎助、此三人在所原田へ引籠忍ニて罷在候處、五月中旬、板倉伊賀守殿ハ、原田邊之庄屋共方へ、帶刀父子義ハ、兩將軍様ハ、御赦被成候間、在所へ參候ハ、罷出候様ニ可申、旨被仰渡候ニ付、則原田之庄屋を召連上京仕、板倉伊賀守殿へ御禮ニ罷成候へ、伊賀守殿御

逢被成御直ニ被仰聞候ハ、其方父子之義ハ、兩將軍様、天樹院様ハ再三御詫言被仰上候故、御赦免被成、其上御譜代御同事被思召候間、難有奉存、還御被遊候迄在京仕候得とも被仰付、則伊賀守殿ハ近藤源左衛門と申者御使ニて、御幸町四條下ル町彫物屋茂右衛門と申者方ニ旅宿被仰付被下候、其後伊賀守殿へ帶刀方ハ奉窺候ハ、天樹院様此度之御禮申上度奉存候由申上候處、御聞届ニて、將軍様ハ御同意御窺被成候へハ、勝手次第ニ參上仕御禮申上候、其後伊賀守殿へ御斷申、在所攝州原田へ罷歸り申候、花房志摩守方ハ在所へ帶刀妻を送歸候、此節も三宿道悅ハ後家召連候ハ、在所へ罷歸候、其後道悅後家ハ、阿州ニ不道者有之候故、參度由申ニ付、阿州へ送遣候、天樹院様有馬へ御入湯被成候刻、在所へ被仰下候ハ、此度御入湯被遊候間、有馬へ致參上、御待請可仕旨御意被成下候ニ付、帶刀父子任御意、妻子召連候ハ有馬へ罷越、御湯治之間相詰罷有、御湯ハ御揚り被遊、御發駕之刻、御時服金子等拜領仕、路次迄御輿之御供仕候へハ、於路次御暇被下罷歸候、其後帶刀ハ、在所原田よて病死、帶刀ハ妻ハ尼ニ成、榮心と申、帶刀義、黒田右衛門佐殿へ様子御座候ニ付、帶刀相果候段、右衛門佐殿へ御聞被成、世悴太郎助浪人

千姫有馬湯治ノ際ニ帶刀等之侍ス

東假門ニ於ケル武功者ノ詮議

横井作右衛門酒井忠勝ニ仕

ニ罷在、老母榮心迷惑仕候間、榮心ハ筑前へ參候様ニ御迎被下候ニ付、榮心ハ筑前へ罷越候へハ、居所被仰付、御扶持方被下、折々御呼出御對面被成候由、大坂陣已後御靜謐之時、於加州、西尾隼人、大橋市左衛門と申者兩人ニ被仰付、大坂御陣之刻、東之假門ニ踏留り働有之者共之穿鑿御座候處、森權太夫、佐藤帶刀、黒坂吉左衛門、大原文内、此四人假門ニ居残り働仕由紛無御座候、其後横井作右衛門方ハ、森權太夫方へ、自分之働之様子尋ニ遣候刻、父太郎助働よての義をも、荒増書付ニ尋ニ遣申候處ニ、無相違由、權太夫ハ返狀指越申候、吉松治兵衛帶刀、弟忠右衛門此三人ハ病死仕、扱横井作右衛門義ハ、大坂よて働有之由、酒井讚岐守殿被聞召、加州へも様子尋ニ被遣、相違無御座候ニ付、讚岐守殿へ被召出、于今作右衛門世悴、酒井遠江守様ニ罷有候、父太郎助働之様子織田上野介殿御内三谷數馬と申者方ハ、加州、黒坂吉右衛門殿尋遣候へハ、無相違由、其上、前森權太夫方ハ、横井作右衛門所へ返事之處を書寫、此度之返狀ニ指添、黒坂吉左衛門ハ三谷數馬へ兩通指込申候、則其節之兩通、只今ハ私手前ニ所持仕候、

蜂須賀至鎮、黒田忠之、福島正勝等大坂ニ抵ル、

蜂須賀至
家政京都
如ク

〔蜂須賀家譜〕 峻徳公 五月七日、公○至赴大坂、途望見城中烟起、疾馳詣茶
白山、謁東照公、遂詣岡山、謁台徳公、瑞雲公○家亦如京師、

〔森氏古傳記〕 三 森甚五兵衛村重、○中五月六日、吹飯ヲ御進在、○蜂須賀
軍ヲ大雨ニテ、同夜攝州住吉ニ御陣被居、翌七日、大坂落城ノ聞在依、御急御
出勢ノ所ニ、大坂落城ト見テ、煙夥敷住吉ト天王寺ノ間ニテ御覽在、猶々御
急在ケレ、○合戦ニハ逢玉ハサリケル、

〔淡路要録〕 路 淡 元和元年○攝戦ノ功賞ニ依テ、當國一圓ニ御當家○須賀
氏賜、

至鎮家康
ニ講ス

御當家譜曰、○陣スルコトニ係ル、七日○五月、晝時分彼地ヲ立テ罷登リ候所ニ、
火ノ手相見ヘ申ニ付、指急キ夜通ニ明ル頃、茶白山ニ伺公仕、八日ノ朝、大權
現様ヘ御目見仕、それより岡山ヘ參上仕候、○下

黒田忠之

〔別黒田家譜〕 五十 元和元年長政四十八歳、忠之十四歳、

五月七日、○中略、長政、加藤、嘉明、大坂既ニ落城しけれハ、忠之ハ近習の士計
召つて、大坂ヘ馳參らる、其餘の軍兵をモ、皆兵庫より筑前ヘ返し給ふ、

福島正勝

〔福島家系譜〕 正則○市松、左衛門、冬御陣以後、備後守國許ニ御暇被下置、夏

正則ハ在
江戸

御陣之節、早々大坂ニ可罷登之旨蒙仰乗船、五月七日午時大坂落城至着、
忠勝○始正勝、市松、備後守、母同、元和元乙卯年大坂夏御陣之節、左衛門大夫者
在江戸、備後守者在國之處、早々可罷登旨蒙仰、早速乗船、五月七日午刻過、大
坂落城後至着、

○蜂須賀至鎮居城ヲ發シ吹飯ニ到着セシコト、四月二十四日ニ、黒田
忠之ノ兵庫ニ陣セシコト、本月二日ニ其條アリ、各參看スベシ、

〔參考〕

〔勇士物語一言集〕 五 大坂陣此時、福島太夫殿在江戸より、子息備後守

殿あり大坂ヘむらひれなる、海路故ふ、五月七日落城の時、漸々兵庫ヲ着
給ひ参る、眞鍋五郎右衛門物見も出侍り参る、大坂天守ヲ火の掛りたる
を見、立歸秀頼御腹めいなるといひなれ、小關石見守是を聞、何とい
てり、えやく知給ひ参る、但又變化此を告さる、とたむふを参る、五
郎右衛門うちらひ、天守火のかゝりある、大將の腹をきりさるとの
言はなり、たとひ大將腹をきりたはハ、たとひ天守火のかゝりあるは、
大將の腹をきり給ふといひ、越度よあらずといひ侍し、

眞鍋五郎
右衛門天
守火ノ見
上ルヲ見
テ秀頼ノ
自害ヲ豫
知ス

松田下總
ノ指物

元和元年五月七日

一〇一四

松田下總といふもの老、福島太夫殿より奉公し侍りける、大坂冬陣の時、下總
と同一指物さしなるもの有し故、諸人さし物滾りへよといひ侍しりと、と
うくして其年の勤なり、夏陣の時、下總さし物をうへりけるを、眞鍋五郎
右衛門と云もの是を見り、さても能指物なりと認め侍りけしを、下總聞
されたり、去、去年さし物うへ候へといつても乃給ひ、軍半りいり、とおも
ひ、とやうくとくらしり、我と同じさしものさしる所のこよく見侍り
を、勇士よてこれれし、さあるにおおき、よぐるは必定なり、彼者述る時
さし物のまうひ、人々此取さともいり、とれもひ、うへ侍しやいひあるよ
し、

大日本史料 第十二編之十九終

補遺

補遺目次

第十二編之十九

元和元年

五月七日 茶白山岡山合戦ノ條

補遺

第十二編之十九

元和元年

○五月七日、茶白山岡山合戦ノ條、岡山方面ノ戦況、其二十本多正信竝ニ

其組、四四二頁、寛永諸家系圖傳ノ次、

〔石津龜井記〕

政一 政矩公傳

元和元年大坂御陣之節、鹿野ヨリ御出勢、城州伏

見ヨリ御供ニ而、本多佐渡守組ニ而御旗本前備組入、或日城中多勢一同不
意ニ打出鉄炮、打立惣掛リニ御旗本迄大騒動、當手之先手足輕崩込、既ニ旗
指迄散亂ニ及ハントセシ處、旗大將原田作兵衛踏止リ、小頭齋藤佐右衛門
ニ下知シテ、御旗ヲ少シモ不動相働キ、兎角之内關東勢一同盛返シ、敵兵ヲ
散々ニ打散シ、終ニ城兵敗走城中へ追込、其節當手ニモ敵首十三級、内一ツ
作兵衛打取、其砌政矩公仰ニ、作兵衛儀御先代ヨリ數度戰場へ被召遣、武功
立候ニ付、此度モ被召遣候處、今日不計變動之處踏止リ、御旗ヲ不動故、當手
一番ニ備ヲ立直シ、(神)心妙之儀ト御稱詞有之、其後五月七日、大坂落城、

龜井政矩

政矩ノ旗
大將原田
作兵衛ノ
働

○同條大坂方ノ戦況五六五頁、斷家譜ノ前

〔寛政重修諸家譜〕

五百 平野長治大炊頭、右京進

長時五郎左衛門

加藤主計頭につるふ、

長景九郎右衛門

長泰遠江守

長重九郎左衛門

長知彌次右衛門

某武右衛門

女子 豊臣秀頼の家臣眞野與次兵衛某の養女

長景 豊臣秀頼よつゝへ、大坂落城の時戦死す、

〔寛政重修諸家譜〕

九百三 古田重則吉左衛門

重勝少兵部

古田金次郎勝嘉の祖、

重忠半左衛門

重治大膳大夫

平野長景
戦死ス

古田重忠
戦死ス

重忠半左衛門

重直兵九郎

古田鍋五郎社堅の祖、

重弘平三郎吉左衛門

重忠 古田吉左衛門重則の二男、豊臣太閤及び秀頼よつゝへ、元和元年大坂城中に在り、五月七日戦死す、年四十八、法名玄霜、妻ハ瀧川豊前守法忠

の女、

大正六年二月十五日印刷
大正六年二月十六日發行



編纂者 東京帝國大學

印刷者 印刷局

發行所 東京帝國大學 史料編纂掛

(電話下谷二十四番)

大日本史料
大日本古文書
既刊目錄
(大正六年現在)

大日本史料(豫約價各册金參圓)

第四編(鎌倉時代)

第一卷至第十五卷
後鳥羽天皇治元
仲恭天皇承久三
年十一月ヨリ
至五月ニ至ル

十五册

第六編(建武中興及南北朝時代)

第一卷至第十四卷
後醍醐天皇元弘
崇光天皇正平六
年四月ニ至ル

十四册

第八編(室町時代)

第一卷至第三卷
後土御門天皇應
仁元年正月ヨリ
至十二月ニ至ル

三册

第十二編(江戸時代)

第一卷至第十九卷
後陽成天皇慶長
後水尾天皇元和
八年五月ニ至
ル

十九册

大日本古文書(豫約價各冊金貳圓)

編年文書

第一卷至第六卷 大寶二年十一月ヨリ
實龜十一年ニ至ル

第七卷(追加一)至第十一卷(追加五) 和平勝寶三年五月ヨリ
天平勝寶三年五月ニ至ル

家わけ文書

第一高野山文書之一ヨリ八ニ至ル

第二淺野家文書

第三伊達家文書之一ヨリ十(追加)ニ至ル

第四石清水文書之一ヨリ六ニ至ル

幕末外國關係文書

第一卷至第八卷 嘉永六年六月ヨリ
安政元年十二月ニ至ル

附錄之一、二

六冊

八冊

一冊

十冊

八冊

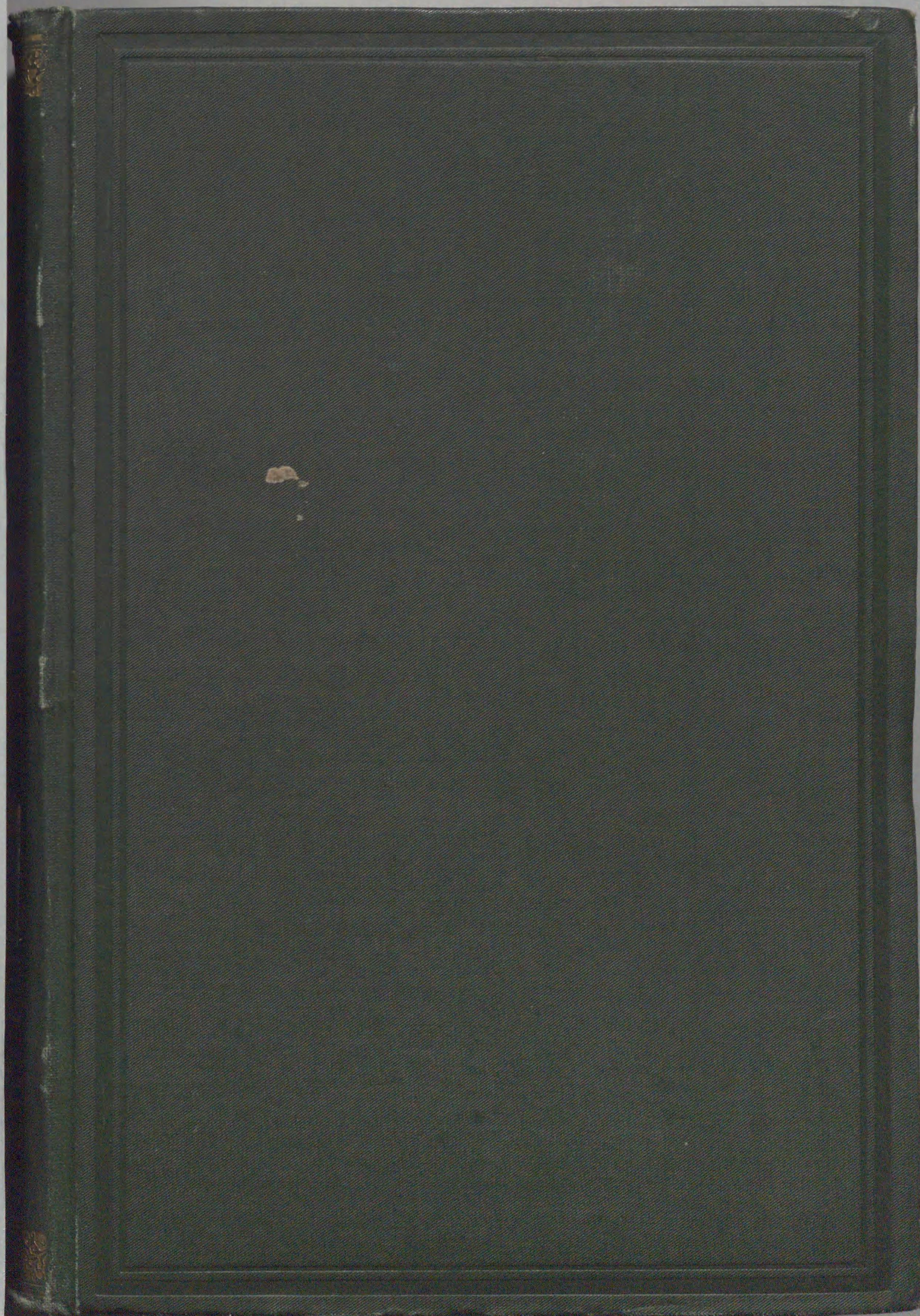
二

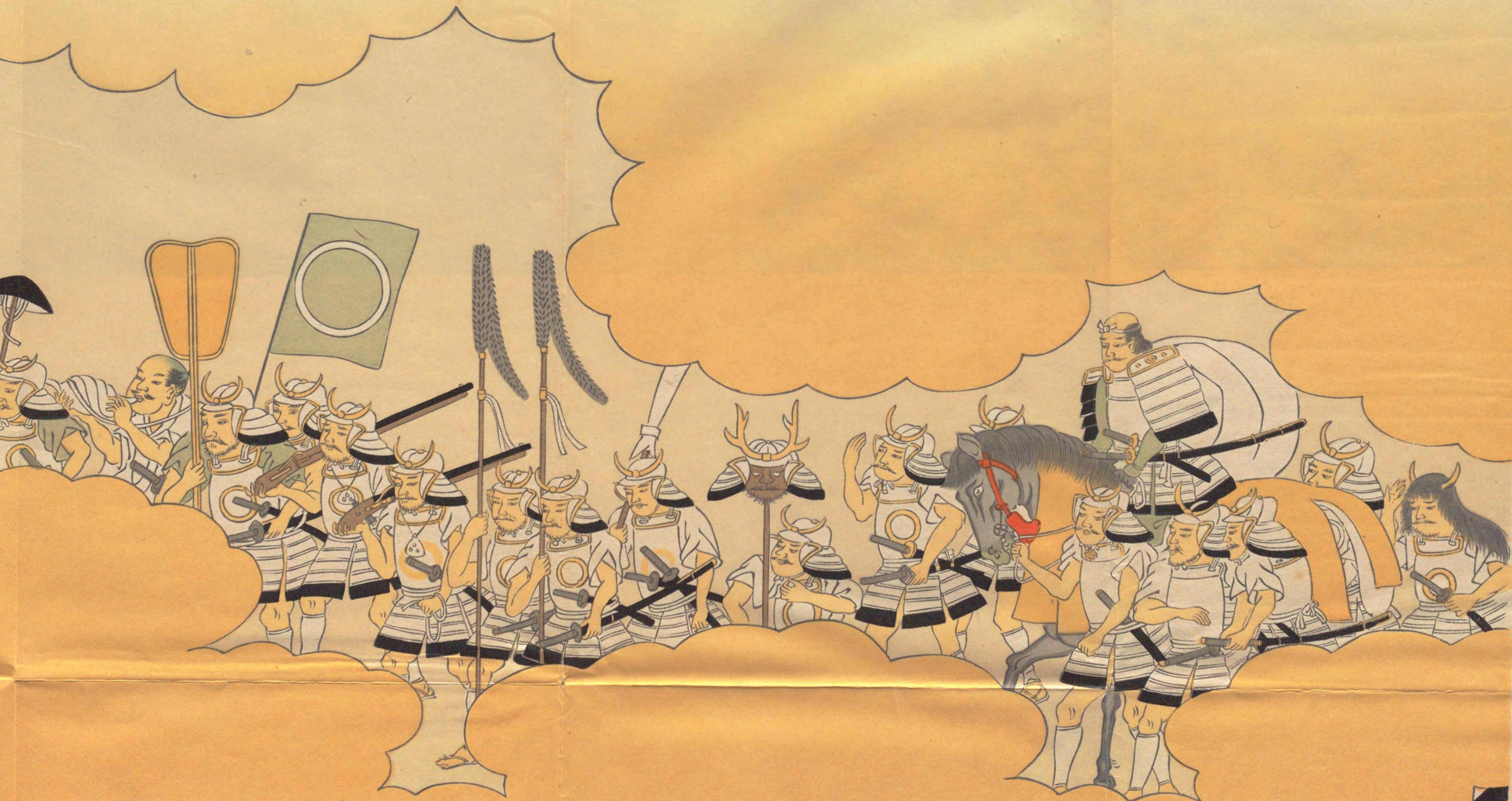
14.412
14.417

立国会図書館

東京都千代田区永田町一丁目10番1号
電話 (581) 2331・2341(代表)















大坂夏の陣の圖(最上屏風)のそ

東京帝國大學藏



大坂夏の陣の圖(最上屏風)のそ

東京帝國大學藏











大坂夏陣の圖(最上屏風)のそ

東京帝國大學藏



大坂夏陣の圖(最上屏風)のそ

東京帝國大學藏